

カタクリとシドが結婚
式をしている夢を見た

アルビノ鮫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

からそこに至るまでの話を考えてみた。

ONE PIECEのシャーロット・カタクリとゼルダの伝説ブレスオブザワイルドのシドが奇妙な結婚に至るまでのおかしな話。

*

そういう描写は書くつもりはありません。しかし題材が題材なのでボーイズラブ、アンチヘイトのタグをつけておきます

*

偉大なる航路（グランドライン）。無数の無法者が挑み、そして散っていく場所。

その場所の殆どは海で占められ、世界を四分割し横断する強大なる土地である赤い土の大陸（レッドライン）を挟み、新世界と呼ばれるその場所には無数の島々がある。

その荒れ果てた天候や海流に阻まれ交流さえ儘ならず何者にも干渉されない島々と人々は各々独自の進化を遂げていた。

それは燃え盛る島に住む岩を食べる種族。

それは天を貫くような巨木に寄り添うような木々の化身のような種族。

それは島そのものが海に沈み空を生きるように羽を蓄えた種族。

魔境に似た場所。そこに、一つの島がある。

島の名はラネール島、記録指針（ログポース）の航路に含まれない独立した島。

天から常に降り注ぐ雨粒が止む事は無く豊かな水が島全体を多いつくしており、幾本もの支流を作っていた。流るる水の合間に覗くのは水滴に濡れ光るほんのり青緑に輝く岩肌のみ。

その一帯の海は垂直に盛り上がるように立ち昇り、遥か上空から大量の水を落とす巨

大な滝が外部からの新たなる生き物を阻んでいた。

水を辿り昇る者は勢いの強い河川に押し流され、空から攻めるものは狙い落とすかのような巨大な水泡に撃たれ入り込む事は敵わなかった。

そうしてラネール島は長らく外部から完全に隔離されていた。

とある、強大な血筋で作られた武力と強靱な肉体を持つ女海賊率いる海賊団に攻め込まれるまでは。

目次

災害の襲来	1
お菓子の国へ	26
結婚相手との対面	44
コムギ島	66
足掛かり	89
水	116
鍛練	137
東雲の躍進	165
さん	196
青天霹靂	219
水平と垂直の水面	257

災害の襲来

「シド王子！待ってくださいゾラ！」

「駄目だ、聴いたろう先程の信じられない程に轟いた音を！里の方角だ、落雷したのかも知れないゾ！」

後ろからオレを呼び止める声が聞こえているが走るスピードを緩める事は出来なかった。彼らを置き去りに前だけを向き走り続ける。

走る振動で頭部の尾と顔横のヒレが大きく跳ねる。姉さんとオレしか持たない赤色が、今は何だか嫌な予感を呼び起こす。

陸地を走るに向いていない足を必死に動かす、何とか里を見下ろせる高台へと出る事が出来た。

そして愕然とした。

百年以上もの期間見続け、知らない事など何も無い筈の見慣れている景色がすっかりと変わり果て全く知らないものに見えたのだから。

「……………これは、何だ。一体何が起きたというのだ」

追い付いて肩で息をしていた警備兵達が里の現状を見て悲鳴に似たざわつきを繰り返していた。そして暫くの沈黙の後にオレのこぼれ落ちるように漏れた言葉に、一斉に黙り込んだ。

当然だ、誰一人として答えられる筈がない。彼らはオレと共に里を離れていたのだから。

まるで全てを破壊尽くさんばかりの嵐か暴風雨に被災したかのような、災害に襲われたかのようなゾーラの里の理由など誰にもわからない。

*

今日は朝からどうにも妙な感覚が心を占めていた。まるで揺らぐ胸ビレを撫でるかのような。

天候は変わりなく時おり青空が覗く穏やかな雨天で、里を見守るかにように立つ崖上に立つ神獣ヴァ・ルツタもいつものように荘厳だったというのに。

そんな折にルル湖付近から妙な聞き慣れない音が鳴っていると警備兵から連絡が入る。

ルル湖は里の周り付近に複数ある湖の一つで面積はさほど大きくはない。

近くにはライネル達の生息地であるライジユウ山がある。通常のライネルですらそれなりの強さを持つというのに、電気の力を持つ彼らは我らゾーラ族とどうも相性が宜しくない。だがいくら相性かま悪かるうともその区域から出ない限り干渉しないのが当然の事だ。

しかし……ルル湖を越えてしまえばゾーラの里までそう遠くない。

その快音がライネル達が我らゾーラ族に対して何かしら企んでいる音だとしたら？もしライネルが里に入って暴れようものならどんな害を及ぼしてくるかわからない。生息地から外れてしまえば……それは。

「シド、警備兵と共に向かい異音の原因を確認してくるゾヨ。もしライネルが何らかの企みを持つていれば……わかるな？」

「了解しました、ゾーラ族の王子として里の為に身命を賭すのも惜しくありません！」ゾーラの里のドレファン王である父上と呼ばれ数人の警備兵と共に銘を受ける。それは間違いなく光栄な事、かつて父上が里を守る為に負った額の傷跡を見て新たに決意を固める。オレもそうであらねばと。

父上の傍に寄り添うように立っている姉上……ミフアー姉さんが心配そうな表情を

浮かべこちらを見ていた。止める言葉は持てないのだろう。

その不安を吹き飛ばすように満面の笑みを作り、胸の前で拳を握った。安心して欲しい、無事に戻ってくる。

オレ達は、勢いよく絶えず流れる川を遡るように泳ぎ続けそうしてミカウ湖へと到着した。そこからは陸地を歩き不審な音がしていたというルル湖へ向かう。

どんな事があるかわからない為に、常に周りを警戒しながら。両手に持った銀鱗の槍を強く強く握りしめて。

だが結論から言うならば。我らは何もわからなかつた。

ルル湖の近くで暴れるライネルの姿など影も形も無く、それどころか妙な音の正体も何かを企んでいる様子も何もかも見付けられず。

ただ一つ違和感を覚えたのは異常なる静けさだつた。

湖には何の音も無く、ただ降りしきる雨音だけが静まり返つた世界に響いていた。

ライネルも、虫も獣も、魔物も、何もかも全ての生き物の気配が、何一つ感じれなかつた。

あまりの奇妙さに立つた鮫肌を撫でた、その時。

「——ッ!？」

体全体を振動させる程の爆音が遠くに轟いた。

違和感を感じる思考を引き裂くかのように鳴ったそれは、間違いない。我らゾーラがヒレの底から苦手としている電気の音、雷鳴。

鳴った方角は間違いない、来た方向……ゾーラの里だ！オレはルル湖の近くにある高台へと急いだ。

ゾーラの度胸試しに使われる突き出した高台の試しの岬程ではないがそれなりに高い場所はこころル湖にもある、そこで里が無事である事を確かめたかった。

なのに、見えたそれは。悪夢としか言い様の無い……………。

「お前達急いで戻るゾー！何が起きたか解らないが無事ではないのだからッ」

彼らの返事を聞かずにオレはそのまま真っ直ぐに頭から飛び降りる。遠ざかっていく後ろから何かしらの叫び声が聞こえるがその声が届く前にオレは水の中に飛び込み着地をしていた。一瞬世界の全てが音を無くしたように静まり返り、そして遅れて弾け

たように音が鳴る。

そのまま勢いを何一つ殺さず、寧ろ速さを上乘せして泳ぎ進む。あまりの早さにヒレ周りから全てを破壊するようなバリアでも出せそうだ。

……泳ぎながら、高台から見た光景を思い返す。

水に濡れた岩肌に囲まれ建つ建物、神殿のように作られたその場所の全てが石だ。柱も、手すりも、壁や階段や屋根や、内部に置かれた書物ですら全て。

それは我ら王族が住む王宮であり、ゾーラ族が住む場所だ。他者の侵入を許さないラネール島の中で更に外部からの侵入を阻むよう濡れた岩肌に囲い込む形で作られ、常に流れる水面から柱を伸ばして佇んでいる。

水と共に生きるゾーラ以外を阻む侵入禁止の王宮。

それでもそんな一面を覗かせないそれらは、普段空からの僅かな光を吸い込み水面からの輝きを反射し、建築物を美しく彩る細かな装飾部分を滑らかな青緑色にただただ輝かせていた。

なのにあれは、高台から見下ろし見たあれは何だ。

美しかった景色は一変していた。

細かな装飾をあしらった壁面には遠くからでも分かるひび割れが入り、数本の柱が折られ細い渡り通路は渡る手段を失っていた。

この美しき里を象徴するであろうラネール島の川から取れる魚を象った屋根を司る巨大な石像は、まるで何かを叩き付けられたかのように数ヶ所崩れ落ち、大きな破片を地面に散らばせていた。

それだけではまだ、複数同時の落雷の被害の可能性があった。

だが。そんな破片散らばる広場に我らゾーラ族より遥かに大きな一人のニンゲンが、堂々と立っているそれが、何もない事故の可能性をゼロにした。

*

「我が子達、殺しちゃあ駄目だよ。勿体無——「一体何をしているんだゾ！」
広場の真ん中に佇み叫ぶ彼女の大声に、あちらこちらに散らばった場所から返事の声がした。

その声は男女まばらに、だが一様に「はい、ママ」と統一されていた。

その言葉を途中で遮るようにオレは川から跳ねるよう飛び出し、ロスリーリーに向かっ

て剣を振り上げていた複数の人型をした何者かを突き刺し飛ばす。そのまま右手付近の者達を幾人も弾き飛ばす。

襲撃によつてやられ倒れている、脅えながらもオレの到着に喜ぶ幾人もの声色に怒りで肌が鱗立つ。

ライネルや魔物と呼ばれる生き物達に襲われたよりも遙かに大きな被害を視覚聴覚嗅覚全てで感じ、鋭い歯を砕きそうな程噛み締める。あまりの怒りで目元が痙攣する。

叫びながら襲い掛かってきた者の切っ先から避け反撃した後、数メートルの高さがある建物の中でも最も高い屋根に飛び乗った。

感情のまま睨み付けるオレの言葉を聞き姿を見た先程の大きな彼女は満足げに微笑み口角を上げた。その目線の先には父上と姉上が槍を手に持ち立ちほだかっていた。

二人がいて、この被害規模だとこの者はどれ程の強さを持つというのか。

そんな桃色の髪を持つハメートルを悠に越える身長から伸ばされる手の先には……濃緑色に輝く皮膚を持つピクリとも動か、な……

「タツカ!!」

ポタポタと血液を垂らしながらぐったりとした彼の……普段甲斐甲斐しく我ら王族

に使えてくれている彼とは真逆のその姿を目に写した瞬間、身体中の血が沸騰したように怒りによって燃え上がる。

怒りのまま地面である屋根の上に手をかざし水柱を発生させ、その外周を円描くように登りこの世の出せる全ての速さを極めた後に。

ニンゲンが使う銃如く弾丸のように勢いよく飛び出し、先に居た彼女の首元に両手の槍を突き立てる。

本来ならば槍先が突き刺さり血飛沫を舞い散りながら痛みで悶える筈のそれが。

まるで金属同士をぶつけ合ったかのような甲高い音と共に、硬い硬い石壁よりも硬いそれに押し退けられるように止まった。

……何だ？これは。

「面白い、活きが良いじゃないか」

「ぐツ!？」

攻撃した槍先が刺さらず、空中から落ちようとしたオレを攻撃した相手である女が掴んだ。タツカをまるで要らなくなった玩具のように放り捨て、両手でオレを挟み込む。

ギリギリと大きな手に締め付けられる痛みを耐え、音を立て付近の壁面を破壊する速度で投げられたタツカの名を大声で呼ぶ。

返事はない。

けれど石造りの床に叩き付けられた彼は……僅かな身動きだけをしていた。鎧を破壊されあちこちの間接が妙に曲がっていても幸いな事に、生きている……それだけで、良かった……

「うーんコイツは違うねエ、中々悪くない攻撃だった。他の奴らの攻撃や技とは比べ物にならない」

「——ッ！」

「……だがまあ、それはおれに楯突いて良い理由にはならないが」

それはまるで立ち上がった父上の顔の高さ。そんな彼女の顔の横に、寄り添うように漂っている……顔を持つ熱の塊と水蒸気の塊のようなそれは何だと考える間も無く。

彼女が軽く指を動かしただけで左腕が嫌な音を立て激痛が走った事で、口から抑えられない悲鳴が飛び出す。

牙を噛み締め叫ぶ事をなんとか止めは出来たがそれも無駄な抵抗と言わんばかりに、白色の水蒸気が漆黒に染まり不気味な笑みを浮かべた口先に腕を突っ込み。

「雷霆（ライテイ）!!!」

空气中を震わす程の、先程の落雷の正体を、身をもって感じる事とな——

*

攻撃を受け喉を裂きそうな程の大声を上げたのかもしれないが、判別が出来なかった。

何せあまりの衝撃と痛みに意識を失い、目覚めたのは恐らく気絶をして数分後だったのだから。

なぜ床に寝転んでいるのか、それも普段父上が座っている玉座が見える場所で……理解出来なかった。何故体が痛……

「!!」

数秒のタイムラグがあれども気絶前の記憶が鮮明に戻るなり、動こうと……立ち上がろうとした体勢のまま崩れ落ち、オレは再び冷たくて心地いい石の床に転がった。

視界が急な明暗と回転しているかのように強く揺れ動き、ろくすっぽに動けない。そ

もそも体には限界を超えそうな痛みや痺れが絶えず走り続けている。

「シド！動いちゃ駄目、本当に体がボロボロなんだよ！」

「……姉、さん」

それでも何とか立ち上がろうと使える右肘をヒレを巻き込まぬよう床について立とうとするも、細い小さな手のひらが肩のヒレの上に置かれ聞き慣れた優しい声がオレを止める。

ミファー姉さんが横に座り、オレを心配そうに見ていた。恐らくオレの看病を名乗り出て治してくれたのだろう、折れた筈の左腕は布地と硬い何かで固定され包帯を巻かれていた。

だが、これは何だ？

違和感のまま近くにいた父上を見上げる。オレの視線に気付いた父上は何も言わずにただ首を横に振った。それだけで理解し、オレも軽く頷く。

そのやり取りを侵略者達は見えていただろうが意図までは読めないだろう。せいぜい抵抗をするなど諫められオレが承諾したと思うくらい。

真の意図は伝わらないし、伝えてはいけない。

ミファー姉さんが持つ治癒の力を知らせてはいけない。バレてしまえば、それこそどんな目に合わされるかなんてわかりもしない。

だからこそ、オレを治そうとした姉さんを恐らく父上が止めた。治すと宣言したその言葉が変にならぬよう姉さんは治癒の力を使わず通常の治療だけを行ったのだろう。

良く良く見なくとも父上や姉さんも決して無傷という訳ではない。見渡し見える範囲の負傷した者達には見知った兵達が多く、力無く倒れ込んでいる。

それでも何とか頑張ってくれたのだろう。負傷した者の中に戦えない一般ゾーラや女性や子供達の姿は一人もなかった。

オレが里に辿り着いた時に聞いた声が確かなら……殺すつもりはないのだろう。恐らく頭である彼女に槍先を向けたオレが生きているのだから。

だが、そうだとすると許容など出来るものではない。

「ギアで少し大事なお話をしようか、ええと……ゾーラ族？」

槍を突き立てたにも関わらず何一つ傷を負った様子の無い女が、オレを感電させた白い塊に腰を落としながら話しかけてきた。

……落雷を落とすという事は、あれは空に浮かぶ雲と同じものなのだろうか。天候を操る……不可思議な能力を持っているのだろう。確か何とかの実とかいうものを食べ

た者。

「まずは名乗ろうか、おれはシャーロット・リンリン。ビッグマム海賊団の船長だよ。こんなクソ辺境で薄汚エような場所に名が届いてるかは知らないが」

「海賊……」

「海で暴れる者達が何の用ゾヨ」

女の呟いた言葉に聞き覚えはあった。ラネール島は確かに閉じているとばかりの外
界から隔離された場所ではあるが全く情報が遮断されている訳ではない。

縁深い空を飛ぶ種族やゾーラ族とは違う魚の種族との交流が全くのゼロという無い
訳でもないし、ゾーラ族の中にも外に出ていき世界を見たものがない訳でもない。

海賊。下の海で船と呼ばれる物を使い移動する者達。冒険者と名乗る者達との詳し
い違いを語れる程は関わりも知識もない。

だが賊が付くものに対して、そもそもこのように暴力から始める者にどう良き印象を
持てようか。

父上の言葉に女はにんまりと笑みを浮かべ何事もなく当然のように語り続けた。

「なアに。おれは世界中の珍しい種族が欲しいだけでね、殆んど知られていない岩の
種族や木の種族なんかも狙ってるよ。だからその中の一つ、ゾーラ族も欲しいと思った
だけさ」

「……：和平を結びたいという事ゾヨ？」

「おれの言う事を聞かない奴らはいらねえね、血縁関係になり従い傘下になるならおれのナワバリだ。守ってやろうか」

……………

父上の疑問を当然のようにはね除け、続けられたそれは何よりも勝手すぎる言い分ではないものだった。

いや。まず対話でなく侵略をしてきた者達に期待するようなものではないのかもしれない。もしまず穏やかに和平を結びたいと交渉に来ていたなら……：どうなったかなど、今更だ。

「お前らは様々な種類の魚が産まれる魚人や人魚族とは違う……：そう聞いてたんだがあまり変わったもんじゃやないね、あーあ……：この——」

その後には呟かれた言葉は罵倒と言うにも憚られる程のもので……：言い返すどころか呆気にとられるしかない我らを一瞥した後、自らの腹を軽く撫でる。

「この中にいるのと同じようなのをもう産む気はないね。だがお前らの持つポーネグリフのような石碑と……：アレ、は欲しいね」

「なっ……：無礼者ゾラ！ 神獣ヴァ・ルッタを指してアレなどと……！」

「だからウチの子供達との結婚をするってのはどうだい？ 所謂政略結婚ってやつさ

ね」

「……何を、言っている?」

守り神であるルツタを指しての言葉に怒ったセゴンの声など聞き入れてさえおらず、そのまま自分本意の言葉を続けた。

理解出来ない。その言葉を呟いたのは誰だったのだろうか。オレだったのか、父上か、元老院か。

彼女は我らの総意の言葉を大きく笑い飛ばした。しばらく声を上げ笑った後に、受け入れるのも躊躇う恐ろしい言葉を続けていく。

「まあ別に問答無用に奪つても良いんだが勿体無いだろう。折角の貴重な種族だ、我が子の能力で本に閉じ込める事で生き殺してもね?……だから王族達、選びな?」

女は立ち上がり、一步一步高い靴を石の床で鳴らしながら近付いてくる。

そして。座り込んでから満面の紅を塗った唇を歪ませるよう笑みの顔を脅すように近付けて、問いた。

「我が子の能力で標本になるか、政略結婚をするか、さ。滅ぼされるより、悪くはないだろう?」

『DEAD OR MARRIAGE?』

他でもない。そう、ミファー姉さんに対して。

……当然なのだろう。王族であり、女性。勢力を増やす為に嫁に迎え入れるとするならばこの上無い人選でしかない。

だが、だけど。

そんなのは許されぬ。姉さんは。

「駄目だ、そんな事は駄目だゾ！」

痛み痺れていた体を無理矢理起こし、姉さんを押し退け庇うように前にそびえ立つ。すぐ真後ろから驚きと困惑の聲が聞こえるが……今だけは聞き入れない。聞き入れる訳にはいかない。

「ん〜？つまり、死を選ぶとい——オレが行く！オレがその結婚をするゾ!!それなら構わないだろう！」

目の前の大きな彼女の言葉さえも遮り、出せる限りの大声で胸に手を当て宣言する。周りの全ての声をかき消すように。

姉さんの声も、元老院達の声も、それこそ、父上の声も。

きつと海賊の無茶苦茶でしかない提案ですらない命令も、ミファー姉さんは優しいゾーラだから請け負ってしまふ。不本意でも、涙を飲んでも。姉さんには、永年の想いを巡らす特別な人がいるというのに。

海賊の彼女はきつと長らくそうしてきたのだろう。恐怖と支配で押さえ付け、人身御供でしかない存在一人を差し出す事でその場を仮初めに丸く治めんと相手を苦しめて。

こんな事が許されて良いものか。こんな略奪などそんな事、許されない。許されて良い筈が無い。有り得ない。だがどうしようとも、手も足もヒレも敵わぬ相手に吼えるは愚かな稚魚のする事だ。

場に居れず守る事が許されなかったオレが、オレが守らねばならない！どんな手段だろうとも今度こそ、全てをなげうってでもだ。

今度こそ。オレがゾーラの里を、ゾーラ族を守るんだ。オレは誇り高き水の民、ゾーラ族の王子なのだから。民を全てを守る事は当然だ。

「シド王子！」

「シド！そんな駄目！」

「ゾーラ族の王子であるオレで不服では無いだろう！？」

「勿論良いとも。あアおれ相手に切つ先を向けてきた無礼はその度胸に免じてやろうかねエ」

「その代わりもう他の誰にも手を出さないでくれ。これ以上傷付けないでくれ」

「ママママママ。勿論さ、子供一人の結婚程度で珍しい種族や石碑、あの未知の像を独り占め出来るなら安いもんさ」

すがり付くような姉さんの腕を振り払い、目の前のあらゆる意味で強大な女相手に啖呵を似た言葉を切る。軽く受け流されはするが、取り敢えずはそれで良い。

賊相手が吐いた泡の約束を必ず守るなどと信じれるものではないが、取り敢えずはそれで良い。

一先ず愚かに疑似絵に飛び付いた雑魚と思われようとも……

海賊は話は済んだとばかりに立ち上がり、遠目からこちらを伺っている乗組員だろう者達に声をかけた。彼らの返事の挨拶である「ママ」の意味はどちらなのだろうか。単なる掛け声なのか、それとも。

「じ……条件があるゾラ、女海賊!」

「ムズリ!?!」

後ろで悲鳴や文句に似た言葉を小さな声でひたすら呟いていたゾラの元老院が一

人、ムズリが背を向けた彼女に向かって叫んだ。

止めるというより驚きで彼の名を呼べどもそれで止まらず、ムズリは言葉が続けた。

「お……王子の相手は、子供の中で一番年嵩の男で頼むゾラ!!」

振り返り見た顔は怒りで浮き袋が煮え繰り返らんとばかりに赤黒く染め、大きく裂けた口を思い切り開き食いかからんとばかりのものだった。

「……………」

何を、どんな罵倒に似た言葉を言わんとしているのかと思う間も無く紡がれたそれに……何も言葉が出ず、ただ開いた口そのまま固まってしまった。

……………何を、言っている？

「フン、別に何だっでもいいさ、単なる政略結婚なんだから」

— その子供が絶対に必要って訳でもないしねエ。近くに迎えの船を寄越すから大人しく運ばれな。

そんな台詞を残し女海賊達は引き上げて、姿を消した。残されたのは災害によって荒らされ回ったゾーラそのものではなかった。

*

「ごめんね、ごめんねシド。こんなに傷だらけになった上に、あんな……」

「泣かないでくれ姉さん。オレは姉さんを守れて本当に嬉しいのだゾ」

はらはらと何粒もの涙をこぼしながら治癒の力で治してくれている姉さんを落ち着かせるよう肩に手で触れる。細く小さな負担をかけるに憚られる程の優しい肩に。

他の皆の治療をと言えども逆に他の皆から一番重傷であるオレを優先してくれと、治された折れていた左腕で。

歳が離れているからか、姉さんから様々な事を教わった。背に乗せてもらい導かれた。幼すぎて理解出来ず、弱く守れなかった事もある。

だから今度は、この身で姉さんを守る事を誇りに思う。

「ムズリ、それにセゴンもゾヨ。教育係やお目付けをしていたソナタ達の気持ちは解るが、止めず、止まらずなせあのような事を……」

「しかしドレファン王！どうしても、どうしてもあのような……ニンゲンに……」

近くで父上が、去り際に突如とてつもない条件を放り投げたムズリと傍にいなながら制止どころか大きく頷いていたセゴンに対し溜め息混じりに問い掛けていた。

危険だった、もしあの場であの女海賊がムズリの言葉に怒り不殺を取り消し再度雷を撃てば……どうなっていたかなど、想像に容易い。

それはきつとムズリも理解していたのだろう、それでも。今でも怒りが収まらないとばかりに顔を怒りで赤らめながら体を小刻みに震わせていた。

「海賊は恐ろしい。どのような無茶苦茶な事を要求されるか……シド王子を信じていても種族そのものを欲しがる者が、簡単に諦めるとは思えませんゾラ」

「あのようなニンゲンとゾーラの”証”など万一にでも残す事すらおぞましく恐ろしい。ならばゾラ。ニンゲンのただでさえ短い命、更に賊であるならば……すぐに、尽きて終わりますようゾラ。そうして、全てを無かった事にすれば良いだけ」

それは、彼らにとつての決死の意趣返しだった。オレや姉さん、ゾーラ族そのものを大切に思う心と暴れるだけ暴れ破壊していった彼らへの憎しみが混ざりあったそれ。

……ゾーラと他種族の、結果など今更考えられない、が。

我らより遥かに短い生を持つ者達に対して、など。

父上は暫く彼らに対し様々な言葉をかけていたが途中で言葉を止め、大きく大きく息を吐いた後オレの方へと向き直る。視線はかなり前から気付いていたのだろう。

「……シド、まずはミフアーを身を呈し守った礼と辛い立場を押し付ける事の無念と

謝罪を。すまなかつたゾヨ」

「とんでもないです父上。オレは何一つ後悔していません」

あのままでは全てを、本当に全てを奪われてもおかしくなかつた。大切な人々や変わらない日々を守る為には、現状を嘆き恨むのではなくまず自分の使える全てを使い行動せねばならない。

「奴らはゾーラの石碑を渡した所で読めもせず、動かすに練り手が必要なルツタの事は像としか認識していません。それに……姉上の力は」

「そうか。そうだな……治癒の力を、海賊に隠したのはワシだったゾヨな。すまない、ミフアーいつもいつも、ワシはそうゾヨ」

「そんな、御父様……」

父上の長い尾が顔をわずかに横に振る度に揺れた。夜行石で作られた壁が、光を反射して輝く。

この美しい里からオレは少しの間、いやニンゲンの感覚でいえばしばらくの間離れる事になるかとしれない。今の内に出来る事をしておかねば。

ルル湖の異変や、海賊達がどうやってこの島に一度ならず再び訪れる事が出来るのかその手段を確かめねば。

「シド。お前の置かれる立場はさぞ厳しいものになると考えられるゾヨ。実の子に対してでさえ、あのような……人を人と思わぬ、まるでモノの如くの言いようをする者は」

「……はい」

「ムズリが条件に上げた年齢もそうだ、ニンゲンの生命は短い上に海賊の命など一枚の鱗よりも簡単に剥がれるゾヨ。だが、それを嘆いてはいかんゾヨ」

オレの相手はまだ、どんな相手かはわからない。人間がいかに大人になるのが早いとしてもそんなに年功を重ねてはいないだろう。

どれだけ年嵩だとしてもあの母親より、自分よりも遥かに年下の相手。親から支配されている、自由な恋を望めない存在。

だからと……そうだ、誰かの事を思い出し重ねてはいけない。産まれ育ったそれに罪はなく選択肢の無い人生だとしても。

「海賊に舐められはするな。そして、選択肢の無い相手に憐れみの情を考えるな」

此度の自分は人身御供の生け贄。人質でしかないのだから。オレは軽はずみに憂いた考え一つ持つ事も許されない。

オレは、オレがゾーラ族全てを守らねばならないのだから。

お菓子の国へ

「どうだ、レトーガン。壊された壁面や飾りは治せそうなのか？」

「はい王子！まだまだ若輩者ですが、必ずや成し遂げてみせます！」

「うむ！頼むゾ、フーキュ達と力を合わせての里の復旧を任せたい！キミ達なら出来る、是非ともこのゾーラの里を元通りにしてくれると信じてるゾ！」

「は……はい！お任せ下さい！」

オレの言葉を彼は体を震わせる程の衝撃で受け取ってくれた。爛々と輝く瞳はラネール島の上空に登り始めた太陽光を浴び、輝く蒼緑の鱗と共に彼の頼もしい言葉を増長させるよう光り輝いた。

嗚呼。彼らの眩しい輝きを見れば……きつと、この里は大丈夫だと思える。きつと。きつとだ。

オレが、いなくとも。

だから。

「シド王子・下海から……この前の、海賊、が」

警備兵が慌てたように声を上げオレを呼んだとしても心も体も落ち着いて聴く事が出来た。数日間、どのような行動を行ったとしても頭によぎっていた不気味で恐ろしい存在を確認したとしても。

オレは、いかねばならない。

人質。人身御供。生け贄。……違う。ゾーラ族を守る為に選り抜かれ、自ら選抜した立場なのだから。

*

迎えに寄越された殆んど初めて見る船という乗り物は、何とも奇妙でしかないものだった。

一番高い場所には黒地で描かれた何かの絵（海賊旗というらしい）を掲げ、側面に付けられている返しの着いた槍の先端のようなもの（錨というらしい）をラネール島から落ちぬように岩に引つ搔けるよう落とし、まるで生き物かのように喋っている先端部分

(後で聞いた所によると船首というらしい) がご機嫌に歌っていた。

それら見た事も聞いた事もないそれら全てに圧倒されながらも、島を出ていくオレを見送りに来てくれた姉さんとその御付きの者である警備兵達に向き合う。

里の近くに行こうと船から降りてきた相変わらずよくわからないものを止める兵を横目で確認する。オレが来たのだから行く必要など無いだろうと。

オレ達が大人しく従っているからと、賊である向こうもそうするとは限らない。約束を守るかどうか、何をされるかわからないなら見張るしかない。

遠くへと出ていくオレを心配し、海賊達が去ってから今日この日までの間に里の女手達が作り上げた衣服を身に付けて。

それは伝説のゾーラ族だけで作られたバンド、ダル・ブルーをイメージして作られているのだろう。青緑で彩られた美しき布地や差し色の茶色。体を覆うようなゆったりとした形はそれは体格を隠し、ニンゲンで無い事は解れども全く見ず知らずの者は極論オレの性すらわからないのではないだろうか。

そもそもニンゲンのように肌にピタリと張り付くような衣服等はどうも……脚は自由に動かししたいし布を巻くだけで悪くないだろう。

「元気で、無茶なんて決してしないでねシド。何か、何かあったらいつでも言つて。お姉ちゃんが絶対に守つてあげるから」

「……姉さん」

どれだけ語ろうとも終わらずに語り続け、不安げな姉さんの手を取り告げる。

「大丈夫だゾ……どうか、お元気で」

そう発した時の顔を一生オレは忘れない。

あの、黄金に輝く宝石のような瞳をふやかさんとばかりに水面で濡らしたそれを。

「それに連絡を取るなんて手段もないゾ、残念だが」

「ん？もしかしてここには電伝虫も無いのか」

「ゾ？」

船から降りて物珍しそうに遠くに見えるルツタを見ていた青年が呆れたような声色でオレと姉さんの会話に入ってくる。

彼は……この前争つた中にいただろうか？駄目だ記憶に無い、そもそもゾーラ族でない者を見た事自体が多くないのだから見分けを出来るようにならねば。

彼は船内にいるものに声を掛け何かを二つ、持ってこさせた。それは片手よりも少し大きな殻を持つ生物。シノビタニシと似ているが形が違う、下海にいる生物だろう。

そして片方の生物な殻に取り付けられた器具を取り外し、下海の数字が書かれた箇所

の器具数回回転させた。
すると。

「ジリリリリンッッ」

「!?」

触っていない方の生物が鳴き始めた。急な鳴き声に戸惑ったのは我らゾーラ族のみ。彼は何事もないうちにその鳴いている生物、確か電伝虫だったろうか。それに取り付けられた工具を彼がしているように手に取るように言ってくる。

危険であるとは思わないが、他の者にさせるには不気味だとオレが真っ先に手に取る。これは一体……

「『どうだ?これならば連絡が取れるだろう?ペロリン♪』」

目の前にいる彼の声が、更に目の前にいる電伝虫の口から聞こえてきた。彼の真似をするように大きく舌を付き出して。

……こ、れは。間違いない。

「うるりらだゾー!」

「たっ。」

「本当にこんなのが有るんだね……創られた歌詞かと思つてた」

「何という事だ、ならば他にも知らぬが知っている事があるかもしれないのだな……」
我らの言っている意味が理解出来ないだろう彼はただ首を傾げていた。当然だ、ダ
ル・ブルーの歌う曲の中の一つ「風の魚」にある歌詞など彼が知る筈がない。

歌詞の中にあり歌われている、遠くの者と答えを探すに語る手段、それが……これか。
「何の事だか知らないがこれで連絡を取れば良いだろう？ 式の詳しい日程と両家の顔
合わせと結納の際の連絡はこれでする」

「ゾ？……父上達を後日招くのならば何故オレは先に？」

「結婚相手との顔合わせを当日する訳がないだろう。それにゾーラだか何だか知らな
いが人間サイズでないんだ、衣装合わせもあるしな」

「ああ……成る程、確かにそうだな」

そして彼と同じように器具を元の場所に戻せば部下が姉さん、そして御付きの兵に使
い方を説明していた。オレも知りたかったが……まあ良い。

そして説明し終えた部下が船へと戻り、彼も早く乗るようにと告げてくる。

別れの挨拶は先程行つたし、連絡も取れるという。どう、言葉を告げるべきなのだろ
う。

ミファー姉さんの方を見れば何とも言えない、もしかしたらオレと同じ事を考えてい
たのかもしれない瞳と目が合う。そして、先程とは全く違う雰囲気と言葉が出てきた。

「では姉さん、また近い内に会いましょう」

「うんシド。またね」

握手をするように軽く触れるように繋いだ両手を離し、背を向け船へと続くスロープを登る。どうにも履きなれない靴底が木の板と歩く度に乾いた音を立てて鳴っていた。

船を固定していたという錨を引き上げれば、水の流れて船は少しずつ陸から離れていく。見送る姉さん達の姿が同じ速さで小さくなっていく。

「そういえば、この船はどうやってここまで登って来たんだ？ 船というものは滝のよう流れる水流や半ばにある返しのように広がり丸まった部分も関係なく登れるものなのか？」

「いいや？ そんな事は無理だ、基本的に船は風を受けて進むもので上になど登れるものじゃあない」

「ゾ？ ならばどうやって？」

「今からそれがわかる、ほらお前ら準備は良いか」

彼の合図と同時に船のあちらこちらから紫色の何かが膨らみ始めた。それは徐々に大きく丸く形を変化させていき、それに連動して船が徐々に浮遊し始める。

そしてそれは見覚えのあるものだった。どうにもあまり良い思い出のないそれに反射的に、そして無意識に顔の左を覆うように長いヒレに触っていた。微かに残るヒレの、その部分に。

「オクタ風船……オクタロック？」

「ん？タコバルーンは知っているのか？」

「ラネール島やラネール港に似たようなのがいるんだ。だが形が違う、岩を吐き出す訳でもなさそうだし」

「むう、空島程ではないが高度があるからか？……まあ、わかる事でもねエかペロリン」
♪

彼のいう通り別物でも、似た物でもオレにはわからない。しかしこんなに大きなサイズのオクタロックは中々お目にかかれない。

今こな船を持ち上げているこれはあの動くものと見れば襲ってくるような狂暴性は薄いように思える、まさか船を浮かすように躡られ改造されているのか？それともラネール島外のオクタロックはそう進化したのか？

ああ、オレは外の事をなにも知らないのだな。

ふわりふわりと浮かんでいた船はいつしかゆっくりと降下していた。船の縁を持ち

下を眺めれば遙か下に海面が見える。ここから飛び込めば流石のオレでも……うむ、痛いだろうな。

遠ざかっていく姉さん達の姿はビリビリマスの鱗よりも小さくなり、そしていつしか見えなくなった。

そうしてふわりふわりと漂う事それなりの時間、水面に自然発生した揺れる気泡が弾ける程の長い長い時間の後に下海に辿り着いた

ラネール島から流れ落ちる滝のような水を見上げても、それだけしか見えない。島の形も、ゾーラの一人も何も見えない。

船はそのまま、目的へと進む為に進路を取りはじめた。

下海に来た事は両手で数えられる程しかない。何も知識を持たない事にこれからどんどん触れる事になり、また目にする事になるだろう。

それでもこんな近くの場所では何度か降りてきた時に見た景色とさほどの違いはない。精々時間帯くらいだ。

「ところであの電伝虫とやらは頂いて良かったのか。後であの女ひとに怒られたりはしないのか？」

それでも水平線を変わずに眺めていれば指示を出し終わった電伝虫をくれた彼が再び近付いてきた。

彼が今この場では一番上の者なのだろう、それでもきつと最も位の上の者はこの前の女海賊だ。

海を眺めたまま、振り返らずオレは訊ねた。

「あー問題ない。おれがおれの判断で渡したからな。それに連絡がつかないと不便だし、流石にママもそれくらいで怒りはしない」

「そうだそのママという呼び名なのだが、全てが実子ではないのだろうか？」

「当然だ。殆んどがそうでないな、この船にもいるアイツらはママが悪魔の実の能力で作りに出したホームリーズだ」

彼はそう言い、船で働いているどう見てもニンゲンには見えない彼らを指差した。悪魔の実、そうだ。それだ。奇妙な力を後天性に手に入れられる不可思議な果实。

そしてその能力は無機物に新たに命を吹き込む能力とやらなのだろうか、この船の船首にしているように。それとも生物にもそれは可能なのか……

「つと、そうだ。まだ名乗っていないかったな、おれはシャールロット・ペロスペロー。今向かっている万トットランド国のキャンデイ大臣をしている。万一を考え迎えにおれを寄越したつ

て訳だ、舐めた真似をしたら……キャンディマンにして舐めちゃうようになペロリン」

そう名乗った彼、ペロスペローは片方の口角を上げ握手時に手を差し出すように手に持っていた杖の先端をオレに向けた。

一瞬どうするのが正解なのかわからなかったが……そういう意味なのだろう。オレも自らの名を名乗りながら、最初に思った通りその部分を握り、握手をする。

そうでなければわざわざ……方一なんて言い方しないだろう。距離を測られた相手に一応、友好的であると証明出来たのかペロスペローは満足げに笑った。

……そして気になっている事がある。真つ先に聞くべき事だったそれ。

「君のシャーロットの姓はそのママ、と同じだが……もしや」

「ペロリン、正解。おれはママの實の息子で長男で……ああ。一応言つとくがおれじゃないからな、おれは別の政略結婚をしている」

「ゾ？ そうなのか。なら君の……」

「そうだ。一つ下の弟が結婚相手になり、おれは所謂まア義理の兄になる訳だペロリンペロリン」

そうして告げられたのは予想していたものであり、なんとも奇妙な気分させられる

言葉だった。そうなる事に不思議は無いとハッキリ言い切るようなそれ、政略結婚。

勿論それは当然ではある。結婚をするという条件でオレが今この場のいる状態は作り出されているのだから……だが、本意でないそれにそう簡単に割り切れるのか。

彼の相手がどのようなヒトなのかは鱗の一枚も何一つ知らない。いい人であれば、割り切れるのだろうか。抗議の言葉を飲み込むしかないのだろうか。

オレの相手も、そうして飲み込んだのだろうか。顔も名前も何も知らない、オレの政略結婚相手。

彼には望む好ましい相手がいるのだろうか。いたとしても、何も出来ずに飲み込むしか……そうでなければ、あんな自分以外の者だけで勝手に決めた結婚に従うのは。

……いけない。勝手に考え、勝手に同情などするべきではない。この思考に正解がどれだけあるかもわからない。

……そもそも賊というものは、結婚したからと大人しくなるものでもないだろう。他者を泣かせ苦しめるも当然、それは結婚という枠で止められるものでもない。

オレの相手がそのような相手なら、オレは全力で被害に遭うヒトを守ろう。それがオレの政略結婚へのケジメになる。

「まア万国に着くまで数日はかかる、ゆっくりすれば良い」

「距離はどれくらいあるんだ？」

「んーそうだな、恐らく——」

「……………」

ペロスペローの言った場所への距離、そして時間と船の走行速度を考え……………どうにも納得いかなく首を傾げる。

「全力で泳いでいけば夜には着くのになぜ船で……………ニンゲンは呑気なのだな」

「ゾーラ族基準で考えるんじゃあない、人はそんなに長時間軽く泳げないんだ。ったく改めて魚人は水の中では規格外だぜペロリン」

「……………」

勿論オレ達だって永遠に泳ぎ続けれる訳ではない。そもそも塩分の多い海と川では体の自由は全く違うし、長く海に使っていれば艶やかに保つのを心掛けているヒレの具合も変わってくる。

それにニンゲンとゾーラの違いだけではなく、船を使う理由には海賊や組織や物品輸送……………様々な理由もあるのだろう。

子は必要なくとも我ら水の民のゾーラを手にするのは……彼の呆れ交じりの言葉の真意があるのだろうか。

ああ、考えなければならぬ事が多すぎるゾ。煮えそうな頭を今すぐに水に飛び込んで冷やしてしまいたい。

「そう難しく考えなくても良いぜペロリン♪弟もそんな悪い奴じゃあない」

「……そうだな。取り敢えず、着くまで顔も知らない相手の事でも考える事にするゾ」

「ん？……ああ、そうかまだ見せてなかったな。弟の顔を」

「ゾ？」

飛び出た額を抱えたオレを笑うようにペロスペローは笑った。そしてオレの言葉に舌を軽く左右に何度か動かし、遠くにいるホーミーズとやらの声をかけていた。

そして数分後、声をかけられたニンゲンでない兵士が手に持ってきたそれをペロスペローへと渡す。紙、のようなそれを……オレに見せてくる。

「ほら、やるよ。これがお前の結婚相手だペロリンペロリン♪」

「!?……………」

差し出されたそれを、を。ちらりと見えてしまったそれ衝撃をまじまじと食い入るよう

に見続け、水掻きを震わせる手で受け取る。

ペラリと重みに垂れるそれを手のひらで広げ、隅から隅までじっくりと眺める。それに描かれている、目と目が合い、戸惑う。

鋭い赤い赤い、瞳と……目が。あ、ああ。これは、これは凄い。

何せ、なにせ、これは。

「まア凶悪なツラをしてはいるが害にならないと証明すれば良……」

「なん、て……正確なウツシエだゾ?!?!」

「……は?」

オレの予想外に大きくなってしまった声にペロスペローは驚いていた。でも仕方がないだろう、こんな……このような素晴らしいウツシエを目の前にしては。

手の中にあるそれはどう見ても視界に映るそれをそのまま切り取り紙の中に納めてしまったかのような正確さだったのだから。

「なんて、何て素晴らしいウツシエだ!こんな今にも動きそうなウツシエをオレが本当にもらって良いのか!?!」

なんて、なんて正確なウツシエなのだろう!何度でも思い、口に出す。描かれているそれはまるで呼吸さえも聞こえて来そうな生きているかのようなその、絵に、驚愕する

しかない。

どれだけ素晴らしい絵師が筆をとればこのように生きている人物そのものを切り取れるかのような絵が描けるのか。

この手の中にある紙に描かれた人物がオレの同姓の政略結婚相手だなんて、そんなのどうでもよくなる程の衝撃。

下海には、絵を絵とは思わせない。このように人物を生き生きと紙にウツシエとして見事に描ける人物がいるというのか！

「……あー、面倒だな。詳しい知識の擦り合わせはその手の中の男としてくれ」

手の中にあるそれに感動している中、ポツリと吐き出すようなペロスペローの声が聞こえたが、すぐに頭の隅に追いやってしまった。

何せオレの頭の中は新鮮なる衝撃でいっぱいだったのだから。

*

そうして時間は過ぎて数日後。

たゆたう海を行く中で遭遇した数々のオレの知識や常識をはね除け押し退けるよう

な出来事。それらは片手で足りない程起こり、出来事を噛み砕き飲み込む暇も無く過ぎ去っていった。

それでも何とか辿り着き和やかに歓迎するよう迎え入れてくれたのは、到着地点である万国だった。

先程からずっと、ずっとくらりとするような甘い匂いが漂い続けている。水の中で無くともオレの鼻はそれなりに効きはするがそれでもこの香りは凄まじい。クラクラするゾ。

ラネール島程ではないが遥か高い場所まで伸びる建物を見上げながらオレは息を吐いた。

さて、これからここで短く永い期間ときを過すごさねばならない。

「どうだ、我が母が治める国を見た一先ずの感想はペロリン？」

離れた場所からペロスペローのからかうような声色が聞こえる。怯え、圧倒されていると考かんえてられているのだろうか。

それはそれは……何とも不本意だ。彼のいる方向へ振り向き胸の前で拳を握り満面の笑みと共に返す。

「勿論、最高に決まっているゾ！」

結婚相手との対面

無数の小さな島に囲まれている中央にある場所。他の島とは一線を引く程の……巨
大で、壮大な島。

オレはその島に、国に。到着してすぐに言われるがまま下船して、人でない者に案内
されながら後を着いて歩いてきた。

山よりも高そうなその建物はなんとも奇妙な形をしていた。溶けたような白色が壁
を覆い、周りを果物の断面が飾っている。果物などラネール島においては実物など殆ん
ど見た事が無い。なのに数十メートルでできない程大きなサイズに作られた偽物の飾
りを見る事になるとは。

……我らゾーラの里の建物を飾り付けるラネール島にいる魚や、遙か昔にいたと云わ
れる巨大な守り神の飾りに似たようなものだろうか。

建物内に入ればくらりとする程の甘い香りが辺り一面に充満していた。

オレは鼻が良い。水の中より利かないというのに、体内を支配しそうな程の甘い匂い

が強烈に香って……ああ、凄いゾこれは。

意識を逸らすように壁を飾るありとあらゆる甘そうな物を眺めながら、大きな大きな建物の中を眩暈がしそうな程の香りに当てられながらただひたすら歩いていった。

天井からぶら下がる明かりの一つ一つはきらびやかに、そして不可思議な灯りを灯している。

見上げる遙か高い場所まで天井は伸び、例のあの女ひとに合わせた高さなのだろうと考える。背丈のある父上も、この奇妙な形をしている城ならば何の気兼ねもなく歩けるのだろうか。

人でない、石なのかそれ以外なのかもわからない者は大きな大きな扉の前に立ち止まり手のひらで指差した。

……そして、まるでその合図に合わせるかのように扉がゆつくりと開かれる。

キラキラと光を反射し輝く床、天井、壁。きらびやかな室内には、数名の人物が机を囲み椅子に座っていた。

一人は忘れもしない、我らがゾーラの里を襲いオレをこの場に招く事になった大元の、大きな女海賊。この国を治める、女王陛下。

その女王を囲うように無数の人でない者達と数名のニンゲンが立っており、やる予定も道具もないがオレがこの前と同じように槍を突き刺す事は出来ないようになっていた。

大人しく案内されるがまま椅子へと向かう。そして……気付く。おれの横に当たる場所に座っている人物に。

ここに来るまでの船旅の間、もらったウツシエを何度も何度も眺めた。その場に間違いなくあつた景色と全く違わないだろうその、完璧な絵を。

その絵に描かれていた同じ顔を持つ人物が、そこに座っていた。二つの目、鼻先、口元を隠す、布切れ。

鱗の無い皮膚の色は咲く前のゴーゴースの花色のようで、登頂部にあるヒレ……じゃなく、えつと、そう髪の毛はマックスラディッシュよりも鮮やかな色をしている男。目を閉じ腕を組み、オレの存在の一欠片も認知していないような素振り……彼は、その場に座っていた。

間違いない。本当に……閉じられている瞳の色は確認出来ないがああのウツシエは切り取ったかのように正確に描いていたのだな。

素晴らしいその芸術の絵を描いた職人に会えるだろうか、訊ねれる瞬間が出来たら聞いてみよう。

「来たねゾーラ族」

そんなオレの思考を弾け飛ばすように、机を挟んで向かいに座る女海賊が語りかけてくる。どうにも友好的な言葉を感じない、それでニヤリとした笑みを浮かべてオレを見下ろしていた。

取り敢えず引かれた椅子に腰掛ける。しかし高いそれでは床にオレの足が届かず宙ぶらりんになる。横目で彼を見れば彼も高さが合わないとばかりにオレの何倍もある脚を放り出し組んでいた。

辺りに立つニンゲンを何人か見れば脚の長さがそれぞれ違う。殆んど変わらないゾーラとは大違いで……ふむ、ニンゲンにとって平等で丁度良い高さとは難しいのだな。

「ペロスペローから連絡受けてるだろうがその横にいるのがお前の相手だよ。あの平べったいゾーラから言われた年功序列で選んだ、息子だ」

「ゾ……」

確かに姿はウツシエで貰い、名前も船の中で聞いている。彼もオレの姿の確認は無理でも口頭でゾーラ族の特徴や散々呼ばれていた名前くらいは聞いているだろう、だが改めて名乗った方が良いだろう。

「まあ今日は二人で軽い顔合わせをするだけで良いさ、何をする事もない」

だがオレが口を開く前に女王は話を続けた。オレがその相手となる息子の方へ向き何かを言おうとしている事に気付いていないのだろうか、それとも誰がどうしていようが関係無いのだろうか。

最もその息子自身すら微動だにも動かず、また目を開いてオレを見る事すらしない。政略結婚相手に興味がないにしても……普通のニンゲンでも女性でもないのにな。うーむ、不思議だ。

「招待客の選別や結婚式の日時や段取りは甘いケーキの材料手配と同時にもう行つてる、すぐに連絡出来るだろうよ」

「父上達も呼ぶのだろうか、式の前に。ここに」

「勿論だとも、式の前に親族顔合わせや結納をやる時にいないといけないからね。迎えの船を寄越そう。それにしてもああ楽しみだね、ウエディングケーキ……!!」

「……………」

顔合わせや結納、そんな言葉はわかる。殆んど同じ場所に固まり暮らしている我ら

ゾーラ族でもする事だ。

だがうえでいんぐけえきとやらは何なのだろう。反応からして楽しいものではあるのだろうから、催し物とかだらうか。

そんな事を考えていればすぐ目の前にカチャカチャと金属か陶器の擦れ合う音を立てながら小さな顔のある生き物達がこちらに向かつてきているのが見えた。

動いているそれはホーミーズとやらなのだろう、同じ動きでやってきた二個組はオレの目の前で立ち止まり元気一杯の声色で話し掛けてくる。

「いらっしやあい！紅茶にする!？」

「それとも緑茶か?」

「……ゾ、何の話、だゾ?」

聞かれている意味がわからなかった。

……こーちや?りよくちや?それは、なんなのだ?オレはこの小さな生き物に何を聞かれているのだろう。二択という事はわかる、どちらかを選べば良いのだろうが選んだらどうなってしまうのか。

ああ、どうすれば良いのだろう。わからない事が多すぎて完全に混乱している。頭が熱くなりグルグルと回転して今にも破裂しそうだ。元々考え込んで悩む事は得意じゃ

ない。

下海で見て聞いて、わからない事は今までは船内の責任者ペロスペローに聞いていた。答えが返ってくるかは半々だったが、それでも良かった。だが今は誰に訊ねれば……

「紅茶を」

会心の一撃に似た低い声色が隣から放たれたのはその時だった。

「はあい！どうぞ！」

「……の、飲み物、か？」

オレの結婚相手、彼が机の上ではしやくように動いていた者達に声をかけていた。答えるように器に飲み物らしきものが注がれている。

彼は今の今まで閉じていた目を開けていた。その目はウツシエで見たものと同じ、夕焼けよりも淡い炎の色。

視線からしてオレに対して訊ねていたと思っていたが彼に対しても聞いていたのだろうか。だから彼は答えたのだろうか。

それともオレの次に訊ねる事になっていたら先に返事をしたのだろうか。それとも、まさか……困っているオレを……。いや、まさか。

そもそも彼は目を閉じていたのだから。オレがどうしているかなんて気付いていた訳がない筈だ。

「……あ、オレも同じ……こーちや、で良いゾ」

「はあい！紅茶をどうぞー！」

とにかく今の好機を逃す訳にはいかない。すかさず返答をすれば机に座る者全員の前で置かれている、オレの前の陶器に注がれていく水分。そして同時に共に空气中に漂う濃厚で柔らかな香り。甘ったるいだけの香りとはまた違うこーちやの香り、鼻腔を微かにくすぐるそれは案外好ましく悪くない。

とぶん、と注ぎ終わったそれ。注いだものに囁し立てられるまま手を伸ばす。出された飲み物にすぐ手を出すのは……どうなのだろうか。

隣にいる彼と同じものにしたしここまでして招いた相手に出す物に毒、が入っているとは思わないが……ほのかに湯気がたっているそれに口付けるのは単純に恐ろしい。舌が馬鹿になりそうで。

吹いて冷ますのはマナー違反になるだろうか、温かい飲み物など殆んど口にした事がないからどうすれば……

「そうだ、ゾーラ族。あの島には何か美味しいお菓子は無いのかい？甘い果物や、お菓

子の材料になるものは」

覚悟を決めて唇をつけようとした瞬間、向かいの女王から再び声をかけられる。話し掛けられている今、口にするのは失礼だろう。ひとまず机の上に手に持っていたそれを戻す。

聞かれたその言葉を噛み砕き……一瞬戸惑った後正直に返す。

「……いや、貴女は島を見たから気付いてはいるだろうが島にはほぼ水産物しかないゾ。湿原には獣がいるのはいるが」

「そうかいそれは残念だね、あむっ」

「!？」

オレの言葉に女王はつまらなそうに机に肘をつき、いつの間にか机の上に沢山いたワフワフしているホーミーズを手を取……えっ。……食べた。

……動いて、喋って、意思を持っていたというのに。あれは、食べれるものだったのか……?。確かに香りは良かったが……いや、でも。

その衝撃についていけないのは恐らくオレだけだ。この部屋にいる誰も何も……反応していないのだから。これは、普通の事なのだろう。寧ろオレにも食べると言わんばかりに笑顔で寄ってきている。

恐ろしいのは当然に、それらについていけない知識のなさが恐ろしい。例えここでオ

レの常識外な何かが起ころうともオレ以外の皆は平然としているのかもしれない、それが……ああ、何とも恐ろしい事だ、ゾ。

膝上に握り込むしか無い拳をそのままほどこき、膝を撫でる。ラネール島から離れて数日経つがどうにも鱗がざらついて来た気がする。出来るのなら、美しい源流に潜り目一杯水浴びをしたい。

「取り敢えずしばらくはこの城に居て来る日に備え……ん、いやそれよりアンタの所に居させようかね？」

「どちらでもおれは構わない」

「そうかい、なら持つて行きな。別に男女の仲でも無いが、生活と交流に支障が出ないくらいは仲良くしな」

女王が口一杯に悲鳴をあげるホーミーズを頬張りながらオレの隣に話しかける。解つてはいたがオレに決定権はないらしい。

彼の心の籠つていないような低い声を、机の上からオレに向かい食べるとねだつてくるホーミーズ達の声を、吐き捨てるように言つた女王の声を聞きながらオレは息を吐いて飲み物を口にした。

濃厚ながら爽やかな香りが口に広がるも、未だに残る熱さに体がびくりと跳ねた。熱

いものはやはりどうにも慣れていない、舌先を火傷していないだろうか。

*

顔合わせだったのか何なのか良くわからない話し合いが終わり、オレと彼は部屋を出て花の咲き誇った美しい庭を歩いていった。

見合いにありがちな後は若い二人だけで、というヤツなのだろうが室内に食べられるホームーズが無くなった為に体よく追い出されたようにしか感じない。

そもそも選択肢のある見合いでもないし、若い二人でもない。恐らくあの部屋にいた誰よりもオレは歳上だろうから。

ちらりと彼の顔を見上げる。

見合いや結婚……そんな事はひとまず置いて、オレはこの男がどんな人物なのか知りたかった。

姿形や種族や寿命が全く違うというのに性別だけが同じで、無理矢理に政略結婚させられるオレを歓迎や歓喜しないは当然に、拒絶や嫌悪の顔すらせずそれどころか存在しているか気付いているかすら怪しい程に全く見る事すらしない彼を。

全てを把握したい訳でも、否定したい訳でもなく……ただ、全てのしがらみを除いた彼という人物そのものを知りたかった。

しかしどうにも上手くいかない、何度か話し掛けはしたものの返事は一つ足りとも無かったのだから。

オレと彼はそのまま特に会話をする事もなく歩いており、その内に自然に興味は周りの景色に移っていった。

うむ、綺麗だ……手を入れて整頓してはいるものの、ある程度は自然に任せている庭のなんと美しい事だろうか。

ラネール島には無い鮮やかで様々な形の花卉。それらは通路として敷かれた石の道から一步外れた場所から咲き乱れ、お辞儀をするように風に揺れている。

オレは気になる物が目に入る度に小さく声をあげ、時折走りその場へと向かう。

見て、嗅いで、時に触れてと、している間に後ろからゆつくりと歩いてきた彼が合流する。下穿きにあるポケットに手をつ込み、付かず離れずの距離で立ち止まる。

見張りの兵も、不可解に動く生き物も、押し潰すような重圧を与えてくる女王もいない。

いるのは恐らくだが、見張りとして一定の距離に立つ政略結婚相手の婚約者。彼の事は何も知らないが立ち振舞いからわかる、その強さが。

彼一人いればオレが何をしようとも止められると考えられて放置された。その彼は興味の無いオレに悪意の感情の一つすらぶつけようとしなない。

そうして、結果的に残り見えるのはどこまでも広がる青い空と蒼い庭。

「……………」

日の光を浴びて風が吹く度に揺れる草木の爽やかさに、息が漏れた。小さく息を吐き、そして沸き上がってきた妙な笑いと共に息を吸う。

ああ、これはなんだ。可笑しい、楽しい訳ではないのに笑みがこぼれる。言い様の無かったモヤモヤとした感情が体から抜けいく気がする。

呼吸がやっと出来た、そんな気がして大きく息を吸う。

どれだけ広かろうと、どうしても感じていた閉じ込められている閉塞感からやっと解放された気がする。

それは船内や室内という訳ではなく……………言葉に出来ないそれをやっと理解した。才

レは……うん、そうだ。オレは目に見えない不安にゆっくりと纏われていたのだな。

「おい、ゾーラ族」

「……ゾ？」

何だかソワソワする気分を発散したくなり足取り軽く歩き出した。近くに川でもあれば飛び込んでいただろうオレの足を止めたのは今まで数単語しか聞いた事の無い声。振り返れば真つ直ぐにこちらを見ている赤い瞳と初めて視線が重なった。

「始めに言明しておく。政略結婚の上男同士だ、まどろっこしい建前も言葉も関わりも必要ないだろう」

長い脚を動かし……一、二、三、四歩で立ち止まる。オレなら十歩近く動かさないと移動出来ない距離を軽々と詰めてきた。

「稀少な種族や王族だからと特別視するつもりも一切無い、おれの邪魔をする者は排除する」

布切れ覆われ喋っている口元は見えなかった。ただ代わりにしかめられた眉間と細められた目が口程に感情を表している。

嫌悪……というより、怒り。

「お前の事情など関係無い、同情も哀憫もする気はない。余計な知略をせず大人しくしている。もし弟や妹に対し悪意のある企みなどしてみる」

ポケットから手を抜き出し、動かした指先からボキボキと派手な音が鳴る。威嚇音。低く低く、唸るような声色がそれを示している。

「手足をもぎ散々翳った後に、命を奪われた方がマシだったと後悔させてやる」
視線だけで息の根を止めんとばかりのそれに言葉を失う。

かつて対峙した山のような大きさのオクタロックや、白銀の毛並みを持つボコブリンとライネルに囲まれた時と同じ背筋に感じる痺れるような感覚。

だが、その声と視線と威嚇音。バラバラなそれらを繋ぎ合わせたそれは。

「……………君は」

船内でペロスペロー……………義兄になる相手から言われた言葉が脳内によぎる。
なるほど、これは確かに。

「思ったより、良いヤツなのかもしれないな！」

「……………あ？」

「すまない、うん。そうか。そうだな！」

反射的に出た声量は想像よりも大きく、加えてその内容に一呼吸置いた後に彼は眉間を更に強くしかめた。

全て頭の中だけで展開して結論を出して、返答としては不可解だったろうそれに謝罪する。益々楽しくなってきた気分そのままに彼の背中を手のひらで痛くない程度の強さで何度も叩く。

避けるのも簡単だったろうにわざと受けたそれは複数混じった表情から理解出来る。オレの真意を知りたいのだろう。

「安心して欲しい！そんな考えは一切ないゾ、ヒレの一枚や二枚賭けてもいいぐらいだ！」

胸元で拳を強く握り、弾けるような気分のまま笑顔を向ける。

彼の怒りや威嚇をこの上ない至近距離で直に向けられたというのに、怯える所か破顔を見せはしやぎ始めたオレに向ける目は冷たく困惑している。それでもそれを隠し探るように目を細めていた。

笑顔を止めようにも止めれない。だって。

今の言葉を簡単に要約すれば『家族が何よりも大事』それだけだろうか？

奇遇だ、オレもそうしてここに来たのだから似た者同士じゃないか。信念を持つ者は、大事なものを持つ者は信用できる、なるほど確かに彼は悪いやつではないのだろう。

「しがらみのある出会いの仕方が悪かったな、仕切り直そう！ オレはシド、ゾーラ族の王子だ！ どうか仲良くして欲しいゾ！」

「……………」

政略結婚相手、警戒すべき相手、そんな事は関係ない。一応女王も言っていたがそうすべきだな。仲良くして、友になって悪い事など何もないだろう。

船の上でペロスペローにやられた行動と似たような、それでも根本的に違いオレは自身の手を差し出した。握手は共通の行為だろうか？もしかしたら手に持つ何かを差し出すのが彼らのやり方なのかもしれないが……まあ持っていないだから仕方ないな！

訝しげに、先程よりも眉間の皺を深くしオレとその手を見つめる彼。警戒？呆れ？確かに知識と知っているそれを名乗らせるのは二度手間で不可思議で訳がわからないのだろう。

でも、だ！

「勿論君の名前は知っている、だが名乗ってくれないだろうか！」

「……………」

「オレには解る、これでもヒトを見る目には自信があるのだゾ！」

「……………シャーロット・カタクリだ」

何度もしつこく訊ねた事でか彼は名前だけ名乗り、差し出したオレの手を弾くように叩いた。パンツ、と乾いた音が辺りに響く。

カタクリ。うむ、確かにそうだが……………そうではないのだが。

「!？」

「ゾツ、それでは宜しく頼むゾ！」

叩いた右手を追いかけ両手でガツチリと握り込む何度も縦に振って握手をする。これからオレはこちらの世界のルールに従わねばならないのだから、握手のルールくらいは譲歩してくれても良いだろう？

片目の端を震わせこめかみ辺りに血管が浮き出たのを確認した、先程よりも直球的に理解出来る怒り。その顔に言おうとした言葉が……………突然に頭をよぎった記憶に消された。

「つて、あ」

彼の手を離し、そのまま顎に手を当てよぎった思考について考える。蘇るのはどうにも忌まわしい記憶。

これは……不可抗力になるのだろうか。それとも判定としてアウトだろうか。

「すまない。少々訊ねたいのだが」

「……………」

いや一人では判断が出来ない、聞こう。オレを睨み続けている彼を見上げ、胸元に手を上げる。今度は拳ではなく掌を向けて訊ねる。

未だに怒りを滲ませる顔のままの彼と改めて目を合わせる。

「早速約束を破ったか微妙なのだが、オレは君の母上に武器を突き付け攻撃してしまっている」

「……………それが？」

「胎内に赤子がいるのだろうか？君の弟か妹かが。確かニンゲンはそうだったろう？彼女には怪我一つすら負わせていないが、危害を加えたも同然だ。それともこれは約束前で無効と考えて良いのだろうか？」

「……………」

続けざまに紡いだオレの言葉を聞き入れ、そして噛み締める事ほんの数秒……彼、タクリは今までの短時間では当然かもしれないが見た事の無い表情を浮かべていた。

鋭い目付きの瞳を見開き、パチパチと数回瞬きを繰り返す。それはまるで呆気にとられるように。

「……………」

「？ えつと、カタクリ？」

「……………」

カタクリは何も答えない。首を傾げ、再度訊ねれば頭の飾りがジャラリと鳴った。その音で……周りを覆っていた空気が……どう言えばいいのか、彼の周りを囲っているオーラというか……とにかくそれが、変わった気がする。

「……………そう、だな」

「ゾツ……………」

……細めた目が笑ったように見えたが、気のせいだろうか。声色に変化はない。

彼はオレに背を向けて数歩先に向かつて歩き出した。オレはその後を小走りで着いていく。横に追い付き、前に追い抜き顔を見上げる。その顔は先程の室内で見たのと同じ顔付きをしていて、そして、全く違う顔付きをしていた。

「それは別に構わない。狙われた獲物がママ相手への抵抗を、攻撃に含めるは無意味だ」

「……………そう、か？」

「最も今後一切許される事ではないがな」

「当然だゾ！オレもオレの家族が、一族が大事でその為にここに來たんだゾ！」
冷たく吐き捨て歩く彼の横を共に並んで歩きながら会話を続けようとする。それでも長い脚を持つカタクリの速さに陸を素早く歩くは向いていないオレが追い付くには小走りで走るしかない。

だからと言って種族差によるそれに対し哀れみを向けられたくはないし、彼も向けては來なかつた。

だから、オレ達はそのまま庭を歩き続けた。

このまま穏やかに、何事もなくオレがここにいれば終わると信じていたから。

荒れ狂う下海と触れ合ってしまった事で長い間外界との遮断を続けていた我らゾーラ族とて、例外では無いと気付く程の……時間も無く。

*

「ところで新生活には物入りとして必要だろうと島から五百ルピー程持ってきたのが足りるだろうか？」

「……ここではその貨幣は使えないが」
「ゾツツ!!! ああ、やはり……何と無くは解っていたゾ……」

コムギ島

「どこに行く」

「ソツ」

仁王立ちでオレを見下ろす彼の言葉に、咄嗟に返せず黙ってしまった。

厳しい目をしているそれは随分と昔、悪戯がバレたり危険な行為をした時に叱つてきた姉さんと似ているがそれより遥かに鋭い目だったのだから。

*

女王のいる島から彼が統治しているコムギ島に移動して今日で三日目になる。

初日は目に映る全ての新鮮さに良いヤツであるカタクリに色々と訊ねていた。コムギ島に到着したのは夕日が傾く寸前で、見物出来る時間としてはかなり短かっただろ

う。

それでも目に入る無数の未知のもの。答えてくれるかは五分五分だったが別に構わない、時間はあるのだから。

自由に動ける訳では無く、まるで人目に触れないよう島内を移動し彼の住居だろう城に辿り着いた。それでも室内にあるありとあらゆる物を名称から用途まで訊ねた。何せそんな事を聴けるのは彼だけなのだから。

途中でオレにつけるといふホーミーズにその役割を投げられたが。

二日目は外は出歩くなという彼の言葉を守り、城の探索。

女王のいる本島を離れてから気付いたのは島によつてホーミーズの数が違う事だ。あの島が特別に彼女がいるから多かつたのか、逆にカタクリが望んでいるから少ないのかはわからないが圧倒的に数が違う。

動いて喋っている食べ物や給仕や執事のような生き物は居れども、本島程の数はいない。オレに宛がわれた使われた形跡のほぼない客間やそれらに附属する部屋には全くといっていい。綺麗にされているから掃除の為に入ってはいるのだろうが常駐はしていないさそうだ。

向こうの島のように喋る陶器や扉の姿は無く、いやそもそもまず……ひとけ……人気がない。彼

と僅かなホーミーズ以外の気配を感じない。

この高い高いお城、階を分けてならいるのかもしれないが……どうにも人気を感じない。

そして案内どころか近付く事も無かったオレの部屋から離れているとある一画には、遠くから見た限りですらホーミーズの一体も確認出来なかった。

きつとそこが彼の部屋。オレ自身に興味がない、というより人と関わるより一人で居たい性格なのかもしれない。

だというのに人質を監視せねばならないとはいえ、場所としては真逆の位置にあるほど離れているとはいえ、同じ屋根の下にいないといけないのは大変だろう。

だから苦勞を掛けるだろう彼の言葉を守り大人しく常識の範囲の室内の散策で済ませた。

だから今日、出された名前わからないが美味しい早めの昼食を一人で食べ、諸々の準備をした後に嬉々と出掛けようと向かった入り口にカタクリを見つけた時驚きで声が出なかった。

「カ、タクリ……」

「言い訳は聞き入れない、一人で外を出歩くなと言った筈だが？」

「ゾ……」

ん……むう、どこでバレたのだろう。初日にホーミーズの眠る時間や起きる時間を確認し、また二日目に手薄になる箇所を確認してイケると思ったのだが……やはり姿の见えないカタクリを撒くのは用意ではなかったか。

しかし確かにカタクリの言う通りだ。一人が好きそうな彼を考えオレ一人で外を見つけたのだが……それなら仕方ない。

「ではどこに行く？ オレは仕立て屋に行きたいから途中で寄ってくれないか」

「…………お前な……」

「？」

カタクリに近付き訊ねる。確かに地形も場所も知識が何も無いオレ一人で出歩くのは宜しくないな、昔好奇心と挑戦心だけで雷獣山に行った時を思い出す。

あの時も怒られ心配され、しばらく御付きの兵を付き添わせてでないと一人の行動が許されなかった。つまり似たような事だろう。

だから手間にならないように提案をしたというのに、彼の返事の声色はあまり軽やかではなかった。

「……意図の汲み取りどうなっ……ん、いやそうか」

目元を引くつかせていた彼が途中で何かを思い付いたのか、布地で隠された口元に手をやり……数秒後何かを納得したように頷いた。

「部屋に戻れ、仕立て屋を呼んでやる」

「ああそれが出来るのか、それなら頼むゾ」

「……………」

ゾーラの里でやっていた、謁見室に職人達を呼ぶようなものか。何だそういう仕組みはどこも変わらないのだな。考えれば女王の息子だ、権限は充分にあるし、構えた店ではなく出張し出先で行うやり方をしている店はどこにでもあるだろう。

オレの言葉に彼は一瞬驚いたかのように僅かに目を開き、そして納得したように細めた。少し呆れたように見えたが……なぜだろう。

そのまま電伝虫の場所へ向かった彼に着いていく。部屋に行けと言われるが、電伝虫を使うところを見たいと押し切る。

電話をかけている彼の横顔と手付きを見つめる。早すぎて何がなんだかわからないな、そのまま話し始めるが……うむ、わからないな！

まだ一回しか使った所を見た事がないのだから仕方ないだろう。ペロスペローに教えてもらおうとしたのに教えてくれなかったし……まあ、カタクリに聞けという事なの

だろう。用事が済んだ後で良い、やり方を聞こう。

「——ああ、取り敢えず採寸だけで良い。明日辺りに細かな連絡が島中に回るだろうが」

電伝虫越しに話しているカタクリの背を見ていた。シャキリと伸びたその背は高く、そして電伝虫を使うために少しだけ丸めている。

うむ、とても長い足だな。

彼に案内されたオレの部屋、ホームーズに教えられた部屋の隅にある謎の空間の名前はクローゼット。それは、衣類を納める箱。

元々衣服を身に付ける習慣が無かった我らゾーラ族、一応必要だろうと持ってきた僅かな衣類や身だしなみとしての装飾らを全て納めてもクローゼットの空間は余っている。

そしてニンゲンの世界では服は毎日着なければならぬものだという、というなら持参したそれだけでは圧倒的に数が足りない。

必要なものだ。オレが、というより最低限の身だしなみとして。

「まだ居たのか」

「当然だゾ。仕立て屋はオレが呼んだも同然なのだろう?」

「自惚れるな、式の際にお前が着るものの確認がメインだ。多少兼ねてるだけでな」
「ああ……なるほど」

電伝虫に受話器を置き、振り向いて呆れたような目線をカタクリはオレを寄越してきた。何がそんなに納得出来ないのだろう、何もしていないというのに。

だがそのまま続けた彼の言葉には腕を組み頷くしかない。権力や力づくで動かした訳ではない、必要に迫られた行動。

オレと、彼の……結婚式で着る衣装の、確認を。……オレと彼が結婚、するのか。本当に、オレと、彼が?

……うーむ……やはりどうにも、不可思議で複雑な気分である事に変わりはない。

「……あ。お金、支払いの事なのだが」

「一文無しのお前に払わせるとでも思ってるのか」

「むう……すまない、ありがとう恩に着るゾ」

そんなモヤモヤした心境を吹き飛ばすように思考を占めたそれは着て貰い仕事をする相手に支払う対価としての貨幣。

ラネール島から持参したきらびやかな宝石で作られた貨幣はこちらでは同等に使え

ないと初対面時の彼に言われた。勿論ルピーが宝石である以上全く使えない訳ではないのだろうが、普通に買い物時に使う事は出来ないだろう。

商品を手に取り、ルピーの宝石を差し出した所で……一般の店では対処が出来ないだろう。

「まず換金をする所からと考えていたのだゾ」

「……………」

もはやただの宝石でしかないルピーをこちらの貨幣に換金するしかないと考えていた。だからまず質屋か換金所に行かねばと。

そんな極々当たり前のオレの言葉に彼は何とも言いがたい表情を浮かべ、深く深く息を吐く。

「…………質屋の位置すら知らないだろう」

「そうだな。だから歩きながら散策しようかと思っていたのだゾ。まあ看板に書かれた字は読めないが」

「……………」

「あ、一応だが数字なら読めるゾ？」

産まれてこの方百年と少し、殆んど外界と関わずに生きていた弊害がまずこれだ。字が読めない。ゾーラ文字なら当然に読めるし、僅かな外交でどうしても必要になって

いた数字ならわかる。

そもそも言葉が通じてしまい、文字がわからなくともあまり不便で無かつた事が悪循環を起こしていた。折角の機会だ、言葉や文字を覚えよう。

呆れを通り越した無表情の彼は何も言わずに歩き始め、オレもその後が続く。

途中で会つたホームーズに仕立て屋が来た時に行う手筈を指示し、やはり余り使われた形跡の無い部屋に通される。部屋に戻る気が無いオレはここで待てという事らしい。

部屋を出ていった彼の背を見送り、部屋の中を見渡す。

女王の城はどこもかしこも甘つたるい香りが充満していた。当然とばかりにあちらこちらに菓子類が飾りとして置かれていたのだから。しかしここは違う。それらしい物は軽く見るだけでは見付からない。

足を室内の深くまで進め、窓に近付き手を伸ばす。ここが高い場所にあると表し、豊かな街並みを見せている透明なそれは硝子ではない。

額をぶつけないよう目を、鼻を近付け確信する。これは船の中で何度か見たペロスペローの能力と同じものだ。

窓にかけられた薄い羽衣のような布切れに見えるそれからも微かに甘い匂いがする。それこそ壁や家具からも。元々街全体がそんな感じだったし、ここは国全体でそうなの

だろう。

ゾーラの里では全てを石で作っていたようにここでは食べ物で作っている、それだけだ。

そして彼の拘りなのか、あまりゴテゴテとした甘さに囲まれないようにしているのだろう。それでも時折ある強い香りの家具がとても良いアクセントになっている。

そうしている内にノックの音が。

返事と入室の許可をすれば数日で見慣れたホームミーズに案内されながら幾人か入ってきた。まず先にカタクリが、その後にくよくように同じ衣服を身に付けたニンゲンが四人。

衣装が同じでもやはり大きさは違う。一番小さなニンゲンはカタクリの膝にも届かず、一番大きくとも腰まで届かない。

そのニンゲン達はオレの姿を見て一瞬驚いたような顔を浮かべたものの、すぐに笑みを作り明るい声色でにこやかに挨拶をしてきた。

「これはこれは、婚約者様。この度はご結婚おめでとうございます」

「本日は採寸を行わせていただきます。ご希望があれば何なりと申し付け下さい」
オレに向けるにこやかな、張り付けたような笑みの向こうの真意はわからない。そも

そもニンゲンとゾーラ族とは種族からして違うのだから顔付き一つで全てを理解出来るとは思えない。

だから、ニンゲンではない謎の種族を目にして警戒する彼ら、あるいは彼女らに対してオレがすべきことは。

「有り難う。優しい言葉感謝する。文化の違いでわからない事も多々あり迷惑をかけるだろうが、宜しく頼むゾ」

出来る限りの敵意も警戒心も無いように穏やかに話し掛ける事だ。

凶悪な異種族に噛み付かれる事も想定していたのかニンゲン達が少しだけ戸惑っているのがわかった。そんな者達の狼狽えを解消する手助けはせず部屋に置かれている椅子へとカタクリは腰掛けた。

そしてそんなニンゲン達と見合う事、十数秒。

「……始めたらどうだ」

彼の呟かれた低い言葉に、見えない泡が割れたように部屋の中が慌ただしく動き始めた。

*

「それでは計測を……えっ!？」

カタクリの言葉通りオレはやるべき事を始めていた。体に身に付ける衣類の採寸……殆んどやった事等はないが島を出る前に何度かやったからやるべき事はわかっている。

だからすぐに身に付けている衣類を脱ぎ、ラネール島では常だった何も身に付けない姿になろうとしていた。それなのに上を脱ぎ、下に手に手をかけた途端慌てながら数人止めに入ってくる。

曰く。

全てで無くても大丈夫、だの。

シタギまで脱がなくても、だの。

カタクリ様がまだ室内にいらっしやいます、だの。

……良く、わからない事をひたすら言われてオレはただ首をかしげるしか出来なかった。そんな中オレの周りを囲う者達はオレが脱いだ衣類を拾い、身に付けるように手を貸してきた。

大人しくそれに従っていれば顔色一つ変えず横目でオレを見ていたカタクリがポツリと呟く。

「……流石は生粋の王族サマ、手助けされる事そのものに慣れてやがる」

そう吐き捨てたそれにオレが良くわからず首を傾げるも、周りを囲うニンゲン達は彼の言葉の意味がわかったように何度も頷く。

「……えっ、あ。婚約者様は王族様なのですか!」

「そ、それは。えっと……尚更婚姻前に肌を晒すのは如何なものなのでしょうかね?」
「……?」

オレの周りを囲み、伸ばした腕や首周りを測りながら声を上げていた。いい加減彼ら、なのか彼女ら、なのか知りたのだが……多分このまま訊ねる事もなさそうだ。

そして言われたそれは……相変わらず良くわからない。オレだけなのかカタクリを見れば彼は目を閉じ、何も気にしていないような表情を鼻から上だけ覗かせ見せていた。

「? 別に構わないゾ?」

「気にしなくて良い」

「えあ……さ、流石ですカタクリ様!我々のような一般市民には到底……あれ、そういうえば下着はどこに……えっ、あれ、もしや」

「必要なのか?」

「勿論です!衣服をお持ちする際に御用意致しますね!」

そう言いニンゲン達はオレの体の採寸を再開した。いや、言葉を発してる最中の者は止まってはいたが別に他の者は変わらず進めていたのだからそういう事ではないのだろうか。

そのままオレの体をあちこち採寸され続ける。そのまま話の流れで身に付ける普段着や式での衣装の望みを周りを囲む数人から代わる代わる何度も幾度も違う言葉で訊ねられ……

「……肩や腕や腰のヒレをpushさえ付けられるのは、好きではないゾ……」

そう、眩暈がしそうな程混乱する最中言うのが精一杯だった。オレの言葉に囲うニンゲン達は次々と色んな事を呟いてくるもその内何割もわからず、ただただ頷く事しか出来なかった。

そうこうしている間にも緩やかに時間は過ぎて行き、室内に置かれた大きな柱時計の短い針が三を、長い針が十二を差そうとしている時だった。

急にカタクリは立ち上がり、何も言わずに部屋から出ていった。

その様子に呆気にとられ背中と閉められた扉を見送るしかないオレと違い、周りの者は達はワイワイと甲高い声を上げて盛り上がっている。監視の役割を放り投げ、そんな役割があるとは知らずにいなくなったカタクリへの情愛を込めた言葉をきやあきやあと

甲高い声と共に幾度も互いに投げ合っている。

「羨ましいわ婚約者様、人間とは違うのにあのカタクリ様と……おっと、失礼」

「本当にカタクリ様つたら素敵。この時間だもの。今も精神統一の為にメリエンダに行かれたのよ」

「……精神統一？メリエンダ？なんの事だゾ？」

聞いたことのない、理解の及ばない言葉を紡がれ反射的に訊ねる。このニンゲン達がカタクリという存在に憧れているのは声色だけでもわかる、理由も今後もオレにどうこう出来る話ではない。

だから疑問だけをただ訊ね、答えを貰って話を終わらせようとした。

なのに。

「カタクリ様のメリエンダの正確な時刻ときたら……」

「そんな時でも揺るがないあの気高き姿に……」

「眠る時でさえ地面には背をつけないその……」

「一辺の隙も無いその姿に憧れ……」

あれよあれよと交互に、そして時には同時に語りだしたそれにきつと目を白黒させながらオレは奔放されていた。

少し前まで王族だなんだと敬われていた気がするが、どうやらそれはカタクリの持つ威光の前では霞むものらしい。

めりえんだ？聞き慣れない言葉のそれが何なのか、良くわからない。今それを行いに行ったのか。

何故睡眠時の事も共有されているのだろうか？彼一人だけの人を寄せ付けずに城に思わせるが、意外とそうでもないのだろうか。

それともそんなプライベートな事でさえ共有される程に人気者なのだろうか。この周りの騒ぎ具合からしてこちらの方が有り得そうな気がする。

……人との距離を取っている彼、囲まれる事を望ましく思っていないだろう彼。そんな彼の為に、オレはどうすれば良いのだろうか、何が出来るのだろうか。

人質として見張らねばならないが、バレないように問答無用で脅しつければ構わないだろうに、勝手をやるオレを痛め付けて構わないだろうに。

海賊である以上純粹無垢であるとは思わない。だがそれをしない、優しさを持つ彼の為に……オレは。オレが、彼に返すようにすべき事は何なのだろう。

*

「御希望の通りのドレスをまたお持ちします、普段使いの衣服はまた別にこちらは早めにお持ちしますね！」

そう言い、彼女ら—— そうオレを囲っていたニンゲン達は彼女らだったらしい

—— は城を後にした。出来る限りの早めに持つてくるといふその言葉を受け取り、大人しくオレ一人で彼女らを見送る。

カタクリは……あれからどれだけ時間が経つても戻つてこなかったのだから。何も悪巧みをしないから当然だと思ふ反面、見張りとしてそれで良いのかとも思う。ここでまたオレが城を出て外に行つてしまえばどうするのだろう。

昨日散策をした城の中をただ歩き……ふと思ひ立ち、足を翻して一度失敗した入り口へと向かう。

この悪巧みを成功させたら、彼はどう思うのだろう。

その歩いている最中、衣類を纏うには違和感があり剥き出しになっている腕先やヒレを撫でる。彼女達も悪意があるのかなのか、色々な事を言っていたが……きつと用意される衣装にて覆われるのだろう。それでもプロな彼女らはきつとオレの望みを叶え

てくれると信じて。

……それに、しても。

「……ヒレの湿りが本当に、酷くなっているゾ……ウロコもこんなに……」

ラネール島にいた時では到底有り得ない程にボロボロになってきているウロコにヒレに皮膚。少し擦るだけで弱くなったウロコが剥がれ落ちる。

壁に飾られた光源の光を反射し光るウロコを手の中に握るように持つ。落とす歩くなど、はしたないのだから。

しかし船の中はともかく島に来てからもこの弱体の進行が止まらないという事は……

ああ。島の水が、恋しい。

「ゾツ!?!」

そうこうしている内にオレは数時間前と同じルートで入り口へ向かい歩き続け、また同じ場所で立ち止まった。

入り口前の壁に凭れかかり腕を組んでこつちを横目で見ているカタクリと、目があつたのだから。

「さ、て。二度言うつもりはねエが言い訳でもあるのか？」

オレを見る目は相変わらず冷たく、どういう意思や意図があるのかはわからない。

どういふ理由がありオレを止めに来たのかなんてわからない。そもそも何故戻つてこなかったのかもわからない。

オレ一人にしてもこうしてすぐに捕まえられるから大丈夫だと言いたいのか、めりえんだとやらはそれほど時間が掛かるもので戻つてこれなかったのか。

わからないそれを聞くより……それよりも、何よりも、オレは彼に言いたかった。ずつとずつと採寸をされて、めりえんだでカタクリがいなくなつてからもずつと考へていた。

「カタクリ、この城にいるのは君とオレだけなのか」

望めばいくらでも人に囲まれる事が可能な彼が、本当に孤独を望んでいるのか知りたかった。

「……少し前まで、居たりもした。戒兵やホームーズ、今さ三食調理をしに来ている料理人がいた事もある」

「今はいないのか？」

「階下にいる。一定の距離を離しているし、また近寄る時間も分刻みで決まっている」

「……………」

……婚約者という名だけの人質であるオレを除いて、か。

訊ねたオレの言葉を不愉快そうに、それでも初日のように無視をする事なく答えてくれるカタクリ。ひそめた眉によって作られた眉間の皺を深くした後、吐き捨てるように言う。

「気に食わない連中を近寄らせるつもりはない。失敗する奴らもだ、お前も何か余計な事をして見ろ。前の連中のように”いつの間にか”いなくなっているかもしれない……」

「カタクリ、電伝虫の使い方を見せてくれないか！」

「……は？」

「父上や姉上達と連絡をとりたいのだゾ！そろそろ式の日時が決まるのだろうか？それまでにやり方を覚えたいんだ」

言葉を遮るように言ったオレの言葉に彼は更に眉を潜め、意味が本当にわからないとばかりの顔を浮かべていた。

それでも、言わずにはいらなかった。

ゾーラ族とニンゲン、美醜をわかる程の理解力の違いは持っていないなくても、不可解の

表情を浮かべている、それくらいの違いはわかる。

顔は違っている、二つの見合う目は……どの生物も同じなのだから。

彼の目が沈む寸前の空や水平線近くにある赤色に近い瞳が困惑に揺れるのを見て、オレは込み上げてくる笑いを抑えられなかった。その姿を見てカタクリが益々不機嫌になるのもわかったが申し訳ない、止められなかった。

「そう言えば、彼女達は……いやもしや内情を知るもの以外オレが男だと知らないのか？身に付ける衣服の装いやオレに対する振る舞いから考えていそのような気がするゾ」

「ワザワザ面倒を口外すべきか？たかだか替えの利く、魚人もゾーラ族の違いもわからん国民に？」

「……成る程そういうスタンスなのだな。納得だゾ」

「そもそもお前もわかっていないだろう。性別に言及したのはママとペロス兄とおれだけだ」

「……人を、良く見ているのだな君は。凄い……ゾ」

*

不可解ながらも、ふわふわと厳しさを滲ませる彼の周りを漂いながらオレは平穩に過ごしていた。きつと、そう過ごせると信じていた。

じわりじわりと、少しずつ異変を体感じていたというのに。平穩だと思い込んでいた。

平穩ならば皮膚がボロボロになつたりしない。

平穩ならばヒレの湿り気が無くなり乾いた土地のようにかきついたりしない。

平穩ならば、少し触れただけで、ウロコがザリザリと零れ落ちて床に敷かれたカーペットを擦り光らせたりなどしない。

それでもオレ自身が平穩だと思い込もうとしていたのは……目を逸らしていたのだらう。

立派なゾーラ族を目指して志願した土地で弱り行く、事実には……

そうして、目を逸らしている内に事件は無慈悲に起きてしまうのは……何故なのだろ

う
か。

足掛かり

「姉さんそちらは変わらないか!? 何か問題は起きていないか?」

『大丈夫だよシド。それに昨日も話したじゃない』

「それはそうなのだが……やはり気になるのだゾ。父上の様子や、里の様子を知りたくて。何せ式の為に迎いの船で来られた二人に、こちらで会えるのはまだ先なのだから」

『……うん、そうだね。あつ、もしかしてそんな幼い稚魚みたいな事を言うのは寂しいからなの?』

「!? ち、違うゾ!? そんな事はない!」

『ふふ。……相手の人。えつと、カタクリ、さんだっけ。このうるりらの使い方を教えてくれたヒト、は。大丈夫? 優しくしてくれてる?』

「! ……何で、そう思うんだ姉さん」

『うーん、直接顔を見た訳でもないし、気のせいなら良いんだけど……』

何と無く、声に元気がないように聞こえたから。

そう、続けたミファー姉さんの言葉と共に動く電伝虫の顔と見つめ合いながらオレは否定をしようとした。

当然、何度もその問い掛けをされる事を想定していたから返答は……問題なく出来た筈だ。

ゾーラの里にいた頃では考えられないほどにひび割れ、色も悪く、湿りも無くなってしまったそれを。

はらりはらりと、慌てて動かし腕から簡単に剥がれ落ちた鱗を目で追いながら。

*

この前この城に仕立て屋を呼んでからそれなりの時間が経った。オレの体を隅々まで採寸して素早くも正確に作り上げられたオーダーメイドの衣服が贈られる程の時間

が経つ程は。

その期間中に起こった事を簡条書きに並べるとしたらこうなる。

・カタクリの結婚相手 —— つまりオレの事だが —— の発表

・その相手の大体の紹介

・結婚式の日時

・招待客の発表

・結婚式まで城に閉じ込められるオレ

・暇をもて余したオレの咆哮

・散々ねだった伝電虫の使い方を教えてくれる彼

……外に一步ですら出る事を禁じた責任か何なのか、オレに対して彼、カタクリは目を激しくひくつかせながらもそれなりの態度で接してくれた。

陸に打ち捨てられた雑魚に対するような態度ながらも、衣食住の世話をするホームミーズの手配やもて余す暇を埋めるような伝電虫の使い方を教えてくれた。

そうしてわかった事。女王、そして仕立て屋の態度から考えて……オレの立場や、存在はそんなに良いものではないのだろう。

現に島やその他の国全土に向けて発した発表そのものの反応はオレは知らない、だが良いものではないとはわかつている。

ゾーラ族だからじゃない。男なんて事は伝えていないし伝える事もない。オレが、ニンゲンでないからだ。

ニンゲンでない以上歓迎するにも限度がある、姿形も何もかも違うそれを。……そう考えると寧ろカタクリの態度こそが不思議に思えた。

こんな、普通ならばほんの僅かな時間の採寸の行為をせねばならない程の一目見て顔を歪ませる相手を……いくら女王の決めた政略結婚とはいえ、接して親切……とは言いがたい態度ではあったが相手をしなければならぬなんて。異種族で同じ性を持つ相手に。

何より。結婚、しなければならぬなんて。異種族で同じ性を持つ相手に。

……一番始めに会った時に感じたそれは間違っていないなかつたと思う。

彼は。カタクリは、良いやつだ。握手として伸ばした手を弾かれ叩かれようとも、

「カタクリ、失礼するゾー！」

それにオレが頼るはもはやカタクリしかいない、他には誰もいない。ペロスペローは

オレとは一線引いていたし今どこにいるかはわからないし女王なんでもつての他。

午後差し掛かる時間帯、城内部を歩いて辿り着いた部屋のドアをノックし、ここ数日で学んだ元々返す気のない返事そのままにオレは室内へと踏み込んだ。

机に向かいながら座り込んでいるカタクリが手に持ったそれから顔を上げずに目線だけでオレを見る。

「読書中すまない、オレの外出許可の話をしたのだが！ 少し行ってみ……」

「却下だ」

「ゾツ……まだ何も言っていない、早いゾ」

彼が手に持つそれは石板ではない、紙をまとめたその名は……確かそう、本だ。我らゾーラ族が石に綴るように彼らニンゲンは紙に綴り纏めたそれを本と呼ぶ。

青い背表紙をしたそれを持ったままカタクリはオレと目が合わせていた。冷たくオレの意思を相変わらずはね除けながら。

「必要な物はお前が来る前に全て用意したし、都度手配している。外に出る必要は無」と言つた筈だが

「勿論それは感謝しているゾ。毎日食べるご飯やデザートはとても美味だし、何かあればホーミーズに言えば何とかなっている！」

「……………それで？」

彼の鋭い目が、苦手としか言い様の無いビリビリと痺れそうな目線を向けてくる。だがそれに怯むオレでは無いゾ！

「それでも我らはゾーラ族！ 水の民なのだゾ！ この城の中に閉じ込められて数日間、そろそろ川や湖や池でも良いから泳ぎたいのだゾ！」

「……………」

思うがままに心に浮かんだそのものを言葉にして彼にぶつける。常日頃から新鮮で美しい水に囲まれた里から離れ、これほどの長い期間泳いでいないのは初めての事かも知れないのだから。

泳がなくても支障はない、ウロコが剥がれ落ち皮膚に妙なひび割れが入り出したのは泳げないからではない。

流石にここまでくれば……………もう少し前からわかっていた、ゾーラの里から離れた事で体に異変が起きているのだと。

だがそれを嘆いてもどうしようもない。だから願望のままに唯一話す事を許されている結婚相手に言葉を投げ掛ける。どうせこのまま下らないと吐き捨てられるとしても……………

「……だろうな」

「ゾツ？」

なのに紡がれたのは予想外の肯定の言葉。反射的に跳ねた体と共に尾ビレが跳ねる。オレのそんな反応にすら微動だにもせず淡々とカタクリは話を続ける。手に持っていた本を片手でパタンと音を立てて閉じ、オレの目線まで持ち上げて。

「少しだけ可能な範囲で調べてみた。まア故意に世界から遮断していたお前らの大した情報は無かったが」

「……え」

椅子から立ち上がり左右の壁に埋め込まれたかのように固定された本棚へと歩みを進め、その中に右手に持っていた本を片付ける。

まるで当然とばかりに振る舞うカタクリの背をふわふわと水面を漂う泡のように何も言わず、言えずに見つめ続けていたが急に泡がパチンと弾けたように意識が戻る。

あまりの衝撃に、意識が遠くへ飛んでいたようだ。だって、何せ……ええ？ 本当に？ 「……オレら、ゾーラ族を調べていて、くれたのか」

「まアそうだ。だが書物ごととそれぞれ異なるそれらバラバラの情報を纏めた所で恐らくお前には違うと吐き捨てられるがオチだ」

カタクリの言う通り、オレ達ゾーラ族は外の世界との関わりを遮断していた。それは意図的や彼の言う通り故意に……という訳ではないが積極的に関わろうのもしなかったのも事実。そういう意味では、故意にかもしれない。

僅かに関わった者達から話されそして伝えられただろうそれが……どれだけ正確なのかはわからない。ただ目の前にいるカタクリがその情報を鵜呑みに出来ない程違っているのは違くない、なにせ目の前にいるオレの姿や振る舞いだけでそういう程書かれている内容と異なっていると判断出来るくらいなのだから。

一冊片付けたカタクリは今度は左手に抱え持っていた数冊の本を戻しにかかる。横へ数歩移動し、空いている場所へとそれを戻す。

その行動が、手付きが、行動が。いやに穏やかで、まるで今なら全てが許されるのではないかと思えてしまった。

「……で、は、行つて良いのか?」

「駄目だ」

「何故だゾ!」

なのに普通に却下された。何だか理不尽に感じてしまう。

「何度も言わせるな、出歩かせる気は無い。丁度良いだろ、中庭にでも出て雨でも浴びている」

カタクリは行動そのまま高い鼻先を窓の方へ軽く指し示し、オレの行動を示す。窓の外には空を覆い尽くす暗い雲とそれから降り注がれ続けている彼の言う、雨、があつた。昨日から大量に音を立てて降っている。

……だがオレはとつくの昔に知っていた。空から何時間もの間、絶えずに降り続けているそれはただの雨ではないと。

「あれは普通の水でなくベタベタするから嫌だゾ……普通の水が良いのだが……」

美しく透き通るような川や湖で泳ぎたい。それに一番近いのは空から満遍なく降り続く雨だろうと……昨日の夜から降るそれにオレは単身駆け込んだ。

だというのに肌に当たる度に包み込む違和感。言い様のないそれに全身に立つサメ肌。恐る恐る肌に染み込まないそれを舐めてみればやたらと甘い衝撃。

「? 洗面台や風呂、蛇口から出る水は水飴では無いだろうか?」

「そ、それはわかつているゾ!」

空からの雨ではない、飴……あれは、二度と好んで味わいたく無い現象でしかない。だというのに懇願にも似たオレの声を聞き入れた彼は首と目線だけをこちらに回し、当然かのようにふわふわと水面に漂う枯れ葉のように軽く答える。

その言葉によりくわかつているとばかりに食いぎみに答える。

なにせその蛇口から出された水でオレは寝ているのだから。

ここに案内された初日から、オレはキツチリとシーツに皺一つ無く用意されたベッドを一度も使わず、蛇口から出されたその水を浴槽へと溜めて小さく体を丸めて寝ているのだから。ラネール島から出港をしてここに来るまでの間の船の時と同じように。

正直に言えば浴槽は眠る場所にしては狭く、朝起きた瞬間は縮こまりすぎた体のあちこちが痛いしあまり望ましい場所ではない。

だが……これは我らゾーラ族の問題だ、オレ達が水中で眠るのは彼らには関係がない。ニンゲンの眠る場所はふかふかの布地で作られたベッドで、オレの為に専用のそれは用意されている。それをただ……オレは、使えないし使わないだけで。

だから。せめて。

「けれどももう少し広い場所で泳ぎたいのだゾ……君が調べたその情報にあったかは分からないが、泳がないとどうにも体が違和感を感じて仕方がないのだゾ」

「……どちらにせよ残念だが川も駄目だろうな、雨のように純粋な淡水ではない」

「??」

そんな頼み込むオレの言葉に彼が目線だけで振り返り、そしてまた目線を逸らして戻す。淡々と吐き捨てられたその言葉にオレは首を傾げる。

川が駄目？それなりの大きさの島だから大丈夫かと思っていたが、純粋な淡水じゃな

いという事は海に川が押され混ざりあっているという事だろうか。一応海でも泳げるから大丈夫だが。

「海水が混じっていても構わないゾ?」

「オレンジジュースだ」

「何故だゾ!?!」

「そういうものだ、諦めろ」

「……………」

だがあまりに予想外なそれには反射的に反応を返してしまう。

は?え?……………ジュース?オレンジジュース?川が、果汁で出来ている?……………何故?んん??そう、いうものなのだろうか……………

二の句も告げれずただ首を傾げて黙ってしまったオレを気に求めず、手に持っていた本を全て片付けた彼が元の椅子へと腰掛け冷淡に言葉を続ける。

目線はこちらに一瞥も寄越さず、机の上の何かしら書かれている紙に目を通して時折何かを書き込んでいる。近付いてその形を見ても、こちらの文字は……………ゾーラ族と違うその文字は、まだ読む事は出来ない。いずれ勉強せねば。

「……………ゾー……………普通の生活用水だけでなく、飲料水や料理用を使用する水もあるだろ

うに、川から使えないのか……だから、あんな味なのだな」

「……………」

読めない字を追うのは疲れる。疲れついでに口にした愚痴に似たそれに彼が反応する。

それも急激に引き寄せられ反応されるようなものではなく、ジリジリと下からねめ付けてくるような鋭い赤い目をこちらに向けて。背の高い彼にそんな事をされるのは初めてだ。

「何が、言いたい」

「ん………一つ言わせて貰えるなら、もう少し栄養のある良い水を使った方が良いのではないか？」

「……………あ？」

低い声が空気を震わせる。目には見えない威圧感のようなものが皮膚やヒレを震わせ、痺れさせてくる。パチパチとしたそれがなんとも言えなく恐ろしいが、引く訳にはいかない。

水の民のゾーラ族、そしてその王子としての水質に対しての違和感を感じたまま伝えねばならない。

「その水を食べ物やお菓子、この壁や床に使う資材の繋ぎとして使っているのだろうか？ならば。もう少し新鮮で、純度と透明感のある栄養素の高い水が好ましいのではないか？」

「……………」

「君達が食材にこだわっているのはこの数日間は何となく解った、ならばもう少し良い水の方が良いのではないだろうかとそう思うのだゾ」

オレが思うまま、感じたままのそれを言葉にすれば真つ正面から受け止めるようにカタクリは真つ直ぐに見据えてきた。鋭いその瞳がオレを居抜き、潰さんとばかりのプレッシャーを押し付けてくる。

それでもそれに怯まず視線を真つ直ぐに返していれば…………彼は小さく息を吐き、数回瞬きをした後深く目を閉じて、開いた後改めてオレを見つめてきた。

「水の民ゾーラ族…………お前は、そう思うんだな」

パサリと、手に持っていた紙を机の上に落とす。その声色は想像よりも遥かに穏やかだった。

攻められ、怒鳴られ一つ二つの暴力くらいは貰うのではないかと覚悟をしていたが…………やはり彼は、良いヤツ、なのではないだろうか。こんなオレの言う事を信じてくれ

る、彼は。

だからこそ大人しく領き言葉が続ける。彼は数回瞬きを繰り返し、憂いに似た目線を机の上の紙束からオレへと向けていた。

品定める、ように。

「……オレは……そう、思うゾ」

「……そうか。まア……美味しい物を作るには確かに水は欠かせないものだ。忠告と提案受け素直に取っておこう」

どんな目で見られようとも、どんな対応をされようとも、いくら品定められようとも、オレは怯む事はない。

その時。

締め切った屋敷内にすら届く甲高い爆音が遠くで響いた。

ガシャン、だのバガアン、だの……とにかく何かが大きなのが壊れた音がした。それも地響きすら届かない程の距離が開いているのに、聞こえる程の爆音で。

カタクリは目線すら動かさなかったが、オレは慌てて音が鳴ったであろう場所を探す為

に窓へと駆け寄った。飴で作られているだろう窓から外を眺め、音の鳴った正体を探す。

降り続く雨の向こうに見えたそれは、すぐに見付かった。オレの目でも見える程のそれ。別に目が悪い訳ではないが。

街中を通る川。小さな支流が何本もの合流したそれは、幅の広い大きな本流へと姿を変え高い場所にあるこの場所からでも見えていた。

それの……その川に架かる橋が土台から川の水流に浚われ、倒壊していた。

崩れた橋は降り続き増水した川の水に流されたのだろう。陸地に近い残った橋の上にはまだ、幾人ものニンゲンが残っていて、つまり、中央部にいた人達は流さ……

衝動のままに窓枠を突き破り、飛び出す。

「おっー」

高い屋敷から落ちるオレの背中に降り続く雨とカタクリの声がぶつかる。短い言葉で制止の言葉をかけられたが、今更止まれる訳がない。なにせオレは今……落ちているのだから。

「すまないカタクリー！」

短く聞こえるかどうかかわからない謝罪をして、腕を振り上げる。地面にぶつかる寸前に全身から腕に力を移し、力を込めた掌を下に向けて空中から呼び出す事を意識する。無事に現れた水流に頭から着地し、そのまま水流の一部を移動用の魚に変化させて、そのまま目的地へ移動を開始する。

バチャバチャビチビチと通常では聞く事の無い水の音をたてながらオレは進んだ。自分の足で進むより遥かに早いスピードで目的地まで。

降り続く雨によって溢れ返った川により橋が壊れ、人が流された。大量の水によって流される事で人命が脅かされるなんて、納得出来ない。

カタクリから言われた禁止事項を許可無く破るつもりはなかった。だが知ってしまつたこの状況で何もせずじつとしているなど出来やしない。申し訳ない、どんな者だろうと目の前に見える命を守る為に反射的に動いてしまふ体を止めれず、約束をオレは破るしかないゾ！

それに、しても。……ああ、感覚がおかしい。里にいた頃は常に自分と共にあつた筈の水が……どうにも、遠い。遠く感じている。作り出して乗っている水の魚ですら、違

和感がある。

それでも何とか目的の場所へと辿り着き、水魚を解除し数歩そのまま走り出す。

橋の崩壊事故によって悲鳴混じりにどよめいていた周りの声色がオレの登場により、ざわめきが増す。見慣れないオレの姿に戸惑っているのだろう。甲高くひきつったような声色がオレを囲う。

だが……そんな事に構っている暇はない。

ゴウゴウとニンゲンでは到底太刀打ち出来ない川の水を見て、川の中を周りで叫ばれ流されてしまっているというニンゲンを軽く目で探し、見える範囲にいない事を確認した後には飛び込む。

オレですら一瞬翻弄されそうな程の強い水流を身に受け、そのまま流るる水に身を任せながら突き進む。

(……居たゾ！)

水ではない妙に体に絡み付く果汁の川を自分の出せる全速力で泳ぎ進めば目的としている人影を見付ける。水面に浮かび暴れて沈み、それを繰り返しているその複数人に向けて力を込めた腕を振りかざし拳を握る。

手の周りを囲うホワリと暖かな力をそのまま、ニンゲンに向けて放つ。そうして果汁で出来た川の水が水流を作りそれに巻き込み陸地へと打ち上げていく。無事であるの

を気配で感じ、そのまま下流へと進み流されているニンゲンを探しながら進む。

幾人ものニンゲンの姿を見付ける事が出来れば、水流を作り出して陸地へと打ち上げる。それを繰り返していく。

そうしている内に案の定……水場も何もない場所から生み出す事や川の水を借りて生み出すそれ、水流が……出せなくなってきた。出せても本当に小さなもの。

それでもなんとかがギリギリ目につく一人のニンゲンを助け出せた。綺麗な渦も巻けず、いびつで小さな水流を。

でもこれで最後だ、今の、今日のオレではもう水流を作り出す事は出来ない。ぐつつすり穏やかに新鮮な水の中で眠れば別かもしれないが……そんな事を今考えても仕方ない。

目についた水面に浮かんで沈むニンゲン二人を両手に抱え込み、近くの陸に飛び上が。そのまま二人を陸に置き、もう一度川へと飛び込む為に足を踏み込もうとして。

「ひ、ッ……！」

背後で悲鳴とバリバリと体をかきむしる音が聞こえる。怯えるそれは……見なくとも、理解出来る。目線も、理由も。

………。それでも、水に呑み込まれた存在を見逃せれない、止まれない。

川へと飛び込み、探す。何となくだが、もうそろそろ終わりの気がする。何となく、勘
だが。

流されるニンゲンを掴んで、運んで、掴んで……片手が塞がった状況、浮き沈みして
いるニンゲンに手を伸ばして。

なんらかの物体にぶつかり変化した水流がニンゲンの動きを変え、伸ばしたオレの腕
のその脇をすり抜けさせた。慌てて目線でその体を追いかけて何とか掴もうとして
……

ふわり、と。

その瞬間何もかもが揺らぐような早さで、周辺の水ごと掬い上げられるような状態で
体が持ち上げられた。

オレも、抱えていたニンゲンも、すり抜けていったニンゲンも、掴めてすらいなかつ
たロープで繋がれ服を着ている小さな動物含め、全てが。

ザバリ、と。

激しくも包み込まれるような感覚の川から強引に引きずりあげられ、瞬きを二回する
間にオレらは素早く陸地に打ち上げられたのだと気付く。

「……………」

困惑とどういった種類かわからない悲鳴を上げるニンゲン達に周りを囲まれ、オレは混乱していた。なぜ、陸地にいるのだろうか。川に、川で泳いでいた筈なのに。

「あ……………うわあッ！」

今の現状に唾然としてしまい、理解が追いつく前に抱えていたニンゲンがオレの姿を見て驚いたままに手を振り払い石畳の地面に転がる。果汁で濡れて降り続く雨に濡れている体に汚れがつくが構わないのだろう。

そして……………目線を落とした事でその存在に気付く。白い、なんだかもちもちとした網に丸ごと包み込まれて引き上げられたのだと。

魚を取る漁を長年してきたが、されたのは初めてだ。普段獲るのに網等は滅多に使わないが、こんな気分なのだな……………

その網がどこから投げられたのかと目線を動かし辿り……………その大元である白い網から伸びる、大きな人影を見上げる。

つい先程まで喋っていた人物、静止のそれを振り切りここに来たオレを見下ろす感情の読めない顔をしている青年……………カタ、クリ。

それなりの背丈である事は理解していたが地面に座り込んでいるオレと仁王立ちとばかりに立っている彼では本当に目線が高く感じる。

「カタクリ様だ……!」

「あんな大災害の危機にカタクリ様が駆け付けて助けてくれた!」

集まり騒ぎ立て盛り上がる人々の声に反応一つせず、彼が軽く手を動かせば白い網状に変化していたそれがぐにやりと普通の腕と手袋を着けた手の形に戻る。

普通のニンゲンではありえないその光景に近く昔の光景を思い出す。まるで天候を操っていたかのような姿の、彼の母親を連想し……カタクリのそれも同じだと気付く。彼もなんとかの実を食べた妙なニンゲンなのだろう。

なんとも不可思議で面白いものだ。食べたいとはあまり思わないが。

「ありがとうカタクリ、助かったゾ……」

「……………」

周りを囲うような人混みがザワザワと音を立てる。一つ一つの声は聞き取れるが、意味まで理解しようとは思わない。今のところ必要ではない音だ、受け入れてもオレの為になる言葉は何もない。

精々カタクリを称える声を聞くだけにしておこう。オレがすべき事は助けてくれた彼に礼を言い、約束を破ったそれに対しての処罰を受けるだけだ。

「オレ一人では助けるのがもう少し遅れていた。だから破ったその制裁でも罰でもな

ん——「戻るぞ」

彼はオレの言葉を遮ったあと左手が右手の手袋を外し、剥き出しとなった素手で二の腕を掴み未だに座り込んでいたオレを引つ張りあげて立たせた。

あまり元氣の出ない体で色々が無茶をして立ち上がるのも億劫に感じていた体は軽々と持ち上げられ、一瞬空中に浮いたような感覚に包まれ落ち着くと共に地面に立っていた。

………

駆け付けてきていた警察官らしき人々に一言二言指示をした後、彼はそのまま長い足を進めて歩きだした。つい先程まで軽い言い争いにすらなっていないやり取りをしていたお城……彼の、屋敷に向かって。

誰の意見も喝采も、何も受け付ける事もなく関係ないとばかりに歩きだす大きな背中をオレは見つめるしかなかった。

周りの人々の戸惑いが伝わってくる。なにせ今の、今の何気なくした行動は……

慌ててカタクリの背中を追う。周りのニンゲンは動かない。歩く度にぐちやぐちやと鳴る水を含み濡れた靴が不愉快だ。

「カタクリ！カタクリ、ちよつと待って欲しいゾ」

「……………」

「オレは君みたいに足が長くないし、歩くのは苦手だからそうして君に先に行かれると追い付けないのだゾ！」

「……………」

慌てて走りながら静止、もしくは速度や歩幅を緩めてほしいと遠い背に投げ掛けるがそれでも彼の足は止まらない。ここ数日、オレに対する態度から考えれば当然といえは当然だが。

カタクリが、暴力や暴言でオレを押しさえ付けようとするような事はほとんど無い。ただ関心がある訳でもない。

一番最初に会った時に言われたのが一番暴力的だったくらいだ、覚悟していた痛みや恐怖からは幅遠いもの。外に出るなと言う言葉でさえ、力付くではなかった。

オレは、外部からどう思われているのか詳しい内情はわからない。

ただ統治者である彼に呼ばれ、採寸をした仕立て屋のプロでさえ手袋を外さずに肌に触れ、たらふく水……果汁を吐きそうな程飲んで青白く弱りきつた溺れた人に伸ばし抱えた腕さえ振り払われれば流石に理解出来る。

ゾーラだからではなくヒトでないオレに触れるのは、好ましいどころか嫌悪に等しいのだろう。それは無知から来る恐怖か、はたまた間違った知識か、差別下の意識での区

別か。

いずれにせよ望まれず、蔑まれるが当たり前前のそれを……カタクリは。

「ふう、やつと追い付いたゾ……今のオレはちよつぴりへトへトなのだから走らせないで欲しいゾ」

「たかだかあの程度でか」

「効率的とはいえ、川下で待ち構えて美味しいところを取っていったヤツに言われたくないゾ」

「やつと追い付いたカタクリの横を歩く。歩くと言うか小走りで走り続けないと歩幅が本場に合わないのだから仕方ないが。」

「それでも会話を投げ掛け、返してくれるだけで御の字だ。街並みから外れ、人並みはいつの間にか無くなっていた。」

「……本場に助かったゾ、ありがとう」

「フン……おれの統治する島だ、助けるのが当然だろう。関係ないお前が飛び出した方が妙だ」

「感情のまま動いただけだゾ、理由など必要ないしオレは君のように頭を使い動けない」

「なんの話だ、おれは一応、見、て確認をして動いただけだが」
「だが」

走り出し、彼の前に飛び出す。足を止めたカタクリを真つ直ぐに見上げ目を合わせる。

「オレを助けてくれたろう？物理的にも、心証的にも」

ザアザアと降り続く雨が……飴がオレとカタクリの間の沈黙をかき消した。眉を潜め細めた目がオレの心を乱さんとばかりに睨み付けてきている。

だが、それが何だというのだろう。そんな顔より威圧感のある沈黙よりもっと大きな証明を先程彼はオレと島民に見せ付けるようにばら蒔いた。

初対面時に差し出した手は手袋越しに弾かれたのに。初めて、素手で触れられた。それも、わざと、大勢のヒトに見せるように。

まるで……何もないと証明するように。

彼はオレ自身に対して何も思っていない。憎悪も嫌悪も好奇も値踏みも、ただ海賊団にとつて必要だから結婚し、必要だからその相手の情報をいれた。今回のこの行動でさえそれに基づいて動いたといえればそれまで。

変形させて雨や果汁に濡れていたその手は想像よりも冷たく、想定よりも温かかったが、それ故に彼が何を考えているのかはわからない。だが。

「君という統治者が……キミが、素晴らしいニンゲンだという事が、改めてわかったゾ」

「……何の話だかさっぱりだ」

カタクリはゆつくりと目を閉じ、そして開いた後低い声で言葉を つむいでオレの横を通り抜け再び歩きだした。

勿論否定されてしまえばオレは何も言えない、ただのオレの勘違いや勝手な想像の上の思い込みなのかもしれない。

それでもその柔らかい優しさの可能性は、考えただけで鱗がカサつき疲れきった体の重みが和らぐ気がして、オレの中でその思想は捨てるに値しなかった。

真実でなくて良い、証明などしなくて良い。

この非日常の中の日常になりうる日々が少しでも幸せに思えるのなら、それで良い。誰にも何にも迷惑にならないただのオレの思い込みで。

「君が優しいヤツだという話だゾ！だからこそお願いだ、泳ぎに行かせてくれないか

！」

「却下だ。風呂で泳いでろ」

「ゾツ、あそこは泳げるほど広くないのだゾ」

浴槽の中で丸く小さくなり眠るのが精一杯だ。あんな場所で泳ぐなんて到底出来ないだろう。

しかし元々弱くなってきた体で……想定外の大きさと中のニンゲンに負担をかけないように作り出した、それも果汁で作った特殊な水柱を何本も操ったそれでオレはもうヘトヘトだ。

今の体では何も出来ない、ゆっくり果汁ではない水に浸かり休まねば水柱や水魚どころか、指先で僅かな水泡を作るのにも苦勞しそうだ。

だからカタクリの言う通りは出来ないが、今から屋敷に戻ったそばから浴槽に水を溜め沈んでしまおう。昼御飯を抜きに、数時間ばかり中にこもれば少しは回復するだろうから。

だから。あんな出来事があつた夜に、彼がとある行動をオレを巻き込み起こすとは思ってもよらなかった。

水

ちゃぼん。

身動きすると浴槽の中に溜めた水が跳ね、静かな浴室内に音が響いた。頭まで潜っていたそれを止めて水面に顔を出して立ち上がり、淵を跨いで浴槽と浴室を後にする。

脱衣場に用意されているタオル等の生地をオレは一度も使った事はない、ゾーラの肌の吸水力は拭いとるよりも早い事だし今のオレは乾ききつているも同然なのだから。まあその摂取する水の品質は……嘆いても仕方のない事をいつまでも言うつもりはない。

置いていた服を身に付け、石を加工した飾りを身に付け、人前に出られる姿となったのを鏡で確認して脱衣場を後にする。

なぜ昼食も軽食も口にせず水に浸かる事を優先したオレがこうして出てきたか、それはオレにあてがわれた部屋の外からホーミーズがひたすら呼んでいたから他無い。

昼食らを断ったようにその呼び掛けも断ろうとしたが出来なかった、あまりに必死の

呼び掛けに善意の食事の件ではなくホーミーズも命令されて来たど気付いたから。

廊下を歩きながら、きつとホーミーズはゾーラが水場で眠る事は知らないのだろうと考える。入浴中失礼、と言われたのだから。

里でのゾーラの詳しい事情を知る機会は無賊団の誰も無かつただろうし、船で運ばれている時もペロスペローはオレに干渉せずオレもワザワザ伝えなかつた。

唯一知っていそうなのは……調べてくれていたという、カタクリだろうか。それでもお風呂場で水浴びと言っていた事だしどうなのだろうか。確認する必要は……うむ、無いな。気にしない事にしよう。

「失礼するゾー……つと」

ホーミーズに案内されたのは普段一人で食事をする場となつている大きな食堂の前だつた。一瞬用事とは嘘で食事を抜いたオレの体を心配して夕飯に連れ出したのかと考えたが、夕飯にしては時間は早くすぐにその思考を振り払つた。

扉を開き、この場所では一度も姿を見た事がないが呼び出したからには中にいるだろうカタクリを見付けようと目線を動かし、複数の別人を見付ける。一人、二人、三人いる。

見覚えがあるような無いような……服装から判断して、食事やカタクリのメリエンダ

とやらを用意している料理人達だとは思うが。

「来たかゾーラ族」

「ゾ？ カタクリ」

料理人達となんとも気まずい見つめあいをしていれば背後の扉が開きベストタイミングとばかりにカタクリが入ってくる。

あまりにピタリすぎてどこかで見られていて狙ったかのようだ。恐らくそんな無意味な事はしないだろうから違うだろうが。

「来たのは来たが、申し訳ない。なぜ呼ばれたのかわからずに来たのだゾ」

「自分が言った事に責任と証明をしてもらおうと思つて呼んだだけだ」

「?? 何の話だゾ？」

「水の民、なのだろう？」

カタクリはそのまま中へ歩き出し、オレは後を追つた。料理人数名が困惑した顔のままオレとカタクリを見ている。

そして机の上には複数の器が置かれており、その中には……ゾ??

「これで全部か？」

「はい、カタクリ様！一応各島で食材に使っているものを全てお持ちしました！」

淡々と声をかける彼に、小さな彼らがピシリとした敬礼をカタクリに向ける。その言

葉で覗き込んで中身を見ていたオレの疑問が確信に変わる。

「……これは、水、か」

器に入っていた透明な液体、見慣れたもので生涯見続ける事になるだろう存在。水。その複数の器に分けられたそれを確認の為に料理人を見下げればオレと目が合うのを避けるように視線を反らされる。まあ、その反応は当然だと今日理解した。ならばまだ反応を返してくれるカタクリなら。

視線を上げればバツチリと目が合い、なにか言う前に理解した彼は答えてくれた。

「それらは今この万国で使用されてる水だ。お前は言ったな、この水に純度も栄養素も足りない。だから……言った責任を持って判断しろ、どれの水が最低限のラインを越えて相応しいか」

「ゾツ……。……いい、良いのか、オレの判断で」

「フン」

当然のように言い放ったカタクリの顔を見上げ訊ねれば、返事の代わりに息を吐かれる。それは意地悪や悪意を持つてのものじゃない。

例え、もしも。そもそもそんなつもりだとしても、ここまでお膳立てする必要もない。

オレ自身を適当に辱しめる方法ならばいくらでもあるのだから。

「……じゃ、じゃあ……させて、貰うゾ」

用意されている器を上から覗き込む。どれもこれも透明度はあり、器の底を綺麗に映している普通の水に見える。目線では、そう見える。

「触つても大丈夫か？」

「構わないだろう。なア？」

「は、はい！勿論ですカタクリ様！」

確認してくれたそれを確認し、躊躇なく指先を器に突つ込む。後ろで僅かに息を飲む音が聞こえるが構わず進める。次々に器に指先を入れ、そのまま全ての器に指先を入れる。

そして全て入れた事を確認した後、手のひらに力を込めて上に向け腕を振り上げる。

ふわり、と全ての器の中身に空中に浮かび上がる。戸惑いと小さな悲鳴が聞こえるが気を取られている場合ではない。

「どうだ」

「ん……まあそんなに言うほど悪くはないゾ。例えばこれ」

ふわりと、一つの水が前に飛び出す。器の前に何か文字が書かれた紙が置かれているがオレにはその文字は読めない。大方どの島で使っているか、どの材料に使っているか書かれているのだろう。

「透明度も高く、栄養素も悪くない。さらりとしている感触はまさにみずみずしく良い水だと思うゾ」

「これはどこの水だ？」

「あ……は、はい。ナッツ島の分になります！」

「そうか。水の流通経路だが……」

彼らが話し合うそれを器に戻し、他の持ち上げた水を眺める。ふわふわと漂う水を時折近付け香りを嗅ぐ。

触れる事を嫌がられていたからやっていいのかわからないが、指先を伸ばしてその水に溶け込むように触れ合い、更に深くまで確かめるように舌を伸ばす。戸惑う声が出た。

水それら独自の特徴を感じる。柔らかかったり、硬かったり、甘かったり、くらりとするほど不味かったり。

ああ、舌先から乾ききった体に染み入ってくる不可解な感覚がする。ヒレの先まで震える。

「……どうなんだ、ゾーラ族」

ゆつくりと吟味をしていれば後ろで彼、カタクリが料理人達との会話を終えオレの背

に声をかけてくる。振り返り見上げれば細めた睨み付けるようなカタクリの目と目が合う。

オレは今の自分に出来る限りの満面の笑みと共に拳を胸元に掴み上げる。

……人質のようなオレをどのような理由があろうとも自由にして、役割を与えてくれた彼に思うがままの言葉を返さねばならない。オレの思う全てを。

「うむ。こちらの水は硬く僅かに苦味があるゾ、スイーツ作りにはあまり向いていないが煮込み料理や味の濃いタレには向いているゾ」

目の前にその水を持ってきてぐるりと回し、元の器に戻す。料理人が器の前に書かれた紙の文字を読む。

「こちらの水は口元でとろけるように軟らかくそのまま口にするのに向いてるゾ。料理なら味を染み込ませる出汁や、お菓子の素材をフワフワにするには向いていると思うゾ」

器にポチャンと戻せば料理人の一人が恐らく島の名前を呼んでいる。隣の料理人と何かを納得しているかのように話し合いを始めている。

「こちらの水は甘ったるいが、口の中を激しく刺激してくるゾ。そして香りはすぐ切れやすいほどトゲトゲして……」

思うがまま、感じたままのそのままの感情で水の評価を続けていく。オレが言葉を続ける度に呆気に取り残られていた料理人達が何かを思ったように身に付けていた衣類から紙を取り出し何かを書き込んでいる。それを見た所でオレは何も読めない。

そうしていくつもあつたそれらの全ての評価を終え、浮かせていた水全てを器へと戻した。料理人達はそれぞれ何かを話し合っていて……今オレが何かを言った所で受け入れてくれるだろうか。まあオレが話しかけられる相手は一人しかいないのだが。

「どうだゾ、カタクリ？ オレが感じたままに伝えたのだが。言葉での説明だと実感出来ず解らないかもしれないのだが」

「まあ、それはそうだな」

「ゾー……難しいゾ……あつ！ もし水が他にあるならお茶にして振る舞うゾ!? どうだ?」

「……………」

オレの提案をカタクリに告げれば彼が目線だけで合図し、料理人達は先程までとは全く違う早さで動いてくれた。

バタバタと素早く用意してくれた複数のティーセットに一つの種類のお茶とそれだけの水をそれぞれのやり方で温め注ぐ。オレが最適だと思った温度とタイミングでお茶を作り、最高だと判断した瞬間に飲んでもらうように告げる。

料理人達は言われるがままに口にして思い思いの言葉を告げてくれた。

驚愕の言葉。絶句の表情。誉める言葉。唯一……カタクリだけが、口にしなかった。ティーカップに手を伸ばす事さえしなかった。

……そういえば共に食事をしていないからもあるが、初対面時の時のホームミーズのお菓子を振る舞われた機会の時でさえオレは見えていない。カタクリが何かを口にする姿を。

「……これは素晴らしいです……どうやってこのような味を……」

「んっ、そうだろう?! こちらの水だと穏やかに七十から八十のぬるい温度で淹れた方が喉元爽やかになると思うのだゾ! こちらのは熱い温度の九十五度くらいだと全体に広がる香りと口にいられた途端に喉奥に広がる甘味が……」

料理人の一人に訊ねられた瞬間思うがままに、感じるがままにオレは茶を注ぎ振る舞ったその事細かを語った。

なぜ、どうして解ったのか、そう訊ねられても答えられない。水のそれらに触れ味わったその言い様の無い感覚のままに行っただけなのだから。恐らく天候や気温、例えば数時間後ですらまた違う淹れ方をしなければ同じ味を出せないだろう。

一つ一つの水には悪いも良いもない。その水にとっての種類には向き不向きがあり、オレはただそれを教えただけ。

決して悪いものではない、ただオレには栄養的には物足りないが普通ならば問題はな
いだろう。だがそれでもその中で美味しさを追い求めるならば、オレは引き出せるだけ
の味わいと手段を教えれる限り教えれる。

「まさか、こんなに。本当に……本当に明らかに味が違う。いつもは、いつもは、もつ
と……」

「うむ！ 疑問に思うそれは何も悪い事ではないゾ！ ただ気温と温度と高さで空気
と感覚……それらの違いがあるのだから、それを見分ければきつと君たちでも出来るゾ
！」

オレが出来る全てを振る舞い、語ったオレに彼らは何も言わずにオレをただ瞬きする
よりも長い間見ていた。そしてヒレの湿りが乾きそうな時間が経ち、顔を見合わせてい
た料理人の一人が一言。

「……素晴らしい。言われた事、あつていると思います。これらのお茶全て今まで味
わった事のない美味しさでした」

そう、呟いた。何故か天井の部屋の隅、遠くを見ていたカタクリが料理人に対して二、
三点指示をして、呆気なくこの水評論会は解散した。

食堂から追い出されて部屋に戻ったオレは首を傾げていた。あれらが一体なんだつ

たのか、オレには多分わからない。カタクリが説明をしてくれなければ今後一切わからないだろう、訊ねたら教えてくれるだろうか。また聞いてないフリをされるだけな気がする。

時間が経ち、夕食。今度は食べようと招かれるままに席に付けば給仕をしてきたのはいつものホームミーズではなく先程の料理人の一人で、先程の時間で聞けなかつただろう疑問を聞かれ、オレは答えた。

一つの料理を食べていけばいつの間にか増えた複数の料理人に囲まれて根掘り葉掘り聞かれていた。今回ばかりは誰も近付けないよう一人で食事をしているカタクリを羨ましく思いながらも聞かれるがままに冷めていく料理を置いてきぼりに答えていった。

そして、なんだか疲れた食後。オレはつい数時間前にも来た部屋に呼ばれた。

カタクリが何らかの仕事をやる部屋、オレが窓を突き破り勝手に飛び出した部屋。一体何故、どうして。今度は何があるのだろうかと思いつつもオレは室内へと入った。

「一つ、確認でもしようと思つてな」

真つ先に目に入った、割つた筈の窓ガラスの飴は薄い板のようなお菓子で塞がれてい

た。外の景色は見えなくなり更にカーテンを閉められた室内には、もはや誰の目も入ってこないだろう。

置かれた椅子に腰掛けたオレを真っ直ぐ見ながらカタクリが告げてきた。その声色は楽しげにも、悲しげにも聞こえる不思議なものだった。

抑制されたような沸々と煮たつような不思議なその声色が……

「先程のように、アイステイーを入れて欲しい」

「……ゾ？」

暴行でも暴言でも、無茶苦茶な命令でもないそれを告げてきた。今更ではあるがこの部屋に呼ばれたという事は外に飛び出した事や、割った事実を糾弾されるのかと少し思っていたから。

オレは一瞬何が何だかわからずただ瞬きを繰り返していた。そんなオレに対して彼はいつもと同じように睨むような目で見てくるだけ。

「……アイステイー？」

首を傾け訊ねるも彼はなんの返事もしない。ただ目で早くやれとばかりに指示してくるだけ。その目線の先を見れば少し前に用意されたのと同じ道具が揃っていた。彼が用意したそれだ、悪意も毒物の可能性は考えられない。そもそも意味がない。

……否定する気も、拒絶する気もないオレは言われるがままに用意されていた一つの

水を器ごと持ち上げ眺め見て香りを嗅ぐ。ふむ、先程の多数あった水の中の一つだな。

その水の最適な時間と速度でくるりくるりと動かしながら淹れ、十分に味わい深くなっただろうと判断した瞬間にカップに注ぎカタクリに出す。

マフラーで隠された口元は、出されたそれを飲もうとしない。……むう、淹れたてを一人で飲みたいと思ったのかと思っただが違うのか？

ならば何故オレは呼ばれたのだろうか？誰かの前で飲食をするのが嫌でオレがいるから飲まないのなら出ていった方が良いのだろうか。

「……いくつか訊ねたい事がある。その椅子に腰掛け自分の分を飲みながらで良い、正誤を答えろ」

「?? ゾ……わかったゾ」

「まあ簡単な確認だ」

そんな事を考えていれば思考の間違いを正すように、ここにいなければならぬ理由を突き付けてくる。

言われるがまま足の長さがどうにも合わない椅子に腰掛けていれば、いつの間にかカタクリは手にティーカップを持っていた。どうやらオレが目を離れた隙に飲んだらしい。

「そうだな、まず……」

そして聞かれる無数の質問に対してオレは間違えないように答えていった。

しかし、そもそもその質問の殆んど根本的に間違っていた。ゾーラ族と確認されているのだろうが、まず有り得ない噂話ばかりで。

恐らく事件が起きる前に彼が読んでいた本に書かれていた内容だったのだろうがこれほどまでに適当に受け継がれていたとは思っていなかった。

「ゾーラ族は岩を食べる」

「いや食べないゾ？　主に魚を食べていたが、野菜も食べれるしここでも何でも食べているゾ」

「ゾーラ族は長命種族でその肉を喰らえば寿命が伸びる」

「ゾ……長命、かどうかはわからないが君よりは遥かに長く生きてるゾ。でもオレの肉を食べても変わらない……と、思うゾ」

「ゾーラ族は熱さと寒さに弱い」

「ああ、うん。それは合ってるゾ」

「ゾーラ族は空を飛ぶ」

「いや飛ばないゾ」

「ゾーラ族の住む森の中に入り込むとその場で骨に変えられ二度と出てこれない」

「カタクリは来てないから知らないだろうが、まずオレ達は森には住んでいないのだゾ」

「ゾーラ族の鱗を口にすれば水中で魚人のように動ける」

「そ、それは流石に有り得ないゾ……呼吸を伸ばす事は出来るかもしれないが、動けるようには出来ないゾ」

「……興味深い生態だ」

そうしてカタクリとの質疑応答は何十もの間続いていた、淹れたアイスティーがホットだったなら冷えてしまいそうな程の時間で。

……ああ、だからか。だからこれを見越してアイスティーにしろとカタクリは言ってきたのか。本に載っていただろう知識は殆んど間違っていたが、カタクリはそれに対しての愚痴も言わず気にしていないとの態度でただ淡々とオレとの間で正誤を確認していた。

正直に言えばそこまで疑問が溢れる程書物にゾーラという存在が乗っていた事が驚きだった。

……そういえば、なぜカタクリはゾーラ族に対しての知識をつけようとしたのだろ

う。ゾーラ族を支配下に置くための最低限の知識だとしても、それは彼の母親、女王のように力付くで押さえ付けなければいだけで必要ない筈だ。

……訊ねても正確に答えてくれないだろう、意地の悪い質問ではないとオレは考えているが彼はきつとそうする。そうこの数日間判断出来る程の時間を……オレ達は過ごしていた。

「何故こんな質問を？」

だが一応訊ねて見た。もしかしたら答えてくれるかもしれないと一縷の望みをかけて……しかし普通に返事はなく、無視される。ああ案の定だ。

何か手元の紙に書き込んでいた彼がオレをチラリと見て、再び手元の紙に目線移動す。話を続ける気はないとばかりに。

「わかった、じゃあ戻って貰って構わない」

「ん、終わりなのか。まあ……今日は色々あつて疲れただろうしな」

「……馬鹿な事を。この後やるべき事があるだけだ」

「ゾ？ 何かあるのか？」

だから今度は会話がスムーズに続いた事に少しだけ驚いた。まだ続けられそうなそれを首を傾げて訊ねて進める。睨まれているかのような鋭い目とひたすら見つめ合うが、

彼は折れたかのように息を吐き低い声で続けた。

「……今までお前の相手をする為に行えなかった、槍の訓練をする」

「槍！ 君は槍を使うのか!? 実はオレもそうなのだゾ！」

「……は？」

「槍の訓練……素晴らしいゾ！ その訓練オレも混ぜてくれないだろうか！」

「……………」

眉を潜めパチパチと音がしそうな程何度も瞬きをするカタクリ。ゾ、目を縁取る毛が長いな！何を言われているのか分からないような、何とも受け止められないような顔を浮かべる彼に対しオレは更に詰め寄る。

いきなりの提案に絶対に頷く筈が無いだろうがそれでも。椅子から立ち上がって詰め寄り、頷くまで何度も問い掛ける。

それは彼に訊ねられた中には無かった回答と情報。ゾーラ族は、槍を使い戦うという事実。

そして同じ槍使いとして彼の時間を奪ってしまったのなら、その埋め合わせをするのはやぶさかではない。オレとしてもここしばらくで鈍ってしまった体を鍛えたいのだから。

「オレが万一暴れた時に押さえる為の君は強いのだろう、だがオレもそう弱くはない

ゾ！女王には完敗したが！」

「……………」

「ゾ！ゾ！ どうだ、決して君の訓練の邪魔はしないと誓うゾ！ 共にする、が駄目ならば少し場所を貸して欲し ——

「おれは結婚など元々どうでも良かった」

—— ……ゾ？」

カタクリの低い声が、オレの言葉を途中で遮った。

彼の顔を見れば真っ直ぐにオレを見る血の色のように赤い目。

「どこの誰だろうが、男だろうが女だろうがどうでも良かった。それこそ、人間だろうが、そうじゃなからうが」

「?? 急に何の話だゾ？」

「そもそもこの結婚も、するかどうかも不明だった」

「……………は……………」

だから吐かれたその言葉の衝撃が上手く受け止められなかった。……………するか、どうかか不明だった？……………結婚が？オレ達ゾーラ族が互いを守る為に強く強く決意した、あれ

……ら全部、茶番だと言わんばかりに。

「魚人族に類似するも別種、幻にも似た存在のゾーラ族。それをコレクトするのは決定事項ではあったが、その姿のまま偶々条件に当てはまったおれの隣に席を置くか……ママのコレクションとして手元に置くか五分五分といった所だった」

「……何の、話だゾ。何故、そんな……」

「わかるだろう、何故かなど」

「……………」

息を吐き、腕を組み背もたれに凭れるカタクリ。机の上に置いたティーカップに視線をチラリと移し、僅かに右手の指先が動いた。手を伸ばそうとして中身が入ってない事を思い出したのか組んだままほどかなかったが。

「水を軸に有利に取れる種族特性を持つが、王子一人を人質同然に差し出すその少数民族の行動で我ら海賊団への武力向上になる見込みはほぼ無いのがわかる。お前らの持つ秘密の石碑の文字を読み解く知識だけを取り出し、姿形を保存するやり方も提案された。それこそ政略結婚をした後にでもな。だが一応このまま平穩に進める事が決定した、少なくとも……今は」

ギイツ、と彼が凭れた椅子が鳴った。

「おれ個人としてはここ数日で理解した、世間と関わりがなかった無知はあれどもお前自身は愚かとは言い難い。恐らく何らかの隠し立てをしているのを感じているが……まアそれは別にどうでも良い。決定された事項に従うまでだ」

「…………この前島のヒト、にオレの事を伝えていたゾ…………式の際の衣装の用意や…………家族、や招待客にも連絡をしていた、のに…………約束を反故する、つもりだったのか…………？」

「海賊に何を求めている。馬鹿正直に全てを守るとでも思っていたのか？」

「……………」

「本を調べていたそれに然程深い意味はない、暇潰しがてらだ。事実大分違っていたしな」

そう言い、彼は机に手をつき立ち上がった。オレより高いその背丈を見上げればオレの視線に気付いた彼が鼻で笑い目を細めた。布地で隠された口元が見えていればきつと物凄く笑っている顔が見えただろう。

カタクリの目はオレ自身、というより取り巻く全てを嘲笑うかのように細められていた。

「…………なぜ質問浸けにしたか聞いてきたな、ゾーラ族」

「……………」

「先程見た魚人族とはまた違う、自称する程の不可思議な水を操る力を持つ民。宙から産み出し、果汁すらも操る水の民としての能力と事実。そして……そんなお前に興味が湧いた」

「……ゾ!?!」

暇潰しのどうでも良かったという知識を正しくせんとするくらいは、そう言葉はなくとも告げてきた。反射的に飛び上がりそうな程の衝撃が駆け抜ける。

……えつ、今オレ滅茶苦茶褒められたんじゃないのか。

部屋を出ようとする彼の背を啞然と動かない体で目線だけで見送ろうとして不機嫌に潜められた目と合う、部屋の持ち主がいなく場所にぼうつと立っているのだと。慌てて先に扉をくぐれば後ろから嘔み締めたような声が聞こえ反射的に振り替える。

部屋の明かりを反射する赤い目が、オレを見下ろしている。

「槍使いだというのなら、ママに突き立てたという水を使った技術とその手腕。見せてもらおうじゃねエか」

鍛練

カタクリの筋肉で盛り上がっている大きな背中を見つめながら後をついていく。大股で進む彼を必死で走って追いかけて……そして鍛練する為の下準備の場所へと辿り着いた。

彼が扉の鍵を開き、通されたその部屋の中を見てつい驚きの声をあげてしまう。沢山の柵や壁を飾り立てる圧倒的な武器の数を確認したのだから。

剣や銃は当然に、見た事もない何に使うかもわからない武器が所狭しと並んでいる。鎖で繋がれた斧と鉄球なんてどう使うのだろう。

そしてその一角に望みの槍コーナーがあった。ゾーラ族が使う武器であり、カタクリが使う武器でもある槍。小さな物からカタクリの背丈よりも大きな槍もある。

「おお……こんなに沢山様々な大きさの槍があるとは驚きだゾ！ 全て使っているのか？」

「いや」

「ゾツ……ならば何故……？」

「まあ貢がれたりしての色々だ。おれが使うのは決まっている、それよりお前は決めたのか」

「勿論！ この二本にするゾ！ なんと美しい、切れ味鋭そうな槍なのだろうか」

「……二刀流って訳か。フン、相手にしてやるせいぜいおれに感謝しろ」

「当然だゾ、ありがとう！ 君は最高だゾ！ 出会った当初から君は優しかったから常に感謝はしているゾ！」

「……………」

オレの思うがままの、裏も表も何もない感情そのままをぶつけた言葉にカタクリは顔をひどくしかめた。それはまるでオレの言葉を端から嘘と決め付けおぞましいものを見るような……

ゾ、オレは本心で言ったのだが……カタクリはなんとも気難しい性格ではあるな。どうも言われたそのまま受け取るような事はしないようだ。だが疑り深いそれは決して悪いものではない。

言い換えればそれは今までの人生の裏返しだ。海賊の人生など想像するしかないが、里で王族として過ごしてきたオレと全く違う事だけはわかる。

突然現れたオレのような他人の言葉をそう簡単に受け入れてはいけなかった厳しい人生を送ってきたのかもしれない。

仕方ない。誰だつてそう簡単に今までの人生や信念や考えを変えられないし、そんな事実はないがオレが何かを企む極悪人であるかもしれないのだから疑う事は間違いない。

オレはカタクリではないし、産まれも育ちも違うオレ達の考え方が全て一緒だなんて有り得ないのだから。

そもそも無理に変える必要はない。ゆっくりでも受け入れなくても、自分の中で納得が出来る結論が出せているのなら。感謝も許容も変更もしなくて良い。

だけでも。うーん、カタクリとオレは結婚、するのだろうか？少なくとも今はそうらしいから。なら少しでも仲良くしたいじゃないか。

オレの……ゾーラの長い人生、少しばかり手助けをするくらいなら、オレで良ければいくらかでも手を貸してあげたい。見返りを求めるものじゃない、オレがしたいだけだ。

「さあ！ 鈍った体を叩き起こすくらいに鍛練をやるゾー！」

「……フン」

腕を振り回しながら精神にも肉体にも気合いをいれる、そのせいか出した声は想像よりも大きくなってしまった。

そんなオレの言葉にカタクリは返事を返さず受け入れも拒絶も何もせず、ただ軽く息を吐いた。

*

カタクリの屋敷の中でも開けた場所にオレ達はいた。部屋にしては何もなく、屋敷の中にしては壁は無く柱のみで繋がれた通り抜けそうに高い屋根がある。

風がかなりの頻度で通り抜ける室内にしては開けた部屋の中でオレらは向かい合っていた。互いに槍を手に持つて。

「手加減はしてやる。好きなように掛かって来い」

カタクリは自前の自身の背よりも長い槍を手に持ちオレを指先だけでクイクイと呼ぶ。そうだな、一先ずオレと彼の力量を確かめねばならないだろう。

一人でオレを止められると判断されたカタクリは強いのだろうか……オレだって舐められる程ではないと力を見せつけねば。

「では行くゾー！」

地を蹴り、槍を構えながら真っ直ぐに突進し突きを放つ。先制として左槍を振りかざすもあつさり最低限の動きで避けられる。だがオレにはもう一本ある！

勢いそのまま体を回転させ右槍で狙いの頭部、脳天を狙う！　しかし槍の先端がカタクリに触れる前に素早く振り上げられた槍によって弾かれてしまう。やはり素早い。

「ゾッ!!」

空中で回転し、続けての両槍での連撃も彼の一本の槍に難無く防がれてしまう。

「まだだゾー！」

着地と同時に足払いへと移行する。本来は足で行う行動だろうがゾーラ特有の短い足ではするのは難しく、それを槍でやる訓練はしているのだから。

カタクリの長い足を膝裏側面から叩くよう掬い上げようとして……手応えもなくすり抜けた。不可解なそれに心を乱さないよう慌てずに手で支えながらしゃがんでいた体勢を後方へと翻しながら建て直しカタクリと向かい合う。

彼は何事もなかったようにオレを横目で見ながら、当初から一步も動かない場所で仁王立ちをしている。

……今のは何だ？　妙な感覚だった。

……分からない、分からないならば、分かるまでやるのみ！　カタクリの鉄壁のような防御を崩そうと躍起にならないように角度を変え、素早く動き何度も突く。

だがカタクリはそれを全て見事に受け流してしまふ。流石だゾー！

それでも二槍で一瞬の隙間も作らないよう攻め立てれば一歩も動かなかつたカタクリが足を数歩動かした。踏み込み場所を変えるように、後ろへ一歩、二歩。そして。

「ッ!？」

オレが突いていた槍先、両槍がいつの間にか右手で一纏めに掴まれていた。慌てて体を捻るが間に合わず、左手に持ちかえられていた槍の柄で横腹を強打されあまりの勢いに飛ばされる。

柱に叩きつけられ、肺から空気が絞り出され視界に星が飛ぶ。背中よりも痛む脇腹を押さえながら素早く翻りカタクリを見据えると彼は追い討ちをかけるような事はせず悠々とした態度のまま、彼に持たれ飛ばされた際に手を離れた二本の槍をオレの近くへと投げ捨ててきた。

「終わりか?」

「まだ、だゾ。そもそも一度食らっただけなのだからオレはまだやれるゾ!」
投げられた槍を拾い、強く握り締め構え直す。

ああ、分かってはいたがオレはこんなにも弱っていたのか。手に力が全く入っていないじゃないか、なんて情けないのだろうか。だが言い訳なんて見苦しい、する時間があれば衰えた体を鍛え直すべきだ。

槍の使い道はセゴンとの厳しい鍛錬の中で学んだ。槍は本来刺すものだ。漁に、戦いに、訓練に。それをオレは知っている……だが同時にお手本通りの槍の使い方に囚われ過ぎてはいけない。

槍とは矛であり、盾にもなる武器なのだから。槍を使う彼だつてそれを理解しているだろう。槍は穂先や柄だけに注意をするものではないのだと。

「……」

カタクリが目を細め眉を寄せた。オレを纏う雰囲気や振る舞いが変わつたのを理解したとばかりに目元を微かに湾曲に歪めた。

それが少しだけ楽しそうに見えたのはオレの考えすぎで気のせいだろうか。口数少ない彼は言葉にせず、再度オレを呼び寄せるように指先でオレを呼ぶ。

「……かかつてこい」

「当然。……だが、すまない。訊ね確認するのを忘れていた」

「？」

「ゾーラ族であるオレは普段水を使った鍛錬をしている、それを使って良いのかどうかを。そして君も体をあの粘つく白い体に変えて鍛錬をしているのかを。しているのならその力の牙をオレへと向けて欲しいのだゾー！」

「……フン」

床をカタクリの身長よりも長い槍の石突で叩き、彼は笑った。先程上手く掴めないまま突き抜けていった笑みのようなものよりも遥かに深くおぞましさを含めた……ヒトを食ったような笑い方で。

「……元々ゾーラ族特有の力を確認する、そのつもりだと言ったろう。好きにしろ。だがおれの能力を攻撃に使わなくともお前はやられているようだが」

「今まではそうだったかもしれないが次からは、そうさせないゾー！」

足に力を込められる限り入れて地面を踏みしめ、そして足裏に生み出した水を動かす事で一気に加速しカタクリに向かって走り出す。

右手に持つ槍先をカタクリの胸元に突き立てるも呆気なく、カタクリは自身の槍の先端の刃を使い受け流し弾くようにオレの攻撃を捌く。だがそれは想定内だ。

槍の先は鋭いが、それでも逆にいえば所詮は先端のみ。つまり槍の根本には刃はない。良く言うだろう、雨降るゾーラのヒレとウロコの使いどころ、と！

だからその部分を狙って打ち込む！

カタクリが槍を振るうタイミングに合わせ、弾かれた片手の槍で彼の槍を押さえ込んで懐に入り込み手のひらを水で滑らせ槍を回転させて槍を持つ手を目掛けて突きを放つ。

「……………」

流石にこれは予想外だったのか、カタクリの目が見開かれるのが見えたがもう遅い。槍の先端がカタクリの手に当たり、そのまま貫通する……ように思えた。その手が白い何かに変形し輪っかを作りその中を槍が通り抜けなければ。

「……………」

いつか見た、つい先程にも見たその一見奇妙な光景を視界に納めた瞬間……吐いた泡が割れて弾かれるように慌てて飛び退きカタクリから距離を取れば、カタクリは腕を伸ばしたままじっとオレの事を見ていた、その腕は白く変化している。

カタクリはちらりと自身の腕を見たあと胸元に戻し、腕組みをして動かさないように固定する。腕を組む今の彼の手はどう見ても普通の何でもないニンゲンそのもの。

不思議、だ。体を変えられるのは日中に見たから知っている。だが先程彼は……気のせいであったか？その奇妙なそれを使わないと言っていないかったか？

「……今奇妙な力を使って避けたな？」

「そうだな。思っていたよりお前の速さに少し驚き思わず能力を使って避けた、間違いない」

「ゾッ……一応言っておくゾ……確認前に、足元、それを使って避けなかったか……？」
「避けた。それがどうした、攻撃に使わなくとも……とは言ったが避けないとも使っ

てないとも言っていない」

「そんなの詭弁だゾ……」

「そう不服そうな顔をするな。今受けたお前の槍や水を使うやり方は……中々悪くない。認めてやる」

「ゾツ!?!」

海賊相手にどうのこうの言うのも無駄とは分かっているが……なのに紡ごうとしていた言葉を吹き飛ばす返し言葉に息が詰まり、オレは酸素の足りない魚のように口をパクパクさせるしかなかった。

まさかこの男からそんな言葉を聞けるとは思いもしなかったのだから。オレを、オレを真っ直ぐに褒めるようなそれを。

だって、いくら他の人のように人種の違いを批判も区別もしない達観しているような彼だとはいえ。同じニンゲンとはいえ一括りに纏めれない彼だとはいえ。

それでもまるでこの世の全てに警戒心を向けて形を作っているように思えたカタクりに……真っ直ぐに褒められる時がくるなんて。

何だ？鍛練をすると話した先程から何でこんなやり取りをするようになっていたの。それほどもでゾーラ族特有の力は彼ら海賊にとって珍しいもののだろうか。

力を集中出来なくて留めれなくなり手のひらを覆っていた水がボタボタと床に落ちていく。

その光景を見ていた彼が鼻で笑い、布地で覆われた顎を上向きに上げながら見下す声色で指示を出してくる。

「だがまあ、まだまだだな。もっと水を使った面白エ戦いをやってこい」

「!？」

言うが早くカタクリの体はその一瞬で消え去った。何となく感じる目に見えない程の速度で部屋のあちこちを動き回っている彼に、オレはただ翻弄されていた。

それでも何とか追っていた存在を一瞬見失った隙に飛んでくる攻撃。それは槍ではなく彼の手袋に覆われた拳。

頭を首筋から切り離さんとばかりに叩き込んできた拳をギリギリに、顔面を掠めたそれを避けカウンターを狙い手首まで水を生み出して打ち出し追えども届かず、別方向からあからさまにブラフでしかない槍が飛んでくる。

分かっているも放っておけば突き刺さるそれを防がない訳にかず左槍でそれを止めれば、右側面にカタクリの長い足から繰り出された蹴りが右全面脇を破壊せんとばかりに叩き付けられた。内部を破壊しそうな強さのその衝撃で胃液が逆流し、閉じた牙の隙間から飛び出してくる。

だが。

「ッ!？」

痛み衝撃それを堪え、構えた腕をそのまま右腕を伸ばし槍で突く。蹴りに撃たれた衝撃そのままの腕の力の弱さでは当然ように避けられはする。槍を振り回すが当たらない。

だが……オレのそれこそがブラフだ。

「ぐっ!」

カタクリの斜め背後、オレの全ての力を込めるつもりで生み出した細長い水柱が彼の。カタクリの顔面や防いだ腕、防げなかった脇腹などに無数の止めどない弾丸のように降り注ぐ。

水の力を彼は決して侮ってはいなかったろう。だからこそオレとの鍛練を受け入れてくれている。

だがオレが生み出した水柱が、ヒトビトを助けた水柱が。肌を刃物のように裂き抉り取らんばかりの衝撃を浴びせれると、きつとそこまで考えていなかっただろう。

「ん、の!」

「ゾツツ！」

ゾーラ族特有のオレの反撃に対しての反応にカタクリは顔をしかめさせ、いつの間にか増えた腕が語気と感情のままに目の前に迫っていた。防御をすれども顔面ごと殴り付けられたオレの体は宙を舞う。

高い天井には当たらず、それでも柱と天井を繋ぐ壁に叩きつけられんばかりに飛んでいた。冗談、だろう。オレの体ゾーラ族の中でも大きい、方だというのに軽々と飛ばされている。

それでも叩きつけられる寸前衝撃を受け止めようと背に水を生み出そうとして……あつ。

「がッ!?!」

そのままクツションも何もなく背中を受けた衝撃に脳が揺れ、全て吐き出された息が意識を止め、割れた石板のように何も出来なくなる。

殴られた事で口の中が鉄臭い。血反吐を吐きそうだ。受け身も取れず床に落ちたあとと激しく息を吐き出すも水のようなポタポタと微かに透明な液体を落とすのみで……これはなんとか、セーフだろうか……

カタクリは無慈悲に追撃してくる事なくその場に立ち床に転がるこちらを見下ろし

ていた。多少回復したオレがなんとか起き上がればカタクリが舌打ちをしながら大股で近付いてくる。

「おい、一撃当てたとはいえその程度か。日中散々繰り出した移動する水や水柱をやつてこい。水泡すら出さずに何やられてやがる」

「ああ……そう、か。すまない……あれはもう、さっきの攻撃で打ち止めのようだゾ」だから今防御しようとして出せず、無残に叩き付けられてしまった。咳き込みながらオレの言った言葉に彼は足を止める。見上げれば困惑したように潜められた眉と長い毛に縁取られた目と合う。

「……一日に出せる数が決まっているのか」

「違う、ゾ。アレは、アレを生み出すのは体力消費が激しくて……だからこそ、もう今日は出せないのだゾ」

カタクリの低い声で呟かれた言葉にオレは軽く首を振り否定した。

「ヒトヒトを助けるために今出せる全ての力を使いきってしまった。君に呼ばれるまで休みはしたがまた同じ様に水を友と呼び出すには、ゆっくり休むか……ああ、そう。日中も言ったが満足するまで泳ぐ等して回復するしか方法はないのだゾ」

少なくともラネール島に住み、満足いくまで泳ぎ体を休め適正に鍛え上げていた時と今とでは全く違う。

清らかで美しく栄養価のある水に囲まれていたあの時とは比べ物にならない程……オレは弱っている。適度に湿ってなめらかだったヒレは干からび縮み上がり、ウロコはガサガサにひび割れ少し触れただけでも剥がれ落ち、普段ウロコに隠され覆われたその下の皮膚ですら硬く醜く割れている。

ああ……なんて事だろうか。こんな弱った醜い体……人質になるには相応しすぎるではないか。

カタクリがオレの言葉を聞き呆れたようにため息をついた。それに対して申し訳なく思いはするが同時に当然だとも思う。

カタクリの力になりたいと願っている訳でも無いし、なれると思っている訳でもない。どれだけいくら鍛え上げて頑張ろうとも……ラネール島を、ゾーラの里を離れてから……オレの体は弱るばかりだ。

「あ、でも大きなのは出せなくとも水そのものはまだ出せれるゾ！だからまだやるゾ！」

「……チツ……！」

カタクリの槍が風を切り裂く早さで突き出される。オレはそれを体を捻って避け、す

ぐさま手から水を指先から飛ばした攻撃を繰り返すものの、カタクリは難無く最低限の動きで避け槍の切っ先をオレに向ける。

彼ならばそのまま突き刺せただろうに……なのに鋭い刃先ですらない側面による思い切り振り回された一撃を喰らう。胸元に叩き付けられたオレの体には切り裂かれ取り返しのつかないような傷は一つもつけられずに、ジクジクとした鈍い痛みだけが鋭く走る。

この男はオレを殺す気などない。これはあくまでもただの訓練で鍛練なのだから。

「行く、ゾッ……！」

オレは雄叫び混じりの声を上げつつカタクリに向かつて数発の水を生み出し飛ばす。槍で弾いても水にぶつかってそれらは纏わり付いてしまう為にそれらを無駄だと理解しているようで、彼は体をドロリと変形させて避けた。

なんて不思議な体なのだろう。だが構わない、オレの手には槍が二本ある。

手に持っていた槍を、絶対に避けられ無い角度と速度で勢いをつけて投げつけるも槍を持つていない空いている手で掴まれ止められる。

だがその隙を逃しはしない。武器を放棄するオレの行動に気を取られて、手に持つ槍を角度や早さや心境の変化で使えないと判断出来た一瞬を逃さないように……投げ捨

てたもう一本の手と反対に持つていた槍先をカタクリへと伸ばす。

普通ならばその槍先はカタクリの喉元へと突き立てられ、彼の口から降参の言葉を呼び起こしていたろう。

……普通では有り得ない、首筋と肩の間の場所から現れたもう一本の腕によつてあつさり止められてしまわなければ。

「……何だゾそれッ!？」

相変わらず理解の範疇を越えた存在に驚愕する間も無く、今度は背中側から生えた二本の手に首筋と肩を掴まれそのまま床に叩き付けられるかのように投げ捨てられる。

その光景に唾然とする間もなく、すぐにカタクリの長い足から繰り出される膝蹴りがオレの腹目掛けて叩き込まれる。

衝撃のままに吹っ飛ばされながらも何とか中指と薬指の先に水を生み出しカタクリに向けて放つても元いた筈の場所に既にその姿は無かった。床や柱に触れる音からして物凄い速さで移動をし続けている。

そんな中時折攻撃をされる際に反射にも似たカウンターの要領で水をカタクリに当ててはするが、簡単に弾かれる。

あんな啖呵を切りはしたが、案の定水柱を生み出せないオレではカタクリには録に敵いそうにない。オレはオレを押さえ付ける為に寄越されたカタクリには勝てず、そんな彼に勝てないという事はその上の立場である女王に勝てないという事だ。

……女王は元氣いっぱいだったオレの一撃を受けた所で何事もなかったかのように振る舞って……凄いい親子だ。

何より、見えない程の速さで動く彼に当てるように打ち出していた水滴ですら目に見えて……水を生み出す力が底をつくのを自分自身で実感していた。

水に浸かり少し回復したとはいえ……流石に、限界だ。

槍を突き合い、水を生み出してはカタクリに散らされ、彼の能力で産み出された白い柔らかで粘つくのを何度も水で弾き……

「すまない！もう限界だゾ!!」

彼の持つ三叉槍の切っ先がオレの右腕の間接近くに線を残す程切り裂いたそれを合図に、オレは降伏宣言をした。

槍先の進路を水の流れて歪めようと伸ばした手のひらにはもう何も集まらず、ただの遅れた無理矢理の回避だけでは間に合わなかった。

ポタポタと血を流す怪我をしたのが理由じゃない。これ以上やり続けてもジリ貧で

オレがただいたぶられるだけで、彼が望むゾーラ特有の力を交えた鍛練を出来ないからだ。

ただの何でもない二刀流相手のものなら出来るが、ただでさえ実力は彼のが上で更に弱りきったオレなど鍛練どころか足手まといの邪魔者でしかない。

ポタポタと垂れる血液を手で受け止めれば、軽く擦れただけで剥がれ落ちたウロコが地面へとヒラヒラ舞いながら落ちていった。

不快にならないようにそれを集めていれば遙か頭上から小さく息を吐く音がした。

「……………必要な休息時間は」

手の中で長い槍を回転させ、ガチャリと石突で床との音を鳴らしながらカタクリは訊ねてきた。

どうやらまた改めて鍛練をやってくれるらしい。こちらの都合で勝手に終わらせてしまったというのに……………海賊相手にこんな事を思うのは本当にどうかと思うが、彼は優しいと思う。少なくとも、敵ではないにしろ人質であるオレ相手にする態度としては。

「ゾ、少なくとも一晩ゆつくり休めば何とか……………つて所だゾ。勿論それだけでは全回復するという訳でもないが」

「……………」

「あ、だが明日この時間再びこうして鍛練をするのならオレはまたやりたいゾ！いくら体が弱体化していたとしても訓練するのに悪い事は一つも…」

「いや、結構だ」

「……………」

だから、そう低い声色でバツサリと切り捨てられた時は……一瞬声も行動も時が止まったように固まってしまった。

カタクリは手の中の槍を遊ばせるように大きく振り、滑らかに柄の部分を滑らせた。近くの柱をコツコツと叩き腕を大きく真つ白く変形させ膨らませたかと思えば素早く動かし……柱を槍によって抉りとった。

断面が痛々しく乱れ、あんなものを体に向けられれば一目で一溜りもないのがわかる……が、それを見て彼は小さく気に入らないとばかりに舌打ちをした。

「充分理解した、回復もしていない弱りきったお前を相手にした所で意味がない」

「……………」

「何をしている、さっさと戻ってゆっくり休んだらどうだゾーラ族」

「……………」

もはや彼はオレに背を向け一瞥もしなかった。当然といえば当然、求めていた水を操り戦うゾーラ族、はもういないのだから。

手に持った槍を握り直せば金属音がカチャリと鳴り、それを切っ掛けにオレはこの部屋を立ち去った。

元の武器庫へと槍を片付けようとして……手入れをしなくていいのかとふと考えるも、ろくすっぽに当てられていない槍にオレが何が出来ようか。

せいぜい濡れたそれを拭う程度だろう。槍先はカタクリに届かず当てられたのは特有の操り武器となった水だけ。こんな具合では……失望されても仕方ない。

……ああ。

「……折角……」

どうにも世間から軽んじられ遠ざけられているらしい、ゾーラ族という存在価値を一步だけでも進めれそうだったのに。まだ拒絶反応ではなく興味がないだけの彼に、一置かれてほんの少しだけでも重視される可能性があつたというのに。

「なのにおレは……ああ、ダメダメだゾ……!」

どうにも悔しく地団駄を踏む。誰もいないからとこんな感情任せのヒレ暴れをすべきではない。こんなではまるで卵から孵ったばかりの稚魚のようだとかわかつてはいるが悔しいのは悔しい。

せめて彼には、カタクリには「流石だなゾーラ族!」くらい言われたかった。

ヒトビトから助けたそれに対しての無かつた感謝の言葉より、上つ面の友好的な言葉より、技術の関心からの度肝を抜かして浮かせて泡まみれにしたかつた！

何故かなんて決まってる、彼が……、彼が？

彼が……とても強い、凄いヤツだからだろう、きつと。多分。

それでもなんだか納得出来ず首を傾げながら廊下を歩く。そうだ当初から見張りも何もなく自由に動いていた、それは彼の余裕でありつまりはオレの弱さ故にだ。

明かりのついていない自室へと当てられた部屋に戻り、暗い部屋の中寝支度を済ませる。といつても殆どする事などはないが。

せいぜい新しい水が湯船に溜まっていくのを見るだけだ。

一度浴室から部屋に戻り一度も使った事の無いベッドを眺め、その近くにある窓枠を覆うカーテンを押し退け外を眺める。明かりのついていない部屋から眺める外は明暗の違いがなく、遙か遠くまでよく見えた。泳いだ果汁の川も、全て。

あれほど降っていた飴は降り止み、分厚い雲の隙間から一つ二つ明るい星が明るい街を照らすように覗いていた。

そして高い場所にあるこの屋敷から見える景色は他でもない、ヒトの多い街。家。灯り。……何もかも、煩わしく感じてしまうオレは……いけないゾーラだ。

ゾーラの里とは全く違う景色に言葉に出来ない訳のわからない喪失感を感じて、廊下を歩いていた時とは違う煩わしさに悶えながら身を覆っていた布地を脱ぎ捨てた。

脱いだそれらを次々床に投げ捨てて……大声で何かを叫びたくも、叫ぶ内容が出てこず……大人しく、そのまま浴槽へと戻る。水はもう少しで溜まるようだ。

透き通る透明度に手を伸ばし、カタクリの槍先に切り裂かれた傷跡に水を流す。ピリリツとした痛みが走るがそれを堪え流し続ける。

これくらいの傷ならば一晩水に浸かり休めばすぐに塞がる筈だ、それよりも体力回復の方が問題だ。ああ……澄みきった川で思い切り泳ぎたい……ウロコもガサガサで痛いとか痒いとかじゃなく、もはや落ちるだけになってしまったただ剥がれ落ち汚す不快なモノでしかない。

……オレはゾーラ族の王子で、里の代表としての人質で。でも戦士として、同じ槍を使う者同士……少しでも仲良くなればと思ったのに。打算と思われるのも良い、ワガママだと思われても構わない。ただ日々共に暮らす相手と良好的な関係を築きたかった。それが出来なかった。ああ、悔しい、自分に腹が立つ。

……いや、それよりも。

「切ない……ゾ……」

浴槽の縁に腰掛け足から水槽に音もなく入り、そのまま頭や背ビレまでしつかりと浸かり潜り込む。

コポコポと体を覆う心地良い水泡に身を任せ淀みなく全身を包み込む水に身を任せるように力を抜いた。

口を開き、身体中に残っていた空気を全て吐き出す。衣服を身に付けていない為に自由になった脇腹にあるエラがヒクヒクと水中の空気を取り込むように僅かに痙攣する。

これがゾーラ族の生態、なのにその力を求められて発揮出来なかった。答えれなかった。きっと他のニンゲンから言われたなら……オレは、ここまで落ち込む事はなかった。思い悩むのはあまり好きではないのだが、でも、仕方がない。

そうだ。彼がただ凄じからじやない。オレは。

オレは彼に、きつとカタクリという存在そのものに情景を抱き始めていた。優しいとか頼りになるとか、そうじゃない。

強く気高く……初対面時に大切なモノを傷付ける恐れがあるオレという存在のそれから、全てを守ると威圧するように宣言した強き高潔さに。それに憧れた。

オレは……姉さんを守りたかった。彼女から常に守られていたオレが今度は、オレは、里を守りたかった。オレはゾーラ族の王子プリンスだから。何から……じゃない、今度こそ出来る限りの全てから守らないといけないと思つたから。

思考が、まどろんで、鈍つていく。

彼は、きつと、それを……オレが知らない年月ずつと、守り続けている……なんとなのだが、そんな、気が、する。勝手に……考えてしまう。

事実がどうであれ、例えば本当はそうでなくとも……そう、思わせてしまう立ち振舞いをする、彼が……凄い事に、違いはない……

日中から先程まで様々な事があり、ヒレの隅々まで溜まった疲労まみれの体が水中を漂う。

意識が水に溶けていくように薄らいでいく。

ゾーラを守る、大事……だから、明日……もつと、頑張、る……、……ゾ……

いしき、が。とけ、る。

……

……

……

一瞬、何が起きたのかわからず呼吸が出来なくなつた。

苦しい。押さえ付けられるかのよう、な。

「ふ、ふあ?!」

動かしていたエラが、呼吸が止まって。次にエラでは無く口を動かし酸素を取り入れたのはやろうとした訳ではなく本能的な切り替え。呼吸すらままならない不可思議な意識下。

……せえせえと荒く繰り返し呼吸をしていれば徐々に意識が戻ってくる。

水。オレは、眠っていた。

暗闇。夜。今は夜だ、確か浴槽で寝ていた。

腕。掴まれている。オレの腕より大きな手に。

人影。眠っているオレを水中から引き摺りだした……側に立つ、人影。

ヒト、ヒト？その影に、オレは、起こされ……た、らしい。恐らく。水から、無理矢理出された。苦しい。多分、ああ、頭が働かない。

それでも側に立つ、その影をゆっくりと、首が錆びた金属かのようにギリギリ鳴りそうなる速度で見上げ、れば……

誰なのか、理解する。

「……カタ、クリ……？」

寝起きの、掠れた声で彼の名を呼んだ。

寝起きで霞む視界ですら……今までに見た事の無い暗がりのせいか僅かに青ざめて

いるように見える顔色で。

こちらを見下ろす射抜かんばかりの鋭い、怨恨を思ふかのような目で、こちらを見て
いる……彼の、名を。

東雲の躍進

腕を掴まれている。

カタクリの、彼の腕が手袋を着けていない手のひらが熱を持つていて肌を焦がされそうな程に熱い。オレの水に濡れ冷えた体を熱するかのようなそれに対して何かを言える言葉をオレは持つていない。

明かりのついていない暗がりの中で彼と何度も何度も目が合う。

「な、ん……だゾ……何、をしてるんだゾ、カタクリ……」

無理矢理に引つ張り出された意識がやつと言葉を紡いでいく。なぜオレを引つ張りあげたのかと聞くために。いや……そもそもなぜここに……にいる？

この島に来て数日経つがカタクリがオレにあてられたこの部屋に近付く事なんて一度も無かったのに。

寝起きで震える声で彼に訊ねれば、オレの腕を握る彼の手の力が強くなった。

「……お前、が」

低い低い声で回答をしようと呟く、暗がりの中でオレを見下ろす赤い目と目が合う。

それが何かを言おうとする瞬間、被せるように咳き込んでしまった。無理矢理に引つ張り出された為に器官に水と空気が入り込み妙な刺激となつて数回ゲホゲホと喉を鳴らしてしまい……

収まり再度彼を見上げた時には、先程の射抜くような赤い目は無くなり、ただ長い毛に縁取られた鋭い目と視線が合うだけになつていた。

「……いや。お前何をしている、なぜ風呂場で……沈ん、でいる」

「……ソ。あつ、そういう事か」

彼のゆっくりと紡がれた……寝起きでも理解出来るような言葉を少しずつ噛み締めようのにのみ込めば、ボンヤリする頭でもなんとか納得出来た。

もしかして。オレが自棄になつて脱ぎ捨てたあれを見て……この浴室に入る前に絶対に見掛けるであろう部屋に散らばつて居る服を見て何かを思わせ、浴室内に入つてきからすぐに目に入らせた沈んでいるオレの姿で……心配させてしまったのだろうか。

日中に色々あつて、その上で水切れを起こす程疲れているオレが……気を失つて沈んでいるとも思わせてしまったのだろうか。

……それ、は。本当に申し訳ない。

「すまない、ゾ……オレは溺れていた訳じゃない、ここで寝ていただけだゾ」

「……………」

暗がりでも解る程彼は不可解そうに顔をしかめた、声色もまるで地底から震わし脅してくるかのような低音をオレにぶつけてくる。

解っているだろうに浴室内をぐるりを見渡し、置かれた器具やら何やらを見た後に再度オレを見下ろす。

「風呂場で……………か？」

その心底呆れ果てたかのような声に……言い訳ではないが、少しでも反論をしたくなる。

「……………しか水を溜めて眠れる所がないから仕方ないんだゾ！ 君だって立ちっぱなしで眠るとあの洋服店の者達が言っていたゾ、同じようなものだろうか？」

「……………」

オレの言葉に何かを言いたそうに少しだけ目を見開いた……が、何も言わずに彼は黙った。何かを言った所で、言われた所でオレたち二人が納得する結論は出なかつただろうから……無意味な討論をする選択を選ばなかつたのだろう。

ああ、そうだ。これは……オレも、彼も、両方の失敗ではあるのだろう。

どちらが悪いとかではない、オレ達は結論を出すのが早すぎたのだゾ。

「すまない。互いに関する知識が乏しいのに話し合いも、それこそ会話すら録にしなかつたツケがここで現れた……だがまだ間に合うゾ。これから少しでも良いから……会話を、対話をすべきだゾ！」

オレの満面の笑みと拳を握つた姿を彼は背を向け見ようとしなかつた。むう、前途多難……というヤツだな。

だがまあ……こうして言つたからとすぐに解決するとは思っていない。物事は大体全てだが、時間が解決する……と共に時間を置かなければ解決しないものなのだから。

とにかくこんな夜更け……夜明け？に訪ねて来たのだから大事な用があると判断し、浴室から上がる。ザブリと水が音を立てて揺れるがオレが入つていた分が抜けた水は浴槽から外に溢れる事は無く、ただゆらりゆらりと揺らめいていた。

水から上がった乾ききつた体は一瞬にして表面についた水を吸い取り、床に足を付いた時点で体は乾いていた。そしてそのまま備え付けられていた柵の前へと歩いていき、ゾーラの里の中以外でのマナーとして用意していた新しい衣服を身に付ける。

カタクリが立ったまま眠るとの情報くれたこの街に住む、仕立て屋に仕立てても

らった衣服を。

流石にゾーラの里では産まれたままの姿だったとしても、相手の国土にいる以上それは守らねばならないルールだろう？ 胸元のボタンを全て止め、微動だにもしないままオレに背を向け立っているカタクリを見上げる。

「それより何故オレの部屋に君がいるのだゾ。それも日が明ける前に……溺れていると判断する前にまずここに来る理由がある筈だろう？」

外に出て服を身に付けるそれがいくら日常になろうとも、衣服を身に付ける習慣がなかったのが人生の大半だ。どうにも手際よく着る事が出来ずモタモタと身に付けるオレ。

そんな最中カタクリは何も言わずオレに背を向け顔を片手で覆っていた。何かを考えているのだろうがその思考までは読めない。

ならば当初ここに来る事となった理由を訊ねるべきだ。

オレ達は……そう。話し合いすらも録にせず、思考と行動のすれ違いを続けているのだから。

「……今なら、行けると判断しただけだ」

「ゾ？」

「着いてこい、泳げる場所に連れて行ってやる」

「……………ゾツ!？」

だからまさか……………それは、オレを気遣うにも似た言葉と行動のそんな事を言われるとは想像の欠片すらも考えていなくて。

彼が紡いだその言葉を噛み締め、理解し飲み込んだその瞬間頭部の尾ビレが跳ね上がり夜更け或いは夜明けの時刻に出すようなものではない大きな声を上げてしまっても仕方ないも思ってしまった。

あの、カタクリが……………泳げる場所に、案内を？オレ、を、だって……………？

*

夜明けにはまだ早い時間帯、街にともる灯りは少ないというのに見上げた空に満天の星は見えなかった。まだ日中降り続いていた雨雲が残っているのだろうか。

外に出る事は禁止されていたが連れ出したのがカタクリなら何も構わないだろう、しかし日の明ける前の道は暗くほんの少しの吐いた泡先ですらうつすらとしか見えない。

雲の切れ目から覗く星を一つ二つ数えていると案内をする為少し前を歩いていたカタクリの足が止まった。

「ゾ？ どうしたカタクリ」

「ゾーラ族……おれ達には対話が足りないと言っていたな」

「ああ、言ったゾ！ 確かにオレ達はお互いの事を知らなすぎるのだゾ」

「……これはただの一般的な知識だが」

早歩きで歩いていたオレが彼の隣へと到着したのを横目で確認したカタクリは再び歩きだした。歩幅が大きいから早歩き、もしくは小走りで進むそれに変わりはないがどうやら言った通り対話をしてくれようとしているらしい。

「昨日の日の中の態度で理解しているだろうが……一般的に現在魚人族そのものに対して好意的な感情や意見を持つ者は少ない。そして違いも分からず魚人に似ているゾーラ族という存在そのものの認知がない為お前自身、魚人という括りになり好まれていない」

遥かに高い場所にあるカタクリの横顔を見上げながらその言葉を聞き……オレは首を傾げた。言われた意味は分かるが、そもそもが分からない。

「魚人族……は人だろうか？ オレらゾーラと比べて。勿論ゾーラ族を知らないとして

もだゾ、彼ら或いは彼女らはオレらよりは遙かに君達に近いのだゾ。それを何故……」
「人は人と違うそれを拒絶する。ほんの僅かでも違いがあるのなら……理屈も理由もない。魚人程多数の一般から離れば当然だ」

「……不思議だゾ。違いへのそれは恐怖によるものか？ 魚人族達とはそんなに関わりがないのか？ 君の弟か妹がいるのだと女王は言っていたゾ」

淡々と紡ぐ彼の言葉にオレは必死に返す。それは折角の会話を続けたいという思想と、心底理解が難しい前提を言われたからだ。

オレらゾーラ族はニンゲン達との関わりを遠ざけていた、それは海から離れた島内部だけで簡潔していたから他ない。だが海という場所で繋がっていた魚人族らは……それこそ、そう。

ゾーラの里を襲った彼の母親、女王に深く関わった者がいた筈だ。オレらが彼女に直接関わる必要なくその血を受け継いだ息子経由で構わないと言う程には。

オレが問い掛けたそれに下から見上げる横顔ですら分かるほど彼は眉間に皺を寄せ、不愉快そうに顔を歪めた。

「魚人島……あそこは、白ひげ……他の海賊の縄張りだ。普通の人間は逸れ（はぐれ）の魚人ですら早々見る事はない。それこそ今ママの腹にいる弟か妹の父親人となりで

すらおれらは録に知らない」

「……見ないから、知らないから怯えているのか」

「言つたろう、姿形が多少違うだけで大多数は拒絶する。それこそ……。……いや、誰でもだ」

「難しいものだゾ……。オレ達ゾーラだつてそれぞれ姿形が多少違うのだが君達から見るときと同じなのだろう」

オレが、君達ニンゲンの姿形をそう感じるように……。そう、語りかけるも返事は無かった。何か嫌な事を思い出すかのように目を細め、構わずに歩き続けている。

返事のないカタクリから視線を外し、オレは離れてからまだほんの僅かだというのに遥か遠くの記憶になっている気がする者達を思い浮かべた。ニンゲン達程の大きな違いはないにしろ、個性というものがある愛しい大事なゾーラ達の顔を。

「父上の体はオレよりも遥かに大きいし、頭部が他ゾーラの比べて平べったかったり口が頬裂けているかのように大きいゾーラもいるゾ……。ああ、そもそも体色すら全く違うのだゾ」

「……………」

「オレらゾーラと魚人が違う種族、そして敵意が無く安心安全であるとの事も……。徐々に解つてもらおうしかないのだな！　もう対話が必要なのは君だけではないようだ

ゾ……！」

カタクリが言うその不可解な事実、なぜそのような事になっていいのか……それを完全に理解するにはオレはきつと知識不足だ。ニンゲン社会の話じゃない、ニンゲンそのものに対する知識不足。

そもそもゾーラ族と似ているという魚人族の事すらよく知らない、もしかしたらとてもない……極悪な魔物と同類の可能性もあればこの世の善を全て注ぎ込んだような心優しい者達なのかもしれない。

それにそんな極端でもなんでもない、ただ良い者も悪い者もいる当たり前の普通の者達なのかもしれない。

知らないそれを怖がる理屈はわからなくはない、だがオレ自身が納得出来るかは別物だ。

だからもつと……仲良く、なりたいのだゾ。そうすればもつと歩み寄れる筈。もつと、もつと……

「おいこつちだ」

「ゾツ？」

新たに芽生えた強い決意を胸に抱き、拳を作り空に掲げようとした瞬間遮るようになり、タクリが声をかけてきた。

見れば建物も無く灯りに沿って真っ直ぐ進んでいたオレの道から外れ、横道にカタクリは向かつていた。慌ててその後を追っていけば、整えられた通路は無くなり柔らかかな砂地に変化し……

そうして鼻先を掠める香りは濃くなり、暗闇の中でさえ見える目の前に雄大に広がるそれは……

「……海」

夜明け前のタコ墨を垂らしたかのように暗がりにも広がる景色にも関わらず鮮明に見えてくる視界の先。鼻先を擦る潮の香りと、僅かに鳴らしている波間と陸地にぶつかる衝突音が心地よかった。

遙か先まで何の障害物もなく広がるそれに音量を吸いとられたかのように口元からこぼれ落ちるように呟いた言葉は、きつと近くにいるカタクリにすら届かなかった。

「……良い、のか」

確かにオレは泳ぎたいと言った。必要だと何度も説いた。けれども。

どこまでも、世界の遙か先にまで繋がる海にオレを行かせてしまつて。もしかしたら

……オレ自身はする気なんて微塵も無いが、万一の可能性としてこのまま海を泳いで、責任も重圧も尊厳も約束も、何もかも逃げてしまいかもしれないのに。

「見て分かると思うが、この海は今陸地からそれなりの距離が夜の外気に冷やされ固まった水飴に覆われている」

「ゾッ……つと……ああ、どうやらそのようだゾ」

オレの問い掛けをまるで耳にいれていないかのように彼はそのまま話を続け、そして砂地を何にも構わずに進み続けた。角度からして波打ち際に入るだろうと思われる場所にも関わらずそのまま。

普通ならそのままボンと水に落ちてもおかしくなく、反射的にオレは彼を掴もうと手を伸ばした。

だがそうはならず、オレの手も空を切る。

そして理解する、波ではなく今日の前にあるのは海の表面を覆い被さるように固まっている昨日散々空から降り注がれていた水飴なのだ。波間の音は水飴の下を打っているやつなのだろう。

その上を彼は何事もないかのように歩き……オレもその後を追う。

「夜が明けるとこの固まる水飴は溶け、川から流れ出るジュースが関係ない海に溶け

込む……純粋に海を味わえるのは夜中か今しかない」

きつとそれはオレを思つての親切心。強く強く胸を打たれる。オレが果汁の川で泳いでもゴタゴタの事件によつて爽快感より疲労感が増した事、そもそも海水なら大丈夫とは言つたがそれ事件が起こる前で彼は聞いてすらいはないかのようだった……

なのに、覚えていてくれて尚且つ友好的に……ああ!!

「カタクリ! 君も泳がないか!」

「は?」

「勿論一人で思いつきり泳ぐのは好きだゾ! だが今は君とも泳いでみたい心情なのだゾ!」

「断る」

「そこを何とか!」

「断る」

泳ぐのならば久し振りにヒレを伸ばして思いつ切りの全速力で泳ぎたい。だからゾーラ族の遊泳速度にニンゲンである彼が着いてこれるとは思わないが、だがそれでも今は衝動のままに共に泳ぎたい気分だった。

そうすれば何よりも仲良くなれる、そう思えたから。だがカタクリの反応は芳しくな

かった。

「あつ、ならオレの背に乗るか!? 君一人くらいなら乗せて泳げると思うゾ!」

「断る」

「泳ぐのは良いゾ、最高だゾ!! あの水飛沫を飛ばし巻き上げながら水面を泳ぐ感覚を是非とも味わつて欲しいのだゾ!」

「断る」

何度誘つても続べからずあつさりと断られて……ゾー、確かに元々服を着ているから水に濡れるのを嫌がるニンゲンはいるらしいしカタクリはそれだろうか。それでも風呂場があり、シャワーとかで慣れているだろうに。

「ならオレの横に共に泳がないか! 君の泳ぐ速度に合わせるつもりだゾ!」

「……。……違う、そもそも気分とかじゃなく、おれは泳げねエだけだ」

「ゾ? ……ああ、確かに君はまだ若いからな。分からなかったり練習をしたりするなら泳ぎ方は教えるゾ?」

「そうじゃねエ」

「ゾ?」

オレからの提案を断る理由をカタクリは「泳げないから」と言った。確かにニンゲンとしては大人に近くても、オレより遥かに年下な彼が泳げなくても仕方ない。オレら

水に生きるゾーラ族だつて泳ぐための練習を遊びを交えながらするのだから。

だから水の民であるオレが手伝えばすぐに泳げるようになるだろう……そう思い提案をするもあっさり否定されてしまう。……彼の顔を真つ直ぐに見つめればカタクリもオレを真つ直ぐに見つめてくる。

「悪魔の实の能力者は……おれは、この能力を得た代わりに生涯泳げん。完全に海に、水そのものに嫌われる。根本的に不可能なそれに練習もなにもない」

「ゾツ!? ……そう、なのか……残念だゾ……」

そうして彼から教わる衝撃の事実。胸元に掲げられた彼の暗がりの中でも見える程、右手がドロリと白い粘着力のあるものに変化する。あの厄介な能力。

その一般的なニンゲンでは有り得ない変化を見せられて……否応なしに理解させられる。彼や彼の母親の種族として持ち得ない不思議な力は……そう、か。

それはあんなに素晴らしい自由自在に泳ぐ為の権利を、生涯捨ててまで得た力なのか。

当然だ、泳げない彼を背に乗せると誘つても了承はしてくれない。オレに命を預ける事になるのだから、そもそも練習するとかも同じ事か。

……最早有り得はしないが、一緒に泳げたら……きつと、楽しかっただろうに。

あ。いや、それなら。

……泳げないカタクリでは、オレがそのまま遠くの海へ泳いで逃げてしまえば彼は何も出来ない。ゾーラ族に対して泳いで追い付ける早さとかではなく、根本的に泳げないのならば……万一でも追い付くなど不可能だ。

だと、いうのに……。絶対に不可能、なのに。……泳ぐ、許可を……ああ、本当に彼は、優しい！

「い、今すぐ感情のままに抱き締めたいのだが!! 良いだろうか!？」

「嫌だ」

「そうか! きつとそうだろうな、すまない! だがありがとう嬉しいゾー!」

体の奥底から湧き出る止められない衝動のままに行動をしたかったが顔を歪めながらあつさり断られる。断られはしたものの衝動のままにカタクリの手を握手の形で掴んでブンブンと力のままに降る。

何度も何度もお礼を言いながらそのまま降り続けていれば舌打ちと共に振り払われ

る。

だがここ連日でされめ当然だろ。彼のその振る舞いに堪えきれず笑いが漏れ、そのまま怒鳴られ怒られる声を聞きつつも流して地面を強く蹴り、遙か後ろ向きに飛び上がりながらそのまま暗い海の水面へと飛び込む。

とぶん、と飛び込んだ衝撃も音もなく水音に体全体を包み込まれる。

両手足を大きく放り出して力を抜き、口を大きく開けて体内から全ての空気を吐き出す。

……ああ、ジリジリと皮膚や鱗を焦がすようにひび割れ疲れきった体に染み込んでくる海水がオレの体を縁取っていく。

そのまま水面に浮き上がる事なくとにかく満足するまで泳ぐ事にする。果汁の川では出来なかつたありとあらゆる方向に深さに、縦に横に、時間なんて意味がない。数分、十数分、何十分経とうとも関係ない。

とにかくオレの体が心が精神が満足するまでただひたすらに海を泳ぎ回る。

それでもあまりに離れすぎてしまえば彼が不安になるかとあまり陸地から離れすぎないように泳ぎ、時折何度か水面を跳ねるようにして泳ぐ。水面に出た時に彼に向かっ

て腕を振り上げてアピールをして。

ああ……夜明けが近いのだな。水平線が仄かに白く染まり、水面がキラキラと朝日の暖かさを反射している。

オレが何度も水面から飛び上がる度に仄かな星の光しか無かった海は先程とは違い、飛ぶ度に太陽の柔らかな光を反射し飛び散る水粒はゾーラの里を輝かせる夜光石のような方面を輝かせていた。

彼へのお礼も楽しんでるアピールをかねてしていた水面を跳ね飛ぶのに飽きたオレは逆に今度は潜っていた。全速力で体に存在する全てのヒレを動かし、思う存分遙かなる深みへと。

そうして海底近くを泳いでいれば太陽の光が入ってきた海底ですら見えてくる謎のシルエツトを発見する。

……あれは、船だ。それも結構な大きさの種類は分からないがとても立派な船だ。

海藻が絡み付き、ゆらゆらと揺れる緑色に染まった少し不気味にも思えるそれだがその不安定な美しさに心惹かれる。

招かれるようにふらふらと近寄っていけば、海底近くに僅かに届いた一つの光を反射

した何かに目を奪われる。それは近くの砂浜に沈んでいたがほんの少しだけ顔を覗かせていたもの。

それを手に取り……何よりも高鳴る胸そのまま興味津々にオレは潜り込んだ。

*

「カタクリー！」

船内に潜って数分、海中に潜って十数分後水面へとオレは顔を出してそのまま飛び上がるように陸地へと上がった。

大分待たせてしまっただろうにいつもの不機嫌そうな顔をカタクリはしていなくて……いや、気のせいかもしれないが少しだけ穏やかに見える顔をしていた、気がする。オレが現れ近付いてしまえばいつものように眉間に皺が寄っていたが。

それでもオレが手に持つ赤色に光り輝く物を見て少しだけ眉をつり上げ表情を変えた。

「……ルビー？ それもかなりの大きさの……そんなもの何処から拾ってきたんだ」

「これは海底に落ちていたのだが、沈んだ船体がいくつも箱に納められてあったゾ！ きつと探せばまだまだ有ると思うゾ！」

「……そうか、近くで海戦をして沈めた数隻分の残骸が流れ着いたのか」
手に持っていた赤い石を差し出してきた彼の手に渡す。そのまま太陽光にかざしたり、指先でノックするように固さを確かめたり……色んな事をしてきたカタクリが何かに気付きポツリとこぼす。

この夜光石のような美しい石がどうして海底に沈んでいるのかは詳しくは理解出来ていない、解るのは彼ら海賊団は容赦しないという事だけだ。

「必要ならば他の分も取って来るゾ？ ああ深さはきつと君達ニンゲンではいけないのだろうし、魚人との仲も深くないのならばオレ以外いけないだろう？」

「それは助かるが……」

「ゾー！ 任せてくれ！」

少し困惑しているように見えるカタクリから了承の言葉を取るが早くオレは再び海中へ潜った。あてもなくただ泳ぎ続ける気楽さはあるが、目的物を探しながら泳ぐというゲーム感覚で泳ぐ楽しみはまた格別なのだから。

そうして泳ぐ事十数分、今度は先程よりも少しだけ小さな宝石をいくつも手に持てる範囲で拾い上げて地上へと持っていく。

それを、何度も何度も繰り返し返す。

そうして続けた結果餡の上には剥き出しの宝石そのものや、アクセサリーに加工され

た物などの様々な宝石類がかなりの数山のように積み重なっていた。

いつの間にか暗かった空もうつすらと白み始めており、岩のようにガチガチに固まっていた水飴も爪先でつつけば僅かに跡がつく程に柔らかくなってきた。

「どれだけ泳いだのだろう。一時間は優に越えているはず。」

それだけ彼を待たせてしまったという事になるのだが……何だか申し訳なく思ってしまった……ところがやめ時だろうと胸元から上だけ水面に出した状態で彼に話し掛ける。

「探せばまだあるかも知れないが、そろそろ終わりにしようと思うのが構わないだろうか?」

「ああ、それで良い。そろそろ夜明けも近いし、これらの事は帰って報告しておく」

「ゾツ。理想論ではあるが海中を住み処や縄張りにする者達に力を貸して貰えればいいのにな」

「……僅かな異変の報告、侵入者発見の連絡を出来る生物、ねエ……まア確かに理想論だがないと断言出来ねエ以上不可能とも言えない、頭の片隅には置いておく」

「ありがとうだゾ! では行ってくる!」

足場のない水中から体のバネだけで一度空中に飛び上がり、水飛沫を飛ばさず着水しそのまま潜る。よくよく見てみれば海中無いにも朝日の世界を縁取るような輝きが射

し込み実に美しい。

この光景を見てしまえば日中もさぞかし綺麗なのだろうと想像してしまい、また泳ぎたくなる。だが……厳しいのだろうか。

こうして誰にも何も言われない沈黙の時間である夜明け前に連れ出したのは、彼の精一杯の譲歩で優しさなのだろうから。

隅々まで探し終えた船一隻を横に通り過ぎ、別の場所へと向かう。先程潜った時に潮の流れからして、小さな物が集まりそうな妙に窪んだ場所を見付けていた。

案の定そこにはゴロゴロと海底を転がり集まったであろう様々な自然物、人工物を眺めてから掻き分け手に取る。

両手の平から溢れそうな程の輝く宝石を取り付けた金属を持ち、オレは海面へと向かうために水を蹴った。

これだけの量だ、最後に渡すものとしては相応しいだろう。これらがどうしてここに転がっているかなんて詳しい理由も原因もわからない、それでもこの残酷でしかない世界に生きているのならば予測は出来ている。

オレがこの場所にいるのが、近しい理由。

水中全体を揺らす程の衝撃を背中や尾びれに受ける。
何事かと振り返り見れば納得する。

こちらを親の仇かとはばかりに先程の窪みの奥から身を乗り出している、睨んで襲い掛からんとしている大型のツノの生えたサケに似ている小型の海王類が目に入ったから。

どうやらさっきの場所は彼の縄張りでズカズカとヒレ先のまま入って好き勝手所有物を奪い出ていこうとするオレは彼にとつて獲物らしい。牙を剥き出しにこちらへ襲い掛かってくる小型とはいえ十数メートルあるその巨体を避け、海面へと全速力で向かう。遠退きながらも後ろに追ってきているその気配を感じながらオレは逃げていた。

そして海面へと勢いよく飛び出す。海面よりも遥か高い場所へと飛び出し、見下げて牙を剥く海王類の顔と、陸にいたカタクリの顔を見る。

海中の出来事を何も知らない彼は何事かと訝しげと困惑した顔でこちらを、オレを見上げていた。

「カタクリ！」

手に持っていた物全てを大きく振りかぶりカタクリに投げつける。ジャラジャラと散らばるそれらを体を白くフヨフヨしたモノに変形させ受け取ったのを見ながら一回空中回転し、飛び出したオレを追ってきている海王類へと腕先指先を向ける。

「すまない。君に恨みはないのだが」

指先に身体全体から集めるように力を込め、手のひら全体を覆う程の水を作り出し、その中心部分を一本の指先に集中させる。

そしてそれを、オレを飲み込まんとばかりに大口開けた海王類の体を撃ち抜くサイズに大きく広げ、水全体で体全てを。中心分のまるで名刀とばかりに鋭く尖らせた水で海王類の体を頭から足となる尾びれまで撃ち抜く。

その大きな体はビチビチと何が起きたかもわからないように空中を跳ねながら動いているのを音で感じていた。回転してスタリと飴の地面に着地したオレを食らわんと口を大きく開閉している、その姿を再び撃ち抜かんと腕を構えた途端海王類は痙攣を起こし、そのまま側面から海面に叩き落ちた。

そしてビクビクと動いていた体はやがて動かなくなる。

きつと縄張りに容赦なく踏み込んできた上攻撃してきたオレの事を許せないだろう。だが、それでもこの世は弱肉強食で当然なのだゾ。許せなくても……ただ無意味に足掻くだけではどうにも出来ない事もあるのだから。

海王類の命の灯火がゆっくりと絶えるのを見届け、カタクリへと向き合う。空中から些か乱暴に投げ付けたそれをあつさりを受け止めてくれた彼を。

「すまない、騒がせてしまったな！ あつ、乱暴に投げ付けたが受け止めてくれてありがとうだゾ、カタクリ！」

「……ああ。今の水柱は……昨日見たものより遥かに素晴らしかった」

「ゾツ。ああ、君のおかげだゾ！ 思う存分深く長く自由に泳がせて貰って体が回復したのだゾ！」

カタクリが昨日見たというそれ、は。果汁の川に溺れ流されたニンゲンを助ける為に作り出していたものだろう。彼と戦った時そんな大した水柱を作れていないから。

確かに人員を助ける為に打ち出したそれと、襲ってきていた海王類を倒す為のそれは全く違う。規模も威力も、鋭く磨かれた技術から放たれた一撃も……全く違っていただろう。

今のオレならきつと昨日よりも彼の相手になれる。もつと戦える。

鱗のガサつきが少しマシになった気がする腕をブンブンと振り回し好調である事をアピールし満面の笑みを彼へ向ける。何か反応されるのを期待していた訳じゃない、いつもオレがやりたいからやっていただけ。

ここ数日常であればそのまま無視されるのが当然だったから。

……だが。

「……魚人族を深く知る訳ではないが……ゾーラ族の泳ぎは、流麗だな」

「ゾツ?!」

想定外の言葉をかけられ、その言葉の衝撃を受け止めきれずまるで古代シーカーの技術で動きを止められたかのように微動だにも出来ずに腕を振り上げた体勢のまま固まってしまった。

……え、オレは今、褒められた、のか？

……ゾツ……!

な、なんだ。なんだゾ……!こんな真っ直ぐに彼に褒められるなんて想像もしていなかった、普段ヒレ先まで全て湿らせひんやり冷たく保つのが好ましい体が異常に熱を持って発している!

照れる、照れるゾ!だって、なにせ……ゾーラ族の事をこうもストレートに褒められては、嬉しい他ないのだから!

理由や思惑なんて何もわからない、だが泳ぐ姿が素晴らしいなんて褒められる、なんて……!ああ!他意は本当はないのだろうが、嬉しい。素直に褒められたそれが嬉しく

てたまらない！

動きの見えない拘束が溶けた瞬間からジタバタと意味のない照れを誤魔化す暴れ方をするオレから彼が一步離れる、確かに不審なオレから離れるのは当然だ、でも止められない！

嬉しい！泳ぎを褒められるなんて考えていなかっただ！

「……。……そろそろ戻るが、お前はまだ暴れる気か」

「ゾッ！ す、すまないオレも共に戻……あつ、あれを持って帰っても良いだろうか？」

「は？ ……何故だ」

彼の低い声が妙にひきつったような声色でオレへと話し掛けてきた。その言葉に慌てて否定し暴れていた動きを止め、彼と共に戻る事を伝え……そして海面に浮かんでいる先程オレが仕留めた海王類を指差す。

オレの指先を顔を動かさず横目で確認し、指し示したそれはわかるが何故とばかりに眉間に皺を寄せる。食べ物でいえば確かにこの国には沢山ある、こうして仕留めて持ち帰るそれが理解出来ないのかもしれない。

それでもオレは持ち帰りたい、それがオレの行動に対しての責任で、後は……うん、美

味しそうだからな。

「オレの朝食に食べようかと思つてゐるのだゾ。この島の水は魚料理に使うのに相応しい水質をしているし、キッチンもあの料理人達に言えば使わせてくれるだろうからな！」

勿論全てではない。流石に一人で朝食として食べるには量が多いだろうし、今から様々な料理にするには圧倒的に時間が足りない。

まずは朝食分を切り取り調理して食べた後、色々調理を行つて昼食や夕食分の料理をしよう。そう思い伝えるもカタクリは納得したようないないような不思議な表情を浮かべてオレを見下ろしていた。

「……料理が出来るのか」

「ゾー！海王類を含め、魚料理ならそんじよそこらの料理人に負けるつもりはないゾ！」

なにせ研究家に様々な魚料理を教わつた事があるからな！得意なのは魚だが、貝でも甲殻類でも、それこそ海王類でも作れる！オレの作つた料理を様々な者達に食べてもらつた時の評判もかなり上々だつたし、自信は結構あるゾ！

オレのその堂々としている様子と理由を述べた言葉に何かを言いたげにしつつ目を

細めていたカタクリだったが、何も言わずに翻して歩き始めた。うむ、どうやら許可が出たらしい。

海へと飛び込み、海王類のツノを抱え持ちそのまま引つ張る形で水飴の上を引き摺りながらカタクリの後を着いていく。

カタクリはしばらく何も言わずに、横を海王類を引き摺りながら歩くオレを相変わらず首を動かさず横目で僅かに確認するだけで歩いていった。

そして海の上で固まる水飴が終わる海岸まで辿り着く。流石にまだ人氣がない夜明けと早朝との狭間の街中を海王類引き摺りながら歩くのはどうなのかと、一瞬間で立ち止まり……取り敢えず陸へと上げる。

そんなオレのその姿を立ち止まり見ていたカタクリがタン、と足を一歩踏んだ。思わず見上げれば彼の赤い目と目が合う。怒られるのかとそのまま見上げ続けるも彼は何も言つてこなかった。

そしてそのまま暫く互いに無言で見合い……この海王類を持っていつて良いのか確認しようとした瞬間。

「お前……スイーツは作れるのか」

「ゾ？ スイーツ？」

本当に、予想していた何よりも斜め上からの質問を投げ掛けられ思わずそのままおう

む返しをしてしまった。

……スイーツ？スイーツとは、あの……食後に出してくれる甘い果物や砂糖を使った様々な物、お菓子だよな。お菓子が作れるかどうか、か？

……正直、やった事がないからなんとも言えないのだが。

「……まあ習えば出来ると思うゾ」

「……そうか」

決して不可能ではないとだけは伝えておく。自画自賛ではないが習えば大抵なんとか出来る。不思議な能力を手にする事で泳げなくなった彼が泳げるようになるよりは遥かに高い率で作れるようになるだろうから。

オレのその答えに返答ではなく息を吐き、それつきり彼は何も言わなかった。海王類を持つていつていいのかと訊ねても適当とばかりに頷くだけで。

だからオレはそのまま海王類を抱え持ち、進むのを止めはしなかった。

カタクリの言葉を不意に吹いた風の音にかき消されて録に聞き取る事も出来なかったのもある。聞き返しても彼は答えてはくれないから

「……飲み物、と……」

その真意を確かめる事なんて、オレには到底。

そして。我らゾーラ族の民を迎えに行く船が本日出掛けると聞いたのは、彼の屋敷へ戻って一時間と数分後の事。

ああ、結婚式が近付いてきている。父上や姉さん達もこちらへとやってくる。間も無くだ、穏やかに何事もなく終わる、筈だ。

……こんな緩やかに迫っていて大丈夫なのだろうか。

んん……何だか妙に嫌な予感がする。何がという訳ではないのだが、勘がそう言っている……気がする。

さん

「……と、いう訳で迎えの船が今朝こちらの島を出たんだゾ」

『そうなんだ、そちらの場所がわからないから良かった。私と御父様、警備兵は誰かはまだ決まってるけど何人か……あ、あとセゴンも行く予定だよ』

「ゾッ!? セゴン爺が!? 元老院達は全員来たがらないと思っていたが……意外だゾ」

『やつぱりシドの事は色々可愛がつてたからかな。ムズリは嫌がつて断固として行かないとは言ってるけど。それでいつ頃到着予定なの?』

「この前出迎えた船と同一かはわからないが多分明後日くらいには到着すると思うゾ! ……カタクリどうなんだ?」

「違うだろうな。それにお前が来た時と違い潮の向きや船の性能などでもう少し遅れるだろう」

「ゾ? そうなのか。ん、というかもう訓練に行くのか?」

「ああ、先に行っている」

「了解だゾ！ ……という訳で別の船が少し遅れて数日後になりそうだゾ、姉さん」

『……うん、わかった。それにしても……』

「ん？」

『この前話した時と、随分変わったね』

*

昨晚姉さんから言われたその言葉の真意を未だにオレは読み取れていない。

昨日一日で身を食べ、残った骨から出汁を取るため叩き割り長い時間コトコト煮込んで今日の夕飯に様々な海王類料理作ろうと、鍋をかき混ぜながら厨房に佇みながらオレはそう考えていた。

聞き返してもはぐらかされ、通話が終わってすぐにカタクリとの鍛練に向かつて忘れていたのだから。

そういえば、カタクリの声を姉さんは昨日初めて聞いた筈だ。どんな印象だったのか聞けば良かった、また今夜にでも電伝虫を使って聞いてみよう。

あの時あの場に偶然通り掛かったという彼とすぐに合流し前回よりも研ぎ澄まされ

た槍の鍛練を出来たと思ってる。少なくとも、オレは。

有意義な鍛練を行い、その後火照った体を冷やすようにアイステイーを振る舞った。一応一度頼まれたのだから彼の好みから大きくは外れないだろうと。

彼は大人しく、何も言わずに出されるがまま口にしていた。前回と少し香りの引き立て方を変えてみたのだがどうだろうか。そう思えども……うん、カタクリは何も言わなかった。

だがそれでも互いを理解する為の距離を縮める事には少しずつでも成功している筈だ。

この海王類もサケではなくモグラという生き物だと教えてくれたのだから。ん？海獣だっただろうか？……まあ種類や正体等なんだっていい、肉は美味しく出汁もこうしてたっぷり出してくれるだけで。

……そういえば。昨日の昼を少し過ぎた今と同じような時間、パティシエ達に言われて淹れて恐らくカタクリの元へ持っていかれたお茶は何の為だったのだろう。喉が乾いていたのだろうか。

カタクリがその時何をしていたのかは知らないが、確かパティシエ達はメリエンダだなんだと言っていたような……しかし何だろうかメリエンダとは。

以前服を仕立てて貰った時にも聞いたな……確か、精神統一とか言っていたような……つまりそういう儀式的なものなんだろうか。肉体でなく精神の鍛練……。

毎日欠かさず精神を鍛えているとは素晴らしいが、だがあまり根を詰めるのは良くないな。気を抜く時間も大切なのに。

そのような時間を取るようにさりげなく伝えてみても良いかもしれない。

そういえばニンゲンは滝に打たれて精神統一をするとか聞いた事がある。あんなに心地いいものに打たれながら無心になるのは大変なのだろうか……そういった修行でも行っているのだろうか。

ふと、視線を感じ振り替り見上げればカタクリが開かれたドア向こうからオレを奇妙な目で見ていた。

「お帰り！ 用事はもう済んだのか？ 出汁を使った料理は素晴らしい夕食が出来ると思うゾ！ キミもどうだ？ あと昨日と同じように紅茶を淹れるように思うのだが”あつさむ”と”あーるぐれい”どっちが良いんだゾ？」

昨日の事を考えて水分補給の提案を目線を彼に向け、進捗情報をついでに伝えれば益々怪訝な顔をされる。眉間に皺を寄せて何か言いたげに、それでも何も言わずに頬を指先で撫で……

あれ。

顎に毛が生えている、それもかなりの長さのものが。今朝見た時は……あれ？そもそも見た事があつただろうか？

「おいどうした」

「いや、何つつていいのか……」

「ゾツ!? 増えた!?!」

そうしている内に扉の陰からもう一人のカタクリが現れる。どういう事だ!? 不思議な力を持っているのは知っているが増える能力もあつたのだろうか!?

二人のカタクリが何かを会話しているのを数回瞬きする時間見つめていて……ふと気付く。

このカタクリ、オレが知るカタクリと少し違うような？

鍋の火を弱くし、焦げ付かないようにした後彼らがいる扉の元へと向かう。

近付いてきたオレに気付きこちらを見ている彼らを、その顔を先程より近い距離で見上げて……ううん、やっぱり違うと確信する。

カタクリの色はこんなに明るい日中の日差しの色ではなかったし、目を縁取る毛の量も違う。それに声色も違うし、脚の長さも服装も違うな。

能力だから少し違うのだろうか？……いや、まさか。だとすれば？

「君達は……何者なのだゾ？」

「え、何だ今更。まだ説明してなかったのかよ」

「する前に普通に受け入れられたんだよ……おれらはアイツの、カタクリの三つ子の弟だ」

「!!」

首を傾げながら訊ねるオレにカタクリよりも短い髪の青年が驚いたように目を丸くした。カタクリよりも髪が長い青年がため息混じりに言葉を紡ぎ、似ている理由を教えてください。

それは納得するも同時に驚くもの、弟だったとは！カタクリは確かペロスペローの弟で次男、ならば彼らは三男と四男か！

「そうなのか！ 弟がいたのだな、それも三つ子！ 通りで間違える程似ている筈だゾ！」

「……あまりそう言われる事はねエんだが、本気で言つてそうだな」

「まア人じゃねエしそういうもんなのか」

「それで君達はなぜここに……」

「なんだお前ら何でここに……」

第二人に訪問理由を訊ねようとした時に廊下の向こうからここ数日ですつかり聞き慣れた低音が届く。

彼らが振り向き、その隙間からオレも覗き見る。今度こそは間違いない、後幾日も経たずにオレの配偶者となる相手であるカタクリがこちらに向かつて歩いてきていた。

「別に。特に重要な用件がある訳じゃねエが……強いていうなら式前にどんなヤツなのか顔を見に来ただけだ」

「魚人でも人魚でもない妙なヤツとお前の相性はどんなもんだ、とな？ けどまア思ってたより案外……仲良くやってるっぽいけどな？」

髪の毛の長い彼が握った拳の親指でオレを指差し、髪の毛の短い彼が楽しそうに笑いながらカタクリに肩を組もうと近寄り……そして弾かれる。

相変わらずカタクリの表情は厳しい。眉間に皺が寄っている。

「黙れ。顔見たんだろ、用が終わったならさっさと帰れ」

「でもよカタクリ、ブリュレと約束した時間までまだ時間があんだよ」

「……………」

「だから三時のメリエンダ良いよな？ 安心しろ邪魔しねエよ、そういやさつきそいつに飲む紅茶の種類聞かれたしな！」

「……………おい」

「す……………すまない、ゾ……………」

第二人に囲まれながらカタクリはオレを睨み付けてきた。まるでその目は二人を受け入れた事を責めるかのような……………いや、まさか。

家族は何より大事でそれに関しては責められる事は何もオレはしていない。カタクリだつて初対面時でさえ解るくらいの家族思いだったのだから責めるような事は言わないだろう？ 恐らくオレの勘違いか気のせいだ。

「うむ！ よく解らないが取り敢えず紅茶の用意をすれば良いと判断したから、用意をするゾ！ 少しでも待って欲しいゾ！」

そう高らかに宣言をすればやはり三つ子。同じように目を丸く見開き数回同時に瞬きを繰り返した。そのあまりの息ピッタリさに笑ってしまえばカタクリは呆れたように息を吐き、第二人は声をあげてカタクリとは少し違う顔と声で笑った。

*

「ん!? 何だコレ美味エ!」

「確かに……強い香りが鼻へと抜ける。こんな風味の焼き菓子作りてエもんだ……うん、美味しい」

「そうか嬉しいゾ! さあもつと飲んでくれ!」

「なんだカタクリ、お前味に絆されたのか?」

「うるせえ」

彼ら二人を客室へと招き、椅子へと腰掛けた三人へと紅茶を淹れ差し出す。ゾーラの里では父上の次に大きかったオレよりも大きなカタクリ。そのかなり大きな体格のカタクリと同じサイズの椅子がいくつもあるのは不思議だったが……なるほどそういう事だったのか。

流石三つ子、家族は仲良くするのが何より好ましい。先ほど見た時は身長の違いを感じなかつたのに座るとなぜだかカタクリが一番低く見えるような。うーん、不思議だ。

その漂う違和感そのままに彼らの顔をぐるりと見渡す。ニンゲンの顔の作りの違いは良く分からないが似ている雰囲気を感じるし、何より目が同じだ。髪の毛の色は違うから、口元や顎辺りにある毛色も……あつ。

そこでやっと違和感の正体にオレは気付いた。

……オレが出した紅茶を飲んで。お茶請けを食べている彼ら三人。そうだ。

「オレ、カタクリの口元を見た事がないゾ」

彼らの動きが固まったように一斉に止まる。おお、こんなところまで揃うとは本当に仲が良い。

改めて先程名乗られた名前、ダイフクとオーブンを見た時に感じた僅かな違和感、それは顎回りに生えている毛の存在だ。確かヒゲというのだったな。

魚にも同じようにヒゲが生えるものがあるが、同じように何かを感知する為に生やしているのだろうか？

オレの動きを完璧に見切っていた気配に敏感なカタクリにヒゲがあるかどうかはわからない、何せその口元は常に隠されており見た事がないのだから。

こうして飲み物を飲んでいるというのにその飲む瞬間は見た事がない。口元へと運び、いつの間にか飲んでいる。カタクリはアレだな！せっかちだな！

でもまあそんな事別に……。……。んん？何だろうかこの、張りつめたような空間は。

どうしても逃したくない貴重な漁をする時のように口やエラから泡の一つも出さな

ダイフクに聞かれはつきりと否定する。

「なら何で見た事ないとわざわざ言った？」

「ただ単純に思ったから言っただけだゾ」

オープンに聞かれている意味が分からず首を傾げながら答える。

オレはただ見た事がないと思っただけ。だから思うがままに口に出した。見たいなら見たいと言うし、そもそも顔の一部にどうしても惹かれるような興味もない。そもそも三つ子というなら目元と同じように似ているのではないだろうか、違ったとしても別に構わないが。

「そもそもオレは君達ニンゲンの顔はよくわかっていないのだゾ、だから顔が気になるかと言われてもだなあ……」

「ああ……まアおれらを増えたカタクリと思ったりするぐらいだからな……」

「いやいや！ キミ達はとても似ているだろう!! 仕方がないゾ！」

「だからよ、そんな事は滅多に言われねエんだよ」

ダイフクが腕を組み首を傾げながらしてきた質問に答えるも、オープンが同じように腕を組みながらダイフクとは反対側に首を傾げていた。

うーん、彼らは否定するがやはりどう見ても似ている気がする。でも確かに他人から家族に似ていると言われてもそのまま納得するのは難しい。オレもムズリに父上に似てきたと言われてもその自覚は無いとしか言えなかったのだから。

「……………まあいい、好き勝手に仲良く喋ってろ」

そんなオレらのやり取りを何も言わずにただいつものように素早く飲み物を啜って飲んでいた彼が立ち上がる。

「ゾッ、カタクリどこかへ行くのか？」

「……………メリエンダの時刻、それだけだ」

「ああ！ それでは飲み物はどうするんだ、昨日はパティシエに言われて淹れたのが」

「……………、……………必要ない。そのパティシエ達に用意をさせる」

そのまま部屋を出ていこうとする大きな背中に声をかけ思った疑問をそのままぶつける。彼は動きを止めしばらく身動き一つもしなかったが、やがて短い拒絶にも似た言葉と共に扉をくぐり出ていってしまった。

オレのじゃ駄目なのか。今の今まで飲んでいたから？でもオレの予想の体を動かしたりしない精神の鍛練だとしても水分補給は大事だし、オレなら何リットル飲んでも足

りないのに。

遠い廊下の先でパティシエを呼ぶ彼の声を聴きながらそう、思う。

「えーと、名前何だっけ……ゾラだっけ？」

「シドだゾ！　ゾーラ族のシドだ」

「ああそうか。それよりお前カタクリの言うメリエンダが何か知っているか？」

「ゾ？」

出ていった扉の先を見つめていればオーブンから名前を確認される。一度だけ名乗っただけだし、間違われても仕方ない。

種族名であるゾーラと混ざっていたが、実兄と婚約している彼らにとってすらそれだけ縁遠い存在でしかないという事だ。

改めて名乗り、胸の前に拳を掲げるも軽く流され続けて質問をされる。

メリエンダ……？　つい今程カタクリがこの部屋を出ていった理由の事だな。

仕立て屋やお抱えのパティシエ達が言っていた事をそのまま飲み込むならば知っている。だが……第三者の主観入りの情報からの憶測混じりの予想をまるつきり鵜呑みにするのは些か愚かにも思える。

カタクリ本人から何かを聞かされた訳でも、オレがこの目で何かを見た訳でもないの

に。

「詳しくは知らないがカタクリにとって何か重要なものなのだろうという事は伝え聞いているゾ」

「伝え……って事はカタクリの野郎からは」

「何も聞いていないな！」

唇を尖らせたダイフクが口ヒゲを撫でながらチラリとオープンを見た。

「知りたいと思わねえの。毎日決まった時間に一人で行うそれを。政略結婚とはいえ……いや、政略結婚だからこそ情報は武器だろう」

「思わないな！」

訝しげな表情でオレへと聞いてきたオープン。まあ理解できなくはない。彼らにとって当たり前の疑問、当たり前の思考を訊ねられるもだからこそ即座に否定を返す。

二人とも眉間に皺を寄せ四つの目がオレを見定めるように見てくる。ああ、その目。カタクリと本当に似ているな！

「賊である君達相手にいうことではないかもしれないが、不必要な詮索や企みは小さな亀裂からやがて取り返しつかない毒となりうるのだゾ！ 我らゾーラ族は戦争を起こす気もなく、穏便に済ませたいのだゾ。彼から紹介されるなら兎も角そもそも必要

もなく好奇心のみで全てを暴こうとするなど不義理だゾ！」

「……………」

堂々と思うがままに言い切ってしまったら彼らは何の反論もしてこなかった。一つ二つ何かを言われる事は覚悟していたのだが……そういう所もカタクリと同じだな。勿論返す必要すらない愚かな考えと吐き捨てられただけの可能性もあるが。

しかし初対面時に思った疑問をぶつけられるだけ、警戒どころか殺意満載の敵意や悪意の力を向けられないだけまだマシに思える。

カタクリ相手の政略結婚の年数がどれだけになるかは解らないが人間の寿命から考え長く数十年、それほどの年数ではないが揉め事を起こし気を病むような期間にするには好ましくない。

「……………そういう義理堅いところをヤツは気に入ってんのかもな。そういう素直なバカ真面目なの好きだろアイツ」

「まあおれらに色々あるようにお前にもあるんだろうが……」あの”カタクリが飲食を信頼してるだけで信用度が解る」

「ゾ?」

彼らが立ち上がる。立ち上がりついでにお茶請けを一つ二つ摘まみ、そしてついでと

ばかりに左右に立たれて二の腕を掴まれつい今お茶請けにしたように摘まみ上げられるオレ。

その軽く持たれたオレを左右で抱えたまま彼らは扉を開けて廊下に……え？

「あ、え？ 何だゾ？」

「確かこつちだったよな？」

「自室の場所変わってなきやあつてる」

「質問に答えてくれ！ 何故オレは抱えられどこに運ばれているのだゾ!」

二人の背の大きさは見上げる程高く、力は振り切れない程に強い。何せあのカタクリの三つ子の弟、強さはきつと折り紙付き。それを二人がかりでされている以上オレにはどうしようも出来ない。

例えば水流を生み出し必死に抵抗すれば何とかかなるかもしれない、乱暴な事をされる訳ではない……筈だ。

されない筈だが警戒だけはしておかねば。

カタクリの目を盗み暴行を加えるなら元の部屋でも出来なくはないのだから、どこかに連れていこうとする理由がある筈。

しかしそれでも……何もわからず捕獲された魚のように運搬されるのは少々困惑と不快が混じる。

「は、離してくれないか!」

「断る。つーかお前の皮膚……鱗?なんかザラザラしてんな」

「そうなのか、ちゃんと手入れしろよ。少なくとも式まででは見れる姿じゃねエとよ。それ以降はどうでもいいが」

「……ゾ……」

そしておれの質問や提案は相変わらずスルーされ、挙げ句謎のアドバイスをされてしまった。心配と呼ぶには残酷な事だが的を得ているのが悔しい。

でもそれはまあ……賊相手だから構わないのだが。それより目的が何なのかを罵倒混じりでも構わないから教えて欲しい。

そうしている内に彼らは足を動かし進み、やってきたのは殆んど来た事の無い屋敷の一角。来ては行けないとここに来て二日で理解した、そこはカタクリの自室がある場所。

……こ、れは……ここに来るのは良くないのではないか?カタクリが詳しく何をしているかは知らないが一人きりになりたいと自らを隔離しているというのにそこに無断に踏み込むのは……駄目なのではないか?

「ダ、イフク……オーブン……いったい何のつもりだゾ……?」

「しつ、黙っとけ。あいつに気付かれんだろ」

「ん……あの部屋だったな、行くぞ」

恐る恐る小さな声で彼ら二人に話し掛ければそれすらも咎められる。意識すれば彼らは足音すら控えるようにゆつくりと抜き足差し足忍び足で歩いている事に気付く。

三つ子の彼らですらカタクリの精神集中の邪魔をしないようにしているのだろうか。それ程までのものなのだろうか。ならば……何故来たのかは解らないがオレはやはり、ここに来るべきではないのだろうか。

それでも掴まれている以上その腕から抜け出すことは出来ず大人しく運ばれ続けるしかなく、とある一つの扉の前で彼らは立ち止まった

「あのカタクリをこの短時間で絆したのは大したもんだ」

「婚約……っ！か結婚してももしかしたら上手くいくかもな。このまま何も知らないままだと」

オーブンがオレを掴んでいた手を離し、投げ捨てるように大きく放り出す。逆側の腕を掴んでいたダイフクが一旦受け取り、そのまま床に下ろしてくる。

……何だ？今まで多少の抵抗は黙殺されたのになぜ今放した？何が起き……むっ、ダイフクが両手でオレの肩を持っている。逃がさないとばかりに。

逃げはしない、だが肩ヒレを掴むのは止めて欲しいと多少の抵抗をするも聞き入れられず。

「だがよオ…」

「!？」

オレを離れたオープンから急激に肌を焦がしそうな熱気を感じる。何の変哲もない廊下だったというのにあまりに急に熱せられた為にか陽炎すら見えそうになる。

それに目を細め顔をそらし横目で見れば彼の皮膚が、瞳が、剥き出しになっているから高熱が漏れだし近くにいる全てを焦がさんとばかりに熱気を放っている。

「何もなく平穩に終わるとかな…」

「!!」

オレを両手で掴んでいた筈のダイフクの腕とは別の手がオレの首筋を驚掴む。感触からして二本で挟み絞めるように。振り替えればダイフクでもましてやオープンでもない謎の人物と目が合う。

誰だ!?! オクタロツクでもガーディアンでも無いニンゲンは腕が二本しかない筈だし、古代シーカー族でもないニンゲンが急に新たな人物を召喚出来る筈がないのにどうし

て!?

……違う、カタクリも三本目や四本目の腕を生やしていた。ニンゲンは増やせない訳ではないし、不思議な体である事があり得ない事もない。

つまり焼きゾーラになってしまいそうな熱気を放つオーブンや、自分とはまた違う分身を呼び出したダイフクも同じ。

悪魔の実とやらを食べて摩訶不思議な力を授かった能力者！

まるでマグマ地帯近くのような熱さを纏うオーブンが鍵の掛かっているだろうドアノブを握る。そのまま鍵をかけられているだろうドアノブごとドロドロに溶け落ちていく。

ダイフクが、というかダイフクが呼び出しただろうもう一人の人物がオレを持ち上げ……

ぐ……首を絞められてしまえば水中でないここでは呼吸が止められてしまう……苦、しい……

「平穏安定……そんなんつまんねえだろ！」

「ゾツ!？」

「おらツ!今以上に仲良くしてこい!」

オーブンが扉を溶かし、そのまま足で蹴り破つて無理矢理扉を縦に押し開ける。その空いた空間にダイフクともう一人の謎の人物がオレを思いつきり室内へと投げ込む。

あまりに予想外なその行動にされるがまま空中へと投げ出され、少しでもどうにかしようとして泳ごうと腕を掻き足をバタつかせるもなんの効果もなく。

そのまま空中から乱暴に、床にしたたかに叩き付けられた。一度だけ床からビタンと跳ねて、再度叩き付けられたかもしれないがオレはそれどころではなかった。

何せ受け身も何も取れない体勢、そのまま床に叩き付けられれば本当に何よりも痛い。ニンゲンではあまり見ない出っ張っている額をしたたかにぶつけたし、何より顔面から突っ込んだから顔が……顎や前歯が物凄く痛い。

ああ、額が凹んだのではないだろうか。こ、れは……歯が、折れたのではないだろうか、物凄く痛い……! 血が出ていても何の不思議ではない本当に痛……ん、う?

ぶつけたそこを掌で押さえつつ顔を上げれば、こちらを真っ直ぐに見ていたカタクリと目が合った。

その目の中にオレの姿が見えるくらいにバツチりとあつた。

床の絨毯の上に寝転び、大きな口を開けて本日のオヤツを食べているだろうカタクリと。

先程オレが疑問に思つた口元を剥き出しにしているカタクリと。

カタクリの目が真っ赤に燃えたように歪ん、で……こつちに手を伸ば……

あつ。

青天霹靂

赤い目を光らせながら素早く伸ばされたカタクリの手がオレを捉えんと目の前に迫つ……

それは考えての動きじゃなかった。

条件反射的にオレは後ろへ飛び退き、掴まれる寸前の腕から逃れんと動いていた。腕から水を産み出し、自身の出せる最高速度で逃れて。

その腕を、背を、首筋すら覆うように鱗越しにですら立つ無数の鮫肌が凄いだ。だというのに彼はそれすらも上回る速度で動いてきた。

逃れた筈の腕が足を掴んできたのは、避けた筈の二本の腕ではなく新たに生やされた腕だったから。

そして偶然その腕から逃れられたのは、産み出した水が足を濡らし水分で粘りつくその粘着が効かなかったから。

けれど逃れられたのはそこまで。

瞬きをする一瞬の間に、いつの間にかオレは尾びれを彼の右腕に掴まれカタクリを見下ろしていた。

オレより背が高い彼を見下ろす理由は真っ直ぐに腕を伸ばして頭上へと掲げているから他にない。

千切られそうな程強い力で尾びれの根元を鷲掴みにされ、頭骨がミシリと鳴った、気がした。

痛い、とにかく痛い！ ダイフクの能力で作られた者に首を絞められていた時よりも遙かに強く危険を感じている。何がなんだか何もわからないのに。

燃えるように赤い目がオレを捉え、指をバキボキと鳴らしながら強く握り締めたのを目の端に見えて……

「カ、タク……ん……ぐっ！」

何をしているのか、何をされようとしているのか、離してくれないか……それらの何かを掴まれている痛みを堪えて聞こうと口を開こうとした。

痛みで震え、触れ合った歯がガチガチと鳴り……その、違和感に気付く。

歯が上手く噛み締めれない。これは。……あ、ああ、オレはここまで弱っていたのか

……

「おい！ カタクリ！」

「待て流石にそれは……！」

遠くから声が聞こえる。止める言葉かもしれない、が。もはや、遅い。

「待つ、て欲し……ゾ……！」

痛みに堪え何とか絞り出した声も彼には届いていないようだった。大きく持ち上げられ振りかぶった左腕の動きに連動し尾びれを掴んでいる右腕が揺れるだけ。

ああ、ああ。揺らさないでくれ。今は非常に……まずい、のだゾ……！ あつ。

カツン、とその揺れに合わせて、歯が落ちた。

噛み締めた際にどうにも怪しい感触がした歯が。一本。二本。……三本、根元からポツキリと抜けて落ちたようだった。

二本は抜けたままオレの胸元に当たり、そのまま絨毯の上へ。毛の長い絨毯では落ちた音すら何も聞こえず。

そして抜けたもう一本は他二本と同じように胸元へ当たり、信じられない程に跳ねたかと思えばカタクリの顔面の、丁度右目下の頬へと当たりに行った。

違和感を感じていた。嘔み締めた際に嘔み合わせがおかしく、根元から抜けているのではないかとすぐに解る程に。

ああ、オレはこんなにも弱体化していたのか。鱗が剥がれ落ちたりヒレの湿りが無くなるだけではなく、強く叩き付けられるだけで歯が三本も折れるなんて。

「……………は……………」

自身の頬に無機質なエナメルをぶつけられたカタクリが感情のない低音を漏らした。意識化のものではなく、本当に無意識にポロリと漏れてしまったかのように。

先程まで真つ赤に燃え上がっていた瞳がゆらゆらと動揺しているかのように動き、不解と不愉快に声色と同じように揺れている。

どう見てもそれは呆気にとられた表情。

ああ……………本当にこれは申し訳ない事をしたゾ……………!

「すま、ないカタクリ……………歯が抜けて、君に当ててしまつ、たよう……………だ、ゾ」

思つてもみなかった事だろう。当然だ、誰が持ち上げた相手の歯が抜けると思うだろ

うか。

予想外すぎるそれにカタクリは呆気にとられたからか、掴まれていた腕の力が幾分か抜けて痛みは大分マシになっていた。それでも未だ掴まれ吊るされたままの体勢ではあるが。

喋る度に不思議な違和感がある、つい先程まで有った筈の箇所障害物がなくなり風が抜けるから当然ではあるが。

一度に三本も同時に、それも同じ場所ではなく前の右の隣同士の下の歯が二本、左の上の歯が一本というあまりにアンバランスな形で喋りも少したどたどしくなっている。

幸運なのは途中で折れた訳ではなく根本からポツキリ綺麗にいった事だろうか。半端に折れていたら改めて抜かなければいけなかつたろう。

「血などはないだろうが不衛生だし気になるだろうからまず顔を洗った方が
良いゾ！」

「……………」

オレが言葉を続ける度にカタクリの眉間の皺はどんどん深くなっていく。何をそんなに考え込んでいるのだろう。怒っている？ 困惑している？ もう少し仲良くなればその表情だけで理解出来るだろうか。

……ん？　そういえば今何気なく歯が当たったから顔を洗えと言ったが、その水は大丈夫かと不安に思われてたりするだろうか。勿論生活している以上平気だと判られているだろうが、水質云々はオレが勝手に言い出した事だし……

「……お前、おれの……」

「ゾ？」

「……何とも、ないのか」

そうこう考えていればカタクリはいつの間にか空いた手で自らの口を押さえていて、オレを見上げながら聞いていた。

いつかの時ようにねめつけるようなものではなくまるで悪事を働いた稚魚が親にバレないかと確認するような動作で……ん？　隠している？　何を？

まあ気のせいか……ならば何を……あつ。歯が折れたオレを心配してくれているのだろうか。カタクリ本人を指す「おれ」と言っていたような気もするが聞き間違えかもしれないな！

「心配してくれてありがとうだゾ！　歯が折れたのは流石に痛かったが、でもまあ生えてくるし別に良いゾ！」

「……お前……笑わねエのか」

「ゾ？ 笑わない？……笑い掛けてるつもりだがそう見えなかったか？ すまない！ 歯が欠けていても笑顔に見えるよう頑張らなくてはな！」

「……………」

拳を握り胸の前に掲げて笑い掛ける。ああ、今歯が三本無いのだから非常に間拔けな顔になってる為に違和感を覚えられてるのか……でもまあ！それは仕方ないな！

オレの答えに信じられないようなモノを見るかのような目でカタクリが見てくる。そして無言のまま腕をおろし、オレを床へと優しく下ろしてくれた。

良かったあのまま吊るされたままでゾーラの干物になってしまおうかと思ったゾ。

「いやいやまさかこんな事になるとはな……何とかなつたみたいだが、悪かった」

「つてかお前生え変わるつて乳歯？ 結構若エ顔だと思つてたけどガキなのか」

「違うゾ、オレはもう大人だゾ。だが歯は生え変わるものだろう！」

ダイフクとオーブンが背後から謝罪の声混じりに歩いてくる。全く本当にどういう目的の何だったんだ？三つ子である彼らなりの戯れだったのだろうか。

鍵のかかった扉を壊しヒトサマを放り込むのが？……うーむ、男兄弟の戯れはそういうものなのかもしれないな。オレには少し年の離れた姉さんしかいないしそういうものが判っていないのかも。

「いやアカタクリもよ、メリエンダ邪魔して悪かったな」

「でもまあ結果オーライだろ？」

「……まあ歯云々は後々聞く」

そしてカタクリに対しても軽く謝罪………恐らく謝罪をしている二人にカタクリが近付き腹を思い切りぶん殴った。悶絶の表情で痙攣しながら倒れる二人。

……えつ。

「だが馬鹿ども、テメエらは殺す」

倒れた彼らを見下ろしながらカタクリが冷たく言い放つ………本気、ではない筈だ。これもきつと彼らなりの戯れ。そうか男兄弟の遊びとは結構乱暴なのだ………まあ槍の鍛練で怪我するのも当たり前だし、あれと同じか。

……あつ、そういえば精神統一だなんだとやらはどうなったのだろうか。室内に漂う甘い香りでそれを思い出すも、起き上がった彼らの抗議とそれに対しての正論での反論の口喧嘩に割り入るタイミングが掴めなかった。

*

「ゾツ、ゾツゾツゾ〜♪」

ダイフクとオープンが来て色んな出来事があつた数時間後、日が暮れ暗くなった窓枠から外を通りすがりに眺め鼻唄を歌いながらオレは少し遅くなつた夕飯を自ら食堂へと運んでいた。

改心の出来映えの海王類或いは海獣の出汁をとつた野菜たつぶりスープと他はコック達で作ってくれた夕飯と共に抱えて。明日あたりにもう少し他の料理を作ってみようか、新鮮な魚や貝などを手に入れる為にもコック達に聞かねば。

……この国に来てそれなりの日数が経つた。体は弱つては来ているがそれでも先日おもいつきり泳がせて貰つて少しはマシにはなつた事だし、カタクリとの仲もまあそれなりに良好にはなつてきた気がする。

でもそれとは関係なく少しばかりホームシックになつてきたかもしれない。父上や姉さん達と会話はしていても顔は見れてないし、守り神であるルツタの水も浴びれてないし、ムズリやセゴン爺達の小言もオレを思つての事で今となつては恋しいものだ。

ああ、ホームシックになつた時にまざまざと感じるのは故郷の味が恋しくなることだ。里付近のヒンヤリマスとマックスラディッシュを使ったアクアパッツアを作つて食べたい。

あれさえ食べればこの弱った体もすぐに元気になれそうだ。それかヤギのバターを焦がし煮込み岩塩を大胆に振りかけたマックスバスのムニエルでも食べたい……

ああ、ゾーラの里が恋しい。

「ゾーゾ、ゾツ？ ……カタクリ？」

料理を両手に抱えている為に食堂の扉を開ける手がない、カタクリならば増やして開かれるのだろうかオレにはその腕がない。

だから多少行儀が悪いが扉に対して背中を向け、尾びれでドアノブを捻り、そのまま背中押し扉を開ける。

そして歌いながら部屋に入れば、腕を組み椅子に腰掛け座っている青年を発見する。弟である彼ら二人は帰っているし、口元は相変わらず布地で隠されヒゲの有無は確認出来ないがカタクリで間違いない。例えこの場で見るのが本当に珍しい存在でも。

「珍しいゾ、君がここにいるなんて。オレに何か用か？ もう君は夕食を食べたのだろうか？」

「……ああ」

「そうか、スープが冷めてしまうから食べながらで悪いが話は聞クゾ」

「それで良い」

無礼を承知で言えば快く承諾される。そして一瞬どこに座るのが正しいのか悩むも直感のままに、というか今までと同じ入り口から入り奥の右手の二番目の席に腰掛ける。

つまり、カタクリの座っている位置から角を挟んでの隣になる。

一度だけチラリと彼の顔を見て反応を伺うも……何もわからない。取り敢えず拒絶されてないから大丈夫だろう。

用意していた料理に合う柑橘類を絞った水をグラスへと注いだ後、創世の女神達や女神ハイリア、そしてジャブジャブ様への祈りを捧げて食事に取り掛かる。

まずは一杯注いだばかりの水を手に取り口に運んで口内に含み、満遍なく行き渡らせた後呑み込む。

ああ体に新鮮な水が行き渡る感覚がするこの瞬間は何よりも堪らなくて体が震える……そしてそれらのオレの行動をじっと見ていたカタクリを見る。

何か話があるのなら話して貰って構わないのだが。

「えっと、カタクリ?」

「本題の前に聞くが歯が無いのに食事は平気なのか?」

「ああ、まだ完全ではないが生えてきているからな! 熱いのも平気だゾ!」

厳しい顔をしていたから何か文句を言いたいのかと少し身構えたがどうやら単純に心配してくれていたようだ。心配というか、好奇心かもしれないが。

とにかく我らの信仰に対してのあれやこれやではなくてホツとした。信仰に対してそれぞれ思うところはあるだろうが互いに踏み込まなければ問題ない。

ハイラルとゲルドに起きたあれやそれをここで再現などしたくない。

笑みを浮かべて彼に歯を見せる。折れた直後にはポツカリと空いていたろう空間に僅かに白いエナメルが生えてきているのがきつと解るだろう。弱つてはいるがオレはまだ大丈夫、数時間も経たずに元通りになる筈。

ああ、ほんの少ししか見えなかつたがカタクリの歯並びも綺麗だったな。オレと同じ一つ一つが鋭く尖っている歯で、ダイフクやオーブン達とは違う形の……あ。そうだ。

「そういうええ君と間違つてオーブんに聞いてしまったのだが、このスープ中々良く出来たのだゾ。良ければ君も飲まないか？」

「……………」

首を傾げながら訊ねてみるも、真顔だったその顔はしかめつ面にすぐ変わる。まあ想定の内、今までの傾向からして断られるだろうと思つて聞いたのだから。

しかしこのスープの出汁を手に入れる元々の理由、彼にとつて色々あるだろう中で融通を利かせてくれた人に聞かない訳にはいかないだろう。

だから嫌がられたり、無理されたり、断られるのは想定内だった。
だが。

「……頂く」

「ゾツ!?!」

返答は予想外なそれだった。まさか……受け入れられるとは思ってなかった、嬉しい！
ガタガタと音を鳴らしながら立ち上がる。

「すぐに用意してくるゾ！　ほんの数分待っててくれ!」

「後でも良い、お前のが冷めるんだろう?」

「構わないゾ！　熱いと舌を火傷してしまうからちよつと冷めるくらいが丁度良いつてものだゾ!」

「いやお前さつき……。……まア良いが」

彼のため息を背に浴びながら部屋を飛び出し、廊下を出来る限り素早く移動する。流石に水を出しての移動は怒られるだろうから足を動かして。ビチビチと尾びれが跳ねているのを感じ、何だか自分の気分が上がっているのを感じる。

厨房へと入り、鍋と金属の杓子を手取る。手をかざせばまだ温かいのを感じとれる。これなら暖め直さなくても平気だな。

具をたつぷりスープをたつぷり注ぎ、オレ特性の海鮮に合うように味をつけた飲み物

と共にトレイ乗せ食堂へと急いで戻る。水分が多いから溢さないようにするのは、水棲のゾーラ族の腕の見せ所というやつだろうか。

片手にトレイを乗せ逆の手で扉を開けてすぐにカタクリの目の前に差し出す。すぐに飲んでくれ！ さあ！ さあ！

……ああ、忙しい事をしてしまう。姉さんにも父上にもせつかちだとさんざん注意されて治そうと心掛けてはいるけれど……でも今回ばかりは許して欲しい。あのカタクリとまた少し仲良くなれそうな一歩が目の前に迫っているのだから。

急かす言葉を口には出さずにじっと見続けていれば眉間に皺を寄せた顔のまま数秒見合う事になるも、小さく息を吐いた後口元の布地を退け一本の匙で掬い一口飲む。

どうだ。美味いか？ 美味いだろうか？ オレは美味いと思うのだがカタクリはどうだろうか。ただただ彼の口から評価される反応を待つしかない。

「……どうだゾツ!？」

けれど結局待てず、訊ねてしまう。味見は何度もしたし不味い訳ではないだろうが、好みというものがあるから不味いと言われても仕方ない事ではあるが気になるのは仕方ないだろう？

そして合わなくて酷評されたなら多少落ち込みはするだろうが失敗というわけではない、改善を考え個人の好みを擦り合わせ次への成功に活かせばいいだけの事。

「……あア。悪くない」

「そうか！ それは良かった嬉しいゾ！」

けれどオレと彼の好みはそんなに遠くなかったようだ。それに口数が多い方ではなく、また厳しい口調を使うカタクリにしては中々の褒め言葉だったのではないだろうか。

思わず立ち上がりかけた姿勢を正し、一通り評価の言葉を喜び嘸み締めた後改めて食事の挨拶と共にスープを一口飲む。

うむ、少々冷めてしまっただけはいるが変わらずに美味しい。特にこの海獣か海王類の出汁をとるところに味が染み込むまで煮込んだ芋が本当に美味しい。舌の上に乗せた瞬間嘸んでないのにほろほろと崩れて……

スープも少し辛みをつけて正解だった。明日の朝はカリカリに焼いたパンを浸けたり、逆にパンに具材を乗せて食べようか。うむ、そうしよう。

「お前の反応、初めてされた」

「ゾ？」

彼が何も言わないからと食事を進めていけば時間にして数分後、やつと言葉を掛けられる。でもそれは……突然言われた謎の言葉でしかなかった。

「反応？　いつの何の話だゾ？」

「……口を、初めて見たろう。おれの」

「ああ……数時間前のメリエンダ、だっけか。その時の話か」

ダイフクとオーブンに部屋に投げ込まれ、歯を折られたあの時の話か。

そうだな。彼の口を初めて見て……オレは口を床に打ち付け歯を折ったあの時の話だな。

「どう思った」

「……どう、と……言われても」

カタクリにそう訊ねられはしたものの、何を聞きたいのかわからず何も言えなかった。どう、という抽象的なものですがすぐに答えられる具体的な質問ではなかったから。

そもそも口を見たと言ってもあの時オレは顔をしたたかに打ち付け、歯が折れた痛みで大分悶えていたし彼を見て何か思っただろうか？　思った事といえば……いや、うん。

口だなーとしか……

……えっと、口……口か。そういうえば、口の端から傷が伸びているのを見たような。そうだ、布地をずらし露になっている今でも見える傷がある！その事か!!

「そうか！ 傷があるが痛くはないのか!？」

「遙か昔の傷だ。痛みなど無い」

違うらしい。心配をして欲しかった訳ではなかったのか。

ん……そういうえば、カタクリの口元は二人と違って何も無いな。傷はあるが違うというし……つまりそういう事か。

あの二人にあつてカタクリに無いもの！ そういうあるなしクイズなのだな！

「ダイフクやオープンみたいにヒゲは生やささないのか!？」

「邪魔な上興味がない」

むっ、これも違うらしい。目尻がピクピクと小刻みに動いている。望む解答が得られず多少イラついているのだろうか。でもこのクイズは難しいのだから仕方ないゾ。

と言つても他に何かあるだろうか……今の、口を出してオレの作ったスープを飲んでいる彼の顔をじつと見る。目が合う。うん、赤色の目がルビーのように輝いていて美しい。尖っている白い歯も室内灯の明かりを反射して……あつ。

「歯の形オレと同じだゾ！ お揃いだな!!」

「もっかいこ」

そして思い付いた解答もやっぱり違ったらしい。難しいな！

見合っていた目線をすぐに逸らし、スープが入っている器を乱暴に掴み一気に流し込む姿をオレは見ていた

人ん……勿体ない。ちゃんと全部味わって欲しかったな。こんなにも美味しいのに。まあ力タクリは食事を元々終えていたし、スープに合う付け合わせもないから仕方ないか。

この野菜オムレツなど卵がトロトロで本当に美味しいな……ああ、フオークに絡み付く半熟の卵が堪らない。こつちにも出汁を加えて味に更に深みを加えたい。

「…………おれが横に、背を付け寝ているのを見たらう」

「……………ん??……………え? ……そうだったか?……………ああ、そうだったな」

すっかり会話が終わったと油断して食事に夢中になっていたオレの思考に割り込むようにカタクリは話し掛けてきた。一瞬何を言われたのかわからず言葉に詰まったが、時間は多少掛かったがちやんと受け止め返答をする。

けれど歯が折れたインパクトでそんな些細な事は忘れていたからまともな返事ではなかったな。確かに寝そべておやつを食べていたような気はするが……でもそれが?

「寝そべって食べるのは体に良くないゾ?……という事か?」

「違う」

「そうか……ん?　　そういうえば仕立て屋が君は立って寝るとか言ってたな……だがオレも水中で寝るゾ!!」

「……………」

カタクリは横になって物を食べる習慣があるという事か。だからいつも食事は一人でしているのかもしれないな、心配をされたりするだろうし。

だが今はオレに合わせてか座ってスープを飲んでいたし……そもそも横になって食べるのを悪だとは言わない、オレらゾーラ族が水中寝をするように誰がどんな何をしようとも誰に何かを言い責める権利など無いのだから。

「……背をつけないのが、強さだ」

「ゾツ、そうなのか!?　　……確かにオレらゾーラ族も尾びれもある為にか確かに背をつけて寝ない……つまり背をつけないオレらは強いのか!?!」

「知らん。……だがおれのは、広めてくれるな」

「了解だゾ!　　別に広めれる知り合い相手もないし、連絡を取っている姉さんもカタクリに会った事はないしな!」

カタクリの低い声が淡々と言葉を紡ぎ、オレはその言葉に力強く返した。その言葉の

真意はわからないがとにかく……えっと、食事方法とその体勢を誰かに言うなどいう事なのだろう。大丈夫だ、オレがここで話せる相手はカタクリかペロスペローしかないのだから！

カタクリは当人でペロスペローがどこにいるかわからない以上オレは誰にも話せないな！ あと料理人達くらいだろうが……カタクリの部下である彼らに上司であるカタクリが秘密といったそれらを話せる訳がない。

しかし……もしオレが地上で寝るとするならば背をつけて寝るしかないがどうか、強くなるのだろうか弱くなるのだろうか。

試してみねばわからないが……今これほど弱っているのにそれをやるつもりはないな。もし今後体が完全回復するような事があれば地上で横になって寝てみようか。まあ、その為には美味しいものを食べ新鮮な水を取り入れるしかないな。

つまりご飯を食べよう。うむ、美味しい！

「……お前は」

「あむ……何だゾ？」

食事を続けていればカタクリがどうにも奇妙な表情で語りかけてくる。本当に……今まで何日もカタクリと過ごしてきたが今日は初めて見る顔ばかりだな。

「何も、本当に気にしないんだな」

「……えっいやそんな事はないゾ？」

何も気にしない？ そんな訳がないだろう。オレ自身の事なら体調を含め様々な事を物凄く気にしている。

ヒレの湿り気や鱗の剥がれ具合は常に気にしているし、今だって歯がどれくらいで生えてくるかとか自分がどうなるかいつも気にしている。

あと遠く離れてしまったゾーラ族の事も心配しているし今現在どんな様子なのか、何か起こってやしないかとか片時も思わない時はない。それに……ラネール島では見る事も知る事もなかった外の出来事を味わい身に付け知れるのを楽しみにもしている。

それに……あー、カタクリ達の事だって気にしていない訳じゃない。どんな人物か、どんな思考回路をしていてオレとどんな違いがありどうすれば仲良く……、んん、いや、まあ。ゾーラ族に何か危険な事をしたりしないかと企んでいないか、とか……

……それこそ、今こうして彼がわざわざこちらに出向き時間をとって話をしているのだって。オレにとつても彼にとつても。それはつまり……彼が何を言いたいのかといええば。

「君の精神統一のメリエンダの邪魔をした事を詫びろ、という事なのだろうか？」

「……………違う」

彼と関わって数日、この短期間でもわかる。彼は拘りがとても強く、妥協を許さない……もしくは妥協をしたのを気付かせないし見せないタイプだ。

「だがそれはオレを掴み上げ放り込まれた挙げ句弱っていたとはいえヒトの歯を折った弟達に言っ……あれっ、違うと言ったか？」

だからその拘りの時間を邪魔するなどの警告忠告の文句かと思っただが。なんだ、これもまた違っていたのか。

カタクリは難しいヒトだなあ……どんな行動をしても、何をしても、彼の望む行動や好ましい行動をするのを至難の技な気がする。別に懐に入り込んだからと媚びるつもりはないが。

オレにだってプライドというものはあるのだぞ、ゾーラ族の平和と安全のためならばそのプライドなど投げ捨てはするが。

オレのカタクリについて思った事そのまま口にしたそれがそのカタクリ当人に引っかけたらしい。

また新たな表情である、少し目を見開き瞬きを数回した不可思議だと言わんばかりの顔でオレを真っ直ぐにみていた。

「何だ精神統一とは」

「これも仕立て屋が言っていたのだゾ。カタクリには一日に一度甘いものを口にしながら精神統一を行う時間があるのだと」

「……………」

「…………なるほど！　そうか、違うのだな！」

カタクリの僅かに動いたその眉の様子でオレが聞いた噂話は嘘だと解った。

まあ噂とは尾ひれ端ひれが付くものではあるし許して欲しい。ゾーラ族ではないニゲンである彼には尾ひれも端ひれもないのにな。そもそも端ひれとは何なのだ、オレらにも多分ないゾ？

「精神統一…………とか、ではない。おれはただ…………人前では食事をしない、そしてその時間を大事に思っている。それだけだ」

「うむ。ルーティーンなど拘りがあるのは悪い事ではないゾ！　…………でも今、オレの前でしているゾ？」

「…………弟達の無礼の詫びだ。滅多にしないこれで許せ」

「そうか、詫びなら仕方ない。許すゾ」

別にカタクリが食べる姿を見たからと詫びられてる気分にはならないが…………だが確かにオレの作ったものを美味しく食べてくれた、それだけでされた事を許してしまいたくなる。

齒なんて後数時間で今の弱ったオレの体でも完全に元に戻るだろうし、それに何より……カタクリの口の重さでわかる。

”何をか”……は解らないが、彼に関する秘密の何かを伝えるかどうかを悩んでいたろうに今さっきの少ない会話でオレに伝えてくれたのだろうという事が。

信用されている、伝えた方が脅しやすい、そもそも全てが企みで嘘……様々な想定が出来るがオレはただ与えられた情報を受け取り飲み込むだけ。

それらを駆け引きとして遊び企み利用するような器用さはオレは持ち合わせない。ただ父上に言われた言葉を律儀に守るだけ。

オレらゾーラ族を舐められないように、そして憐れまれないようにする。それだけ。

……だから、こそだ。

「結局オレに何を確認しに来たんだ？ 直球で言ってくれた方がありがたいゾ」

カタクリの遠回しで理解出来ない不可思議な質疑応答をただ鵜呑みに受け流す訳にはいかない。解りきった顔をして見て見ぬふりをして問題を直視せず無かった事にするなど出来ない、すれば全てが台無しになってしまう。

解りやすく言えば「カタクリの言っている意味が良く解らないから解りやすくまとめ

て説明してくれ」だ。

「お前……今のやり取り全部無駄だったのか……」

そしてそう告げたオレを呆れたような目付きで見られてしまう。肩を落とし小さくため息。

むう……ゾーラ族の代表である王子として来ている以上解らない出来事を解ったように見せ掛け失敗するような変な事は出来ない。だが正直に訊ねるのもまたあまり宜しくはなかったかも……そう思っではいる。

「……おれは人前で背を付けない、人前で食事をしない事を……と、いうか口元を見せない事だな。それを徹底している。だから広めてくれるな」

「ああ、それなら分かりやすい！ 了解だゾ！」

「……………」

だが恥を忍び正直に訊ねたからか彼はちゃんと答えてくれた。まさに古い言葉だが正直者はエラを見れる、というヤツだな！

話しているとなついつい食事がおろそかになってしまふ、ちゃんと熱があるうちに食べないと勿体ない。中には皮に包まれ未だに温かな肉汁が溢れる焼き物もえるから気を付けなければならないが。

「うまいっ。しかし訊ねて良いか？ なぜ口元を隠すのだゾ？ 恥ずかしがり屋さん

なのか？」

「……………以前言つたろう。人は、人と違う部分を拒絶し嘲笑い、排除する。おれは気にしていないし、お前は完全にスルーしたが……………大多数の人にとって、おれのこの裂けた口はそれに該当するようだ」

……………口。……………口？……………ほ、お。……………え、いや本当に何が？確かにスルー

したのでらう、何を言っているのか本当にわからない。

裂けた口が拒絶する箇所？ 笑うところ？ 傷痕があるのに……………心配するではなく、

笑うところなのか……………

……………なんだか、ゾーラの里を出て今までで一番難しい事を言われている気がする。

別のモノだから怯えるじゃない。ヒトは、同じ種族でも大多数のヒトと違うところを嫌がる……………か。

……………。難しいそれらの事を、これからも話していけば理解できるだろうか。斜め向かい前にいる、彼と。

「それで以前トラブルになった、おれだけの問題なら構わなかったが周りを巻き込む……………だからこそ隠している」

「そうなのか……………ならオレは別に口が裂けていようが二個あろうが百個あろうが何も

気にしないから隠さなくて良いゾ」

「……百個あれば流石に気にしろ」

「でも貝は目がそれくらいあるゾ？」

「……………」

そういえばカタクリがおれを人前に出さなかったのはゾーラ族……というか魚人族と思われて歓迎されず面倒になるだろうからと言っていたな。そして実際その露骨な態度で接され重々に理解してはいたが……けれど全く同じヒトであるカタクリに対しても同じなのか。

カタクリとオレは対話をしている、あの時に話した通りに。だが、ヒトとヒトで対話をしててもそれでも交わらない考えの違いがあるのなら……どうすれば良いのだろうか。

うーむ……今のオレにはこのスープに沢山の貝を入れてブイヤベースにしたらもっと美味しくなりそうだ、という事しかわからない。

そんな事を考えながら会話をしていたせいか少しズレた回答をしてしまったらしい。眉をひそめ口元を大きく歪ませ見るからに不満げな顔をカタクリに向けられてしまったのだから。

「ヒトサマを貝と勝手に同類にするな」

「ゾツゾツ、すまない。君の体は伸びるし増やせはするから百の数は出来ても流石

に貝と同じは嫌なのだな！」

貝の美味しきはカタクリも知っているだろうがその素晴らしさや便利さ、愛らしさは知らないのだろう。いつかゾーラの里に生息するシノビタニシを見せて触らせ、食べさせたいものだ。

あ、ゾーラの里といえば……カタクリの口は伸びる。つまり大きくなれるという事だ。なら。

「教育係の大臣がエイのゾーラなのだが口が大きく端から端までこーれくらいあるのだが、どうだ比べてみないか？ 会いたいか？」

「いや全く」

「そうか！ まあ会わせなかったが結婚式には来ないそうだ、残念だな！」
「なら何のために聞いた」

オレの無意味な質問に今まで見た事ないくらい顔を歪めて答えたカタクリの顔が大変に愉快で、オレは声を上げて笑った。

*

久し振りの賑やかで楽しい食事を済ませ、オレはカタクリと共に食後の槍の鍛練を行

おうと話しながら廊下を歩いていった。隠さなくてもいいとは言ったが別に見せろと強制するわけではない。変わらずカタクリは布地で口元を覆っている。

流石に食べたばかりの今の今であの激しい鍛練は厳しい、多少の猶予を貰いたいと頼みながら毛の長い廊下の絨毯の上をもふもふ歩いている。

相手はなにせあの複雑怪奇な力と信じられない強さを持つカタクリ相手だ、食後すぐでなくても弱った体で対峙するには大変な相手なのにお腹が膨れている今、激しく動いても万全のパフォーマンスが出来ず力不足にしかならないだろうと話して……

その時、電伝虫が鳴いた。遙か遠くの廊下にいるオレらにも聞こえる程の大声で。

カタクリから故郷の者と話す専用になれば良いと渡されたオレの電伝虫が鳴いている。

大きな声で、必死に。

オレ専用、と渡されたのだからその番号を知っているのは……決まっている。ゾーラの里の誰か。

と、言っても電伝虫の向こうにいるのは九分九厘姉さんだ。毎日、それこそ昨日だって丁度同じくらいの時間帯に話したのだから。

……ん？ いや、昨日より少し早い時間だな。そもそも姉さんからかけてくるなんて初めてかもしれない、いつもせつかちなオレがかけていたから姉さんはかけられる側だった。

「すまない、鍛練は姉さんと話してからで良いか？」

「ん。しかしまあ、毎日毎日よく飽きずに話せる。飽きないのか」

「飽きるわけがないゾツ、家族は何よりも大事だからな！」

斜め後ろに立っていたオレの言葉にカタクリが頷いたようなそうでもないような……とにかくその動きを見る事もなくオレは電伝虫の受話器に手を伸ばした。カタクリの背はオレよりかなり高いから見ようとするとするならちやんと見上げて見ないと細かなところが確認出来ない。

しかしまあ今はそれよりこつちだ。電伝虫の殻を片手で掴み、もう片方の手で取り「カチャリ」と受話器を上げた……瞬間。

『王子!!!』

「ゾツ!?!」

耳どころか頭の奥まで震わせるような甲高い大声が受話器から鳴り響き脳を揺らした。予想していた姉さん相手ではあり得ないあまりの急な大声に足元がふらつき倒れ

そうになつてしまう。

それでも何とか耐え、強く床を踏み締めて姿勢を固定して会話相手の真似をしているのか大袈裟にも思えるほど表情を動かしている電伝虫を見る。

「そ……の、声はトルフォーだな、どうしたのだゾ？」

受話器から聞こえてきた声は我ら王族直属の兵士であるトルフォーだった。少々生真面目な所があるがしつかり規律を正し常に凜々しくしている彼女の慌てた声など初めて聞いたかもしれない。

いや、そもそもなぜトルフォーがオレに連絡をしてきたのだろう。ペロスペローから使い方を教わった時彼女はその場にいたから出来ない訳ではないが、かけてくる理由がわからない。

『ああつ！ 良かったです王子！ 連絡がついて！ でも大変で、来たんだ！ どうすれば良いんでしょうか！ 防ごうにもどうしようも、意味がわからないんだ、皆傷付けられた！ 魔物ツ、妙に静かだったのはその、きつと！ でも王子には言うなって、でももうどうしようも！ 我らは、でも、王も姫もご無事ではあるが、しかし！』

「ちよつ、ちよつと待て！ 落ち着け！」

まるで限界ぎりぎりまで溜め込んでいた貯水槽が決壊したかのように捲し立てるトルフォー。しかしその言葉は支離滅裂で、言われた言葉そのままを飲み込もうにも要領

を得なくて飲み込めない。

静止の言葉をかけても未だ混乱し続けているのか止まらない彼女に強く呼びかけ、何とか落ち着かせる。尋常でない、明らかに異常事態であるのを感じ取ったのかカタクリは鍛錬場へと向かわず背後の壁へと凭れかかった音が聞こえた。

「何の話をしているのかわからない、落ち着いて肺呼吸をするんだゾ。そしてまず一番最初に何があったか言うんだ」

『は、い……！ シド王子……えつと、えつと……なんだっけ、ドクロのニンゲン……あ、いえ、ドクロ模様が入った布地を纏ったニンゲンの男が里を攻めてきたんだ！ その男が魔物を率いて、我らを襲ってきました！』

「……何だって……ドクロ……？」

しばらく電伝虫から大きく呼吸する吐息とその真似をする電伝虫の姿を見て聞いていた。時間にして十数秒経ち、少し落ち着いたのか荒い息混じりでやっと意味がわかる言葉を紡がれる。しかしその内容には意味が分からなかった。

受話器を上げて捲し立てられた最初の支離滅裂の言葉を聞いた時、オレはゾーラの里に魔物が攻めてきたのだと思った。それこそボコブリンやモリブリン、我らの天敵であるライネルが。そしてそれなりの被害が出たのだと。

だが……ニンゲンだって？ ニンゲンと魔物を間違える訳が無い。それもドクロを

身に着けた……ドクロというより頭蓋骨は魔物も持ったためにどういった理由かは不明でも掲げていたりもするが、布地に模様として纏っている。そして外海に住むモノ達の意味するものとすれば。オレとトルフォアのやり取りを聞いていただろう、後ろに立っているカタクリをチラリと見る。

まさかとは思うが迎えにいった船の人が？ いやだがそんな事をする意味がない、私利私欲で独自で勝手に動いたとでも？ そう思った思考が目に表示していたのかしかめっ面を隠そうともせず近寄ってきたカタクリに受話器を奪われる。

「そのドクロはどんな模様だ」

『なっ、だ、誰だ貴様!?!』

「答えろ、どんな模様だ」

『どんな、って……!』

突如現れたカタクリ相手に困惑しつつもトルフォアが思い出しながらゆっくりと答えたそれにカタクリは無言で、けれども目を閉じた事と受話器をオレに返して来た事で無言の否定をした。自分の海賊団が迎えに行った船の者ではないと

まあ当然だ、迎えの船は早くても明日。それよりもっと延びるだろうとカタクリは言っていたのだから。オレも可能性は低いだろうと考えていたが一応確認したまで。

……ならば、今ゾーラの里を襲っているのは、誰だ？ 何の目的で、我らゾーラ族を襲っている？

『……あ、え……お、王子……』

オレの心の眩きは声に出ていたようだ。カタクリに困惑していたからか少し落ち着こうとしていたトルフォアの声がおレに引つ張られたように明らかに動揺し始めた。だって、だってそうだろう？ なぜそんな事に。あの、美しいゾーラの里がなぜこんな短期間で二度も襲われるような事になったのだ。

『男は、魔物を……シド王子が確認された時にいなかったあの凶悪な獣人をどうやったのか、手懐けていて……！』

オレの故郷、ゾーラの里。晴れの日中は鮮やかな太陽光が照り返す美しい水面を輝かせ、雨の日中は濡れた岩肌の静かで趣がある癒しを提供してくれる場所。夜間は仄かに青緑に灯る夜光石があちらこちらに散りばめられているあの雨奇晴好な自慢の故郷。

それらの風景はついこの前壊された、それでも景色なんてどうとでもなる。命さえあれば、ゾーラ族は……皆はおレがこちらに来る事で守れた筈だったのに。

『王も姫も電気の攻撃にも立ち向かい、それでも最初はなんとか耐えて……！ でも、でも、この前の海賊に襲われた傷でか上手く……限界はもう、すぐ近くに、どうす……』

ああ、王子……アタシ達はどうぞすれば！」

何の為にオレはここに来たのか。ニンゲンと仲良くなる交流目的なんかじゃあない、ゾーラ族の為だ。皆が苦しんで戦っている時にオレは何を呑気にしていたんだ。

守る為に来たというのに傍にいないからと言いつつ、守らねば。守るんだ、オレが！ 皆を！ 家族を！ ゾーラ族を！

「オレが行く！ すぐに帰るからそれまで堪えてくれ！」

行かなければ！ 帰らなければラネール島へ、ゾーラの里へ！

潰さんがばかりに握りしめていた受話器を叩ききり、即座に飛び出さんがばかりに走り出す。……出そうとした。なのに。

「待て」

その腕をカタクリがガツチリと掴み、行く手を阻んできた。この前の鍛錬時とは違い、増やした腕ではない。水を作り出したところでこのオレより遥かに力強い腕力に敵わなければ抜け出せない。

「離せ！ 迎えの船になんて任せる気はない！ 時間が掛かり過ぎる、オレなら何よりも速く行ける！ オレが行かないと駄目なんだゾ！」

「お前一人が行ったところでどうなる、少しの衝撃程度で歯が折れる程弱りきったお前が」

「だからといって見捨てろというのか！ 故郷がピンチなのにオレだけ何もせずにいると!？」

カタクリが掴んでいる腕からなんとか抜け出そうと、むやみやたらに振り払い力付くで抜け出そうと体重をかけ引つ張る。それでも離さないからか肉が締め付けられギシギシと骨が鳴る。

それでも、骨の一本や二本折れたところで。母親にだって折られたんだ、息子に折られたところでなんだって構わない。

「止めてくれるな！ 君に関係ないだろう！ オレの故郷だ！ オレの家族だ！ オレの守るべき民だ！ 血反吐を吐こうともヒレが千切れ失おうとも、例えどうなろうともオレは行く！ 行かねばならないのだゾ!!」

「シド」

ミシリ、と掴まれている腕が鳴った。なのにそれよりも小さく呟かれたカタクリの低

い声の方が耳に残った。オレの暴れる音も、足元も、外の雑音ですら……他には何も音が聞こえないかのよう

……今、まさか。……嘘だろう？

……初めて、名を呼んだのか？ オレの、名を。

振り返り彼の顔を見上げる。朝焼けが射し火を纏ったかのように燃えるように赤い水面のような瞳がオレをとらえていた。

眉を潜めながら見開いていた目が、すつと細められ全てを射抜かんばかりの赤色を研ぎ澄ます。

「落ち着け。行くなどは言っていない、お前一人が行った所でどうなる、と言っている」

「じゃあ……じゃあ……なら、どうしろと、言うのだゾ……」

「おれも行く」

淡々と、それでも全てを絡めとらんばかりの燃えるような真つ赤な目をしたカタクリはそれだけを呟いた。

「おれも共に行く。おれを背に乗せ、お前の故郷のゾーラの里に連れていけ」

水平と垂直の水面

「カタクリ今までどこに行つていたんだ？ オレは一刻も早くゾーラの里に戻りたいのだが……」

「何も言わずおれらがただ居なくなると問題になるだろう、だが事実を伝えた所で問題になるのは変わらないからな」

「ゾ……それは確かにそうだな。君達にも面子があるのだろうし」

「だからそこらを諸々お前らでフォローしろとダイフクとオーブンに頼み脅しに連絡をしてきた。面倒な奴らではあるがそこらは信頼出来る」

「なるほど、君達は三つ子なものな」

「後は必要な物……まア武器とかだな。体内に入れて持つてきた、現地に着いたら渡す」

「そ、うか。そうだな……頭に血が上つていて槍すら持つていない……そんな単純な事も想像出来ていなかった、すまない……ん、体内？ そんな不可思議な事も出来るのだな。流石だゾー！」

「……………フン」

*

ゾーラの里からの衝撃の連絡と救済を求める声を受けて、オレら……つまり、オレとカタクリはつい先日と同じようにオクタロックの墨に染まったかのような暗がり二人で少々急ぎながら歩いてた。

カタクリがどれほど前に食事を終えたのかはわからない、だがオレはつい先程に食べ終えた。

だからあまりに激しい運動は出来ないかもしれない……なんて弱気な事は言つてられない！

こうしている今にもオレの大切な民達は、家臣達は、家族は苦しんでいるのかもしれないのだから！

彼が治める島の島民達が眠りにつくのはまだ早い。家々に灯る明かりに照らされぬよう避け、人々に見付からないようにしながら裏道を進んでいく。

オレもそれなりの体格ではあるがカタクリは更に大きい。下手な動きをすればすぐに見付かってしまい、騒ぎになってしまう。……なのに意識して立てないようにしてい

るのだろう、足音すらろくに聞こえない。

「ところでシド」

夜道を進む足を心に思った衝動のままに、それでも誰にも気付かれないようにとしながら力強く一歩一歩進めていけば少し先の隣から小さな声で呼び掛けられる。

なんだか随分久し振りに呼ばれる気がするオレの、名を。

「お前、エターナルポース」は持つてるのか」

「ゾ？」

遙か高い位置にあるカタクリの顔を暗がりの中見上げていけば、その最中に不可思議な事を言われて疑問のままに首を傾げる。

えた……何だつて？

「永久指針だ。エターナルポース島に戻るなら必要だろう。それともその服やアクセサリーのどれかに

ビブルカードでもいれてるのか」

「……………えつ、と……………」

……………何を言われているのかよくわからない。オレの知らない単語ばかりだ。

カタクリの言っている意味が解らず、言葉も返せずオレはただポカンと口を開けるし

か出来なかった。それはきつとあまりにも間拔けな顔だったに違いない。

訊ねたというのに返事のないオレに苛立ったのか、不機嫌な顔でオレを見下ろしてきたカタクリの顔がなんとも言えない表情で固まり追撃の言葉を掛けられなかったのだから。

見合い立ち止まること十数秒、その間彼から言われた事を考え続けていたが結論は出なかった。

とりあえず……うむ、何を言われたのか解らないが何となく、本当に何となくだが本当に帰省出来るのかを訊ねられた事だけは解ったから答えよう。

「島に戻るのには普通に出来るゾ？」

「……どうやって解るんだ」

「どう……と言われても。普通にあつちにあるなーと解るから……ただ泳いで戻れば良いだけじゃないか？」

カタクリが眉を寄せ訊ねて来たそれに当たり前にゾーラの里がある方向を指差しながら答える。

それは胸の奥底、心臓でも浮き袋でもないもつと奥底に感じるもの。水の中では到底感じれないフツフツと沸き立つような熱い衝動を。その方向に我が故郷、ゾーラの里はある。

……それは……そう、理屈ではない本能で感じるとしか言いようがない。確実に言えるのは彼の言う……島に戻る必要なモノは、オレには必要ない。

「ふむ、帰巢本能みたいなものか？……鮭みてエだな」

「サーモンではない、ゾーラだゾ！」

ヒトサマを随分な言い分で吐き捨て再び歩きだした彼の背を追い掛けその背に呼び掛ける。

カタクリとて本気でオレの事をサーモンと思ってる訳ではないだろう、オレは赤身に見せ掛けた白身の魚ではない。ゾーラなのだから。

……そうだ。サーモン……サーモンか。あの大きく立派なサーモンを、食べたい。それはオレ一人ではなく。

「カタクリ！」

「ん」

「ウチの里近くの川にはマックスサーモンという魚がいるのだゾ、それは美しく澄んだ川にしかない魚なんだ」

「……ん？」

前を歩いてきた彼の前に飛び出し脳内に浮かぶその情景の衝動のままに語る。鮮や

かな紅色を持つそのマックスサーモンが脳の奥底から勢い良く泳ぐように浮かんでくる。

語っている内にその景色が脳内に浮かんでくる。川底の砂粒すらも見えるほど澄んだ清流。そのなめらかな水が岩粒に張り付いた苔を撫でるように流れ続き、その源流がある場所には塗れて輝く石で作られた場所。

滑らかな石。鮮やかに彫られた造形。夜の闇を薄らと照らす淡い翠色。

……それはどんなものにも何にも決して変わりにならずかえがたい、我が愛しき故郷。

それを守る為なら、オレは。

「とても美味しいアレを君にも食べて欲しい、その為にも……改めてお願いだゾ。力を、貸して欲しい」

その故郷を滅ぼさんとした海賊の身内にだつて頭を下げるのを躊躇しない。あの愛しき場所を守り抜けるなら高々オレの体一つ、命一つで守り抜けるならいくらでもなんでも、どんな事でもしてやる。

夜が更け島民達の家々を照らす灯りがあるとはいえ離れてしまえば彼の顔の細かな変化を見るのは難しい。

元々身長はそれなりに離れていて、何より今のオレは腰を折り曲げ映す視界には整備された地面だけしかないのだから。

だから、彼が今どんな表情をしているのかは解らなかつた。軽蔑なのか無なのか、はたまた少しくらい持つてくれていただろう友情を壊す程の失望なのか。

「……。……いいから行くぞ、半日くらいかかるんだろう」

なのに彼は数秒の沈黙の後あっさりとして、オレの脇をすり抜けるよう歩き出した。

下げたオレの頭を、愚か者を嘲るよう押さえ付けるように触れる事もせずすれ違いざまに軽く肩ヒレを押ししてきただけ。

……それはまるで”頭を下げる”……そんな事をする暇があるなら、ただただ前に進めと言わんばかりの……

……、……これは良いのに、良くない気がする。仲良くなれているように感じる、それは良い事だ。良い事の筈だ。

だがこの反応すらも彼らの計算の内だとしたら……いや、考えるのは後にしよう。とにかく今は。

「そうだなー！ 早く行かねばなー！」

再び彼の背を追いかけて、そのまま横に並び歩き始める。

そうして数日前に全く同じような事をしたように、闇の中を彼に導かれるまま進み磯の香りを全身に纏いながら海を固める水飴の上を渡り案外緩やかな波打ち際へと辿り着いた。

一寸先（イチヒレさき）すら録に見えない人工の灯りが何も無い空間。パチパチと音を鳴らし熱さを感じる薪も松明も、心を安らげる夜光石の淡い光も何も無く空から照らす無数の瞬きが辺りを照らしたただザザン、ザザン、と波が水飴の縁を打ち付ける音だけが響いている。

里にいれば滅多に聞く事の無い海特有の音を耳に馴染ませながら、服に手を掛ける。今からラネール島まで泳いで帰るんだ、邪魔でしかないそれを脱ぎ捨て畳む事はしなくとも軽くまとめそこらに置く。隣でカタクリが何事かと驚いているような気配がする。

そのまま足を踏み込み勢いを付け墨を溶かしたような空と海に飛び込もうと構えて…… 僅かにしゃがんだその体勢のまま固まる。

…… そういえば彼、カタクリは泳げないと言っていた。泳げない彼をオレの背に乗せ

るのは確定として……どうやって乗せれば良いのだろうか？

「……カタクリ、今から少し先に飛び込んで海の中で待つからオレの所まで泳いでくれるか？」

「無理だ」

「あ、海の中と言つても海面で待つゾ？ 何も海中に泳いで来いという訳ではなく少しの水面を……」

「無理だ。おれら能力者は一定の水量に触れた途端瞬時に力が抜ける、そして醜く足掻いた後沈むだけだ」

「ゾ!? ……そ、そこまでなのか……」

勢い良く飛び込んで多少そこら一帯を体をほぐす為に泳いで待とうかと思つていたが、どうやらそれは無理なようだ。

彼の持つ不思議な力、泳げなくなる変わりに手にしたそれは想定以上に辛い誓約をかけられているらしい。ほんの少しすらも泳げないなんて……ああ、父上本当に申し訳ない。

同情をするなど言われた言葉を守れそうにない。

恨みと恐慌と狡猾さの認識しかない彼の母親と違い、何日も共に過ごし対話を重ねて

オレは彼を深く知ってしまった彼に対し……到底フラットな目線で見る事が出来なくなっている。

泳げない彼が、それなのにオレの背に乗り海を渡る事を決めオレを全面的に信頼する彼を……今さらどうやって突き放せというのか。

「ふむ、了解したゾ！ では少し泳いで体をほぐしてくる、そしてまたここに戻ってくるから背に乗ってくれ！」

「ああ、解った」

彼にそう告げてから、止めていた体勢を動かし身体中の筋肉を動かしバネを跳ねさせるように伸ばしてまるで羽根が生えたかの如く高くに飛び上がる。

そして重さと重力に任せ頭から水面に飛び込み、勢いそのまま音もなく深くまで潜り込む。

真つ暗な水中は何も見えず、耳の奥にまで響くのはコポポポと飛び込んだ事で産まれた細かな泡沫が弾ける音だけしかない静かな世界。

口から、脇腹のエラから体に残っていた空気の泡を吐き出しそのまま深く深く星の光

が届かない深さまで体をしならせながら泳ぎ潜っていく。

海底近くの深くまで潜れば身体全体を包む込むような冷たさが襲ってくる。その冷ややかさに細かく震える鮫肌が全身を走ったのを感じた後、何よりも勢い良く上を目指して泳ぎ出す。

勢いを止める事なく走り抜け、海面へと飛び出して表面の鱗に付いていた水を飛ばす。そして再び水面へと飛び込み、軽くターンをしてカタクリがいる場所へと戻る。

「すまない待たせたなー」

飴の縁に立つカタクリを見上げて声をかける。背の高い彼と、水面と水平に重なるオレからの視線を目を合わせれる角度まで上げるのは本当に一苦労だった。

……そういえばヒトは服を着るのが礼儀なのだから、なにも着ていない今のオレに触れるのは嫌なのではないだろうか。だから先程睨いだ時彼は驚いていた？ もしやそれが理由で乗るのを躊躇したり……

なのにカタクリはオレのそんな頑張りを杞憂や露知らずとばかりに一蹴し、腕を白くモチモチとした物に変化させオレの体の数カ所を決して離さないよう掴んできた後。

「行くぞ」

ぐるりと巻き付けるように絡ませ、飴の地を蹴りオレの背に跨がるよう飛び乗ってく

る。

一瞬衝撃と体重の負荷に僅かに沈むも、すぐに浮上する。沈んだと言ってもカタクリの腰から胸辺りまでだろう、対した深さじゃない……筈。今は膝下辺りだろうし……でも気を付けねばならないな。

「ん……では！ 行くゾ！」

ズシリと感じる彼の重さに改めて気を引き締め、気合いを入れて大声を出して水面を蹴り暗闇へと勢いを付け泳ぎ始める。

さて、行こう。戻ろう。我が故郷を守る為に。

*

周りに何もない海のご真ん中を割るように。

ざざざ、ざざざとオレとカタクリに打ち付ける規則的な波の音が響く中泳いで泳いで、ただひたすらに泳ぎ続けて進んでいた。

夜空一面を埋め尽くすような輝き美しい満点の星空しかない夜空を時折見上げなが

らラネール島に向かってオレは泳ぎ続ける、こちらの方向で間違いないという説明の出来ない確信を何よりも力の限りに。

少し前に故郷を出てから徐々に弱りボロボロになった体に鞭を打ち、この後の事など何も考えず全速力で全てを置き去りにする速さで泳ぐ。

船も人も何者でもどんなものでも引き剥がし追い付けない程の速さで進む存在にオレはなつていた、それでもオレらを餌として狙ってくる海洋生物もいる。

進む進路の先で大口を開け待ち構えるような大胆な奴も、偶然に近くに通りますが者を襲わんとする奴も……オレは泳ぎ進む事だけに集中するように全てカタクリが対処してくれていた。

ばあん、と通り過ぎた遙か後ろで爽快な音が鳴る。

遅れる音のそれはオレの泳ぎにも彼の動きにも追い付いていないのだろう。

背負ぎ泳ぎ続けているから具体的に彼が何をしているのかは解っていない。見えていないのだから。

オレに解るのは襲いかかってくる海洋生物達が一瞬にして弾け、吹き飛び、障害物としての体を成さなくなる事。

そしてただひたすら泳ぎ続けたその航海が彼の行動により何事も無く進めて来れた事だけ。

それでも産まれ育った場所の清水から離れて衰弱していたオレの体は、猛スピードで数時間夜通し泳ぎ続けるだけで更にポロポロになっていった。

それでもオレの体は動き、進んでいた。それはひとえに里を、一族を、家族を思う精神力だけだったのかもしれない。

そうして彼の統治する島を出て、全てを飲み込むような暗闇に飛び込みかき分け続けて数時間。

海を割り一面を輝かせ夜光を散りばめたように辺りを、水平線を一文字に照らす朝日が顔を覗かせ始めた宵の時、オレは辿り着いた。

我が故郷、ゾーラの里があるラネール島へ。

眩しくて堪らないほどの灯りを持つ太陽を背に纏い、陽光に照らされこの上ない美しさを持つ島へ。

「……何だこの島は……いや、島なのかここは……？」

島の全景が太陽光で照らされ、カタクリにも見えただろう。困惑しているかのような小さな声が聞こえた。

それは波打つ海の上に降り注ぐ滝のように膨大な柱にしか見えない程の水の量、それが遙か上空の空からひたすらに降り注いでいる。

高所から落ちてきた筈の水は海面に落ちた瞬間弾け爆発するような反応をしてもおかしくはないというのに、その水はまるで海に溶け込むかのように当たり前のよう静かに馴染んでいる。

彼が不思議に思うのも無理はない、見える限りの高さには土地はなく今いる下からでは流るる膨大な水だけしか見えないだろう。

この数時間で背にいる事にすっかり慣れてしまった彼が発した言葉に何の違和感もなくオレは聞き入れ領いた。

「そうだ！　ここがオレの故郷、ラネール島だゾ」

「これが島？……いやそうか、どう見ても水柱にしか見えないがこの上に島があるん

だな。確かにそうだ、この流れ落ちる水の量が湧く理由など不可思議でしかないが……
そう言うなら、そうなのだろうな」

背で彼が遙か上を見上げて戸惑いつつ事実を飲み込んでいるのを身動きでの僅かな
感覚で感じる。確かに今現在見えるのは、遙か上空からただひたすらに流れる水の流れ
だけで島の姿の影形も無い。

そんな訳がないと吐き捨てる事も出来るのに信じてくれるらしい。

オレの発言は全て信頼するとの事なのか、数時間泳ぎ続けて辿り着いた場所について
ワザワザ嘘をつく訳がないという色んな可能性を考えた上での発言なのかはわからな
いが……

「ん！ そうだ！ この流れる水の沸き出る場所にオレの故郷、ゾーラの里があるの
だゾー！」

「どうやって上がるんだ」

「オレらゾーラ族ならただ泳いで上がれるな、ただそれは子供ゾーラにはちよつと厳
しい。だから外海へ出て一人で戻ってこれたら、一人前の大人になったと島に認められ
た証だと言われているのだゾー」

「島に、ねエ……まアウチみてエなやり方で入るのがイレギュラーな訳だ」

「そういえば君たちは奇妙なやり方で出て行ったな。あれは入る時と同じなのか」

今の問題が入ってきた方法も謎だが、カタクリ達が島に入ってきたのも同様に謎ではあったが、たつた今あつさりと明かされた。

あの不思議なオクタロックのような生き物が十二モノなのかはペロスペローは教えてくれなかったが……彼が言っていたように、オレが疑問を聞くに相応しい相手であるカタクリに後で聞いてみよう。

全て終わった、後で。

そしてオレもまだ今の膝元くらいしか身長がなく小さかった時、姉さんと共にこうして外海に出て島へと戻れるか挑戦したものだ。結果はまあ……言わずもがなというやつだな。

幾度となく姉さんの背に持つ槍に捕まり連れて帰って貰った思い出がある。

今は、違う。

あの頃の自分を肩に軽々乗せれる程オレは大きく成長した。オレより遥かに大きなカタクリを背に乗せたまま滝登りが出来る程に。

「ではカタクリ、今からオレはこの水の流れに逆らい、時には乗り頂上まで一気に登る。君は決してオレから離れ落ちないよう掴まっててくれ」

「ああ、わかった。力は抜けるだろうが……精励する」

「勿論オレも振り落とさないようにするゾ！ では……」
弱った体で泳ぎ続けて数時間、これから一番の難所といえる場所を登らねばならぬ。

それもオレ一人ではなく多量の水に触れるだけでアウトというカタクリを背負ったまま。だがこれで最後ではない、登って終わりではなく寧ろ登ってからの本番と言っても良い。

気合いを入れるため一度深くまで潜り、全身どっぷりと海水に浸けて潜水して休憩したいがそれは駄目だ。

泳げないのは当然としてもカタクリはエラ呼吸が出来ない。せめてゾーラの衣服を身に付けていたなら、水中での……まあそれでも泳げないという彼にとっては苦痛になつてしまうか。少しは楽ではあるんじゃないかと思うが。

「力を込めろ！ 行くゾッ!!」

まあ無いものを嘆いても仕方ない、水面を蹴り飛び跳ねた後、頭から水中に潜り息を思い切り吸い込む。そして水中を固い岩盤のように思いつき蹴りあげて勢いをつけ、上から落ちてくる水に飛び込み駆け登っていく。

バチャンバチャンと水を掻き分け、跳び跳ねさせて進む。

落ちる水を登るにはオレがほぼ全身を水に浸かるしかない。だから必然的に背にい

るカタクリの触れる水の量も増える。

今まで膝下だけだった触れる量が格段に増えているが、だが頑張って耐えてくれとか言えない。途中で止めて戻れば辛いのはオレではなくカタクリなのだから。

まともを受け止めれば遙か上空から落ちてくる強烈な水圧に体が軋むような痛みや衝撃を感じ、例え自走型の船で無理矢理に上がろうとしてもバラバラに崩れ壊れるだろう。

それをオレらゾーラ族は水の流れに逆らわず流れに身を任せ、それと同時に水を掻き分ける事で突き進める。

当然だ、我らは水の民であるゾーラ族！ 水を生み出し操り、切っても切り離せない絆を作る種族！この程度の水に負けはしない！

「お、い……まだ、か」

「もう少しだ！ 頑張れ、もうすぐだゾ!!」

だが背に乗るカタクリはゾーラではない、ニンゲンだ。声が震えているように聞こえるのは気のせいではない筈だ。

それもそうだろう、ひんやり冷たく心地良いこれは彼にとつては劇物にもなり得るもの。不思議な力を得た代償に多量の水に長時間触れるのは駄目だというのだから。

滝のような水の流れに抗う事無く、むしろその水に乗って滑るように泳ぎ続けているがそれでも彼にとつては負担なのだろう。

落ちないようにと言った時からガツチリとオレの胴に絡まり掴んでいた力強い腕から力が抜けていくのがわかる。時折跳び跳ねて、水面から離れはするもののその短い時間では足りないのだろう。

「この先にある難関さえ抜ければもうすぐだ、堪えてくれ！ 大丈夫、必ずオレは君を里に連れて行く！」

「……あ、あ。わかっ……難関？」

「返しがあるんだゾ！ 水が流れ落ちてるこの先に、下からの侵入者を阻むかのようなものガツ!!」

「な……」

今のオレの全力のスピードで進んでいればそれは案外早くに見えてきた。霧のような細かな水とボタボタと落ちる多量の水が増えてきたから近いだろうとは思っていたが。

大量に降り注ぐ水柱の途中、本当に何が合図というわけでもない場所にそれはある。それはウォーターカッターのように勢いよく外側に吹き出し反り返っている返し

水、表面は上向きでも中は混沌と渦巻くそれは好奇心で登ってくる生き物をここで全て脱落させんとばかりのもの。

水の流れはここで一旦外へと吹き出し途切れるものと下に降り注ぐものと分かれる。だからこそ今までのただ水の流れに乗り逆らう単純な技術だけで来た者ではここで弾き出される。

そしてこれがあるから水を登らずに上がるには何も無い所から空を飛んでくるぐらいしか思い付かない……正直あのオクタロックも結構怪しいと思っている。

降りるならともかく上がるには下から吹き上げる風も無く、時折上から吹き付ける風などをどう対処しているのだろう。

今ゾーラの里を攻めてきたという敵はどうやって侵入してきたのだろう。

……まあ良い。それはこんな状況で考える事ではない。とにかくその厄介なそれが、もう、目の前に迫っているのだから。

「……!!」

「カタクリ、大きく息を吸ってしつかりオレにしがみついているんだゾ!! 絶対に離すな!!!」

困惑なのか呆気に取られているのかそれとも力が抜けきり声を出す余裕も無いのか、

後ろでカタクリが返事もなく体を固くさせていた。それでもオレの声に答えるようにここ数時間で一番強く体を掴まれた。

更に加速し今のオレの全速力で水面へと突っ込む。勿論どこでも良い訳ではなくちやんと入り込める流れを見極めて。

殴られたような強い衝撃と体を切りつけてくるような鋭さの流れに乗り、外側へと向かう水流の下面の表面をなぞるかのように泳ぐ。

もし今外から誰かに見られるなら水で出来た天井を泳いでいるように見えるかもしれない。

「……………」

水の流れに完全に乗る為、オレだけでなくカタクリの頭まで完全に水中の中に潜った為だろう。カタクリの体から完全に力が抜けて、掴んでいる感触すらもはや無くなりかけている。

オレの背から離れそうになる前に腕を伸ばし掴み、胸元の方へ抱え込むように移動させる。

正直背に乗せていた時と水の流れが変わり、抱え泳ぐのは辛いものがある。

だが不得意な場で、水の中で呼吸さえも出来ないというのに極限まで頑張ってくれた

カタクリの頑張りに応えるようにオレも頑張らねば。

そしてカタクリを抱えた体勢のまま外側へと弾き出される前、水流の流れが弱く薄くなつたウォーターカッターの内部に突入し……そのまま突き抜け通り過ぎた。

ざばあん、と空中へと跳び跳ねて水飛沫を辺り一面へと飛ばす。

ああ、朝日に照らされキラキラと反射するラネールの透き通る水はなんて美しいのだろう。

背に乗せていた時と違い、胸元に抱えたままではずつと水の中に浸けてしまう事になる。そうならないように何度も何度も流れ落ちる水柱を登りながら跳び跳ねて、空中へと飛び出す。

その一瞬で呼吸が出来ていたかはわからないが、何もしないよりはマシだろうと。

そうする事時間にして一分と少し、そうしてようやく。

水面を蹴り飛ばし弾けるような水音と共に。

「抜けた!! 到着したゾー！」

「……………ぐ、う……………」

垂直へと流れ始める為にか相当の速さの流れの水を飛び出し、高々と空に向かつて飛び上がったあと水面でない場所へと着地する。流るる水面近くにある短めの草と小さな小石が転がる地面へと。

そうしてオレ達……………オレとカタクリはやつとの事で辿り着いた。

我が故郷、何よりも大切である家族や一族、そしてゾーラの里があるラネール島へ。

「……………はあつ、はあ……………は、あ……………」

胸元に抱えていたカタクリの頭を離し、そこから辺の地面に転がす。

当初転がしたままの体勢の横向きで咳き込んでいたカタクリが大きく息を吸った後、一瞬動きを止め、そして口元の布地を乱雑に剥ぎ取った後仰向けに寝転がり上を向いた体勢で大きく何度も咳き込んだ。

……………背を、地面につけたまま……………。

「……………カタクリ、着いたゾ。お疲れ様だ」

「……………ああ。お前、こそ……………」

頭によぎったそれを口に出さず、オレは彼へと言葉をかけた。

膝立ち状態だった体を起こそうと足を持ち上げようとすがぶるぶると痙攣しているかのようで上手く動かない。どうやら弱った体に鞭を打ち一晚中泳ぎ動かし続けた挙げ句、この遙か上空まで泳いだ疲れのツケは歩く力を振り絞る事さえ出来ない程奪ってしまったようだ。

仕方なくペタンと地面に座り込んだまま腕を使つてズリズリとカタクリに近付く。近寄つてきたオレの気配か音か、彼は片目だけを開きオレの姿を確認した後目を閉じ返事を返してきた。

さらさらと風がオレの体を撫でていく。ゾーラの吸収力の良い体の表面に水滴はもうついていないが、流石のラネール島。

濡れていない体でさえわかる程、ここの風は外海よりひんやり冷たかった。

水を吸収せず弾きもしないニンゲンであるカタクリは身に付けた衣服は頭部にある毛並みさえぐつしより濡らしたまま地面に転がっている。ちよつと寒そうだな。

そして大きく長く息を吐いた、かと思うと腹筋の力だけで反動もつけず上半身を起こして口元に巻いていた布地を取り払い強く強く絞り始めた。

彼が腕を動かす度にたっぷり吸い込んでいる布からポタポタと水が地面へと落ちていく。

その止まらない流れを何気なく目で追つていればふと、カタクリが顔を上げて視線を遠くへと向けているのに気付いた。

その視線の先を迎れば……ああ、なるほど。

「美しいだろう?」

「……ああ。これは、凄いな」

「うん、そうだろう。この景色……これを見ずにラネール島を語るなど出来ないんだゾ」

そう言いながらカタクリと共に真つ直ぐの視線で見つめたのは、視界一面に広がる美しい蒼の世界だった。

外からの驚異から覆い囲むようにそびえ立つ高い山々。そこからの段々となるなめらかな岩肌とその表面や谷間を流れ落ちる水飛沫。外海にいるより近くに思える空と、遙か下……本当に遙かに遠くにある海が混ざったような色をしている水面。

そこには空と海の境目すらも無く、そこに流れる透き通る何よりも清らかな水が海から上がり登ってきている朝日の光でキラキラと輝いている。

こんこんと高い場所から落ち、ゆっくりとした坂を流れ進む水音はぱちやりぴちやり、ころりぴちより、と心地よく鳴っている。

夜明けから間もないそこは、夜の帳すらも輝かす薄らとした蒼緑に輝き跳ねる水飛沫の霧と共に幻想的としかしいようなない景色を作り上げていた。

これが、オレがずっと見たかったモノ。懐かしき故郷の景色。
そして、オレの全てを賭けてでも守らねばならないモノ。

「……さて！ 里に早く戻らねばな！ こっちだゾ……つと!?」
いつまでも懐かしき故郷の景色を見ながら休んでいたいがそうもいかない、オレは守る為に帰ってきたのだから。

走り駆け出そうと立ち上がろうとしたというのに、足は上手く動かず崩れ落ちそのまま前のめりに倒れかけて慌てて肘をつく。ザリツ、と肘のヒレが地面の草と土に擦れた。

……どうやらオレは、思っていた以上に体力を消耗しているらしい。足の痙攣が収まったような気がしたから動こうとしたのに、動かそうとしてもどうにも上手くいかない。

ああなんて事だ情けない。感情と勢いでは、限界を迎えた体はもう動かないなんて。

「……泳ぎすぎて動けないのか」

「動けなくはない！ ただちよつと……まだ体が言う事を聞かないだけだゾ！」

「何の見栄だ」

首筋の布や上半身の服を絞り終わった後バサバサと扇ぎ、足先の布を絞ってから靴を脱いで中の水を出していたカタクリ。

一応満足するまで水を切れたのだろう。衣類を身に付け立ち上がってから道端に落ちていた小石を拾うかのように左手でオレを小脇に抱え持った。

「……え…!？」

あまりにそのあつさりとした行動に一瞬反応が遅れてしまった。目線が立ち上がったいつものオレよりも高くなり、その慣れない高さに戸惑いながら彼を見上げる。

「回復を待つ気はない、お前の足に合わせるよりおれのみが進む方が速いしお前もそれを望むだろう？ そのままで目的場所まで案内だけしてろ」

「あ……ああ。すまない、ありがとう……そ、その上り坂を上がって左側の岩肌が出っ張っている崖壁を斜め右だゾ！」

「わかった」

カタクリはまるで重さを感じさせない程軽々とオレを抱え持ち、そして戸惑いながら

も言葉を続けたオレの示した道の先へと跳ぶように走り、足を進めた。

彼の身体能力が優れているのは槍で鍛練をしあつたオレは良おーく知っている。高い身長に見合う筋肉を持ち更に素晴らしい瞬発力や洞察力を持っているのだから。

しかし本当に速い、よく知る道中が見えたかと思えば案内間もなくすぐに後方へと過ぎ去つていく。まるでリト族の戦士が放つた凄まじい速度の矢のようだ。光陰矢の如し、とはこういう事なのだろうか……恐らく違うな。

小脇に抱えられこんな荷物かのように彼に運ばれるのは少々恥ずかしいものもあるが、それよりも速く里へと着くのが優先事項だ。情けない感情は押し殺しありがたく移動を任せる事にする。

つむじ風のように進むカタクリなのに木々や飛び出た岩肌にぶつかる事は無くスイスイと進んでいく。

そして遠くに魔物の姿が見えたと思えば、その姿は一瞬で近付き、それが青色のリザルフオスだと判断出来る間もなくいつの間にかその姿を見失う事になる。

顔を慌てて後方へと向ければ無残にも転がる角。そしてオレを抱え持たない左腕にはいつの間にも持ったのか長い長い槍を掴んで持っていた。正に目にも止まらない早さで討ち取つたのだろう。

……うん、本当に凄いな。速度や力強さや当然だが、何よりも決断力と行動力と躊躇の無さが。何せ初めて見る存在だろうに一切の迷いもなく手に掛けて……

ああそうか。それが、彼ら“海賊”という存在だ。忘れないようにしなければならぬのに、つい忘れてしまう。

それもこれも他でもない、カタクリだからだな。

とにかくカタクリの足のとんでもない速度に、島の端から里まで陸を行くルートでは間違いなくオレの人生で過去最速の速さで到着する。

そう思った時だった。

「ツッ」

あと少し、あと数個切り立った崖を迂回して下る道を降りて行けば到着するという時にソイツは現れた。

遠くまだ先にある崖の向こうから顔を覗かせたそれは大きな魔物。額にある長い角はうねり鋭く、ルツタのように伸びた鼻先を震わせ、長い槍を持った手を大きく唸らせ歩いているそれはモリブリンと呼ばれる存在。

それもただのモリブリンではない、黒い体に黄緑色の明かりを灯したあれは……

「……雷のモリブリン!!!」

我ら水棲の水の民、ゾーラ族には天敵である電気を纏った魔物。

「……何だ？」

「あそこにいる奴だ！ 自らの体内で電気を発生させ、表面に纏いながら襲ってくる厄介な魔物だぞ！ 貴金属の武器や身に付けていれば更に危険で……あつ、駄目だ、その手持つ槍で攻撃しては感電してしまうぞ！」

電気を身に纏うモリブリンがもう少し先に立ち塞がっている、それも……ああつ、おまけとばかりにエレクキースを複数匹従えている。

カタクリもオレの過剰とも言える反応に妙だと気付いたようで勢い良かったスピードを徐々に緩め、ゆっくりとそれに近付き……そして一定の距離で立ち止まった。

「雷……悪魔の実では無いだろうが、どういう仕組みだ」

「どういうと聞かれてもそういう生物としか言いようがない、貴金属は感電してしまうから気を付け……んんっ!?!」

雷の力を持つあやつらと戦うのならば前もつての準備や心構えは必要だ。オレはカタクリの小脇に抱えられた体勢から抜け出そうとジタバタするも、彼の力が強くて全く抜け出せ気がしない。

まるで丸太のように太い腕から出れたのはオレが頑張ったからではなく、カタクリが離しオレを地面に置いたから。

そして、貴金属では攻撃出来ないと言った瞬間だと言うのに手に持っていた槍をオレに投げ渡してきた。それも、ちよつとだけ仮に持つておいてという振る舞いではなく……邪魔だから持つておけと言わんばかりに少しだけ乱暴に。

慌てて槍を受け取り彼を見上げる。カタクリはオレの方を一切見ず真つ正面に立つ雷のモリブリンを睨み付けていた。

「カ……タクリ、戦るつもりなのだ。それならばオレも一緒に……いや、オレがやるから君は……」

「戦う、そのつもりだ。だが手を借りる気はないし苦手だというお前がいると邪魔で足手まといだ、先に行け」

カタクリから渡された槍を構え、カタクリと共に並びモリブリン相手に構えようとした瞬間あっさりと梯子を外され少々乱暴に背を押され、放り出される。

予想外なそれに一步二歩、気が抜け転ばないよう歩みを進め、水溜まりとその水が土に染み込み抜かるんだ泥を踏み締め止まる。

再度カタクリの顔を見上げれば顔は一切モリブリンから動かさないうまま、視線だけを

オレに向けていた。

目が合う。……違う。近くに電気の魔物がいるからと油断して痺れてはいけない、気を引き締めねば。

「カタ……クリ。行け、とは……し、かしだなモリブリンは手強い相手で二人でやれば……」

「何度も言わせるな邪魔だ、早く行け。……お前の気配はもう覚えた。すぐに追い付く。行け」

食い下がろうとしたオレの首根つこを掴み少々乱暴にまるで小石でも投げ捨てるかのように正面に向かって放り投げたカタクリ。雷のモリブリンの遙か上空を越える高さで。

何をされた？ なぜオレは水中から飛び出した訳でもないのに空を飛んでいる。

予想外のその行動に何にも触れないというのに、手をバタバタと動かす。

上向きだった角度が下向きに変わった時に遅まきながら慌てて現状把握をして空中でぐるぐると回転して地面に足から見事着地する。

うむ、点数をつけるなら満点の着地だ。少しのふらつきも歪みもない。

……そして、振り返らずに駆け出した。彼から手渡された一本の槍を右手に握りしめ、後ろで空気中どころか地面を這い回り一面の範囲を壊さんばかりのバリバリと嫌な音が鳴っているのを聞きながら。

背後で響き鳴るあれが雷のモリブリンであるあいつが放った攻撃だと解っている。その凄まじい爆音と共に空気を震えさせるような電気攻撃……もしもオレがあのまま場に残り、喰らっていたとしたら……いや考えまい。

”もしも”は意味のない事だ。考えたとしてどうにもならず、今現在からの先……良くなる事の為に、今後の為に動くのはまるで違う。

ピチピチと全速力で走り、ゾーラの里を目指す。もう目と額とヒレの先だ、全景が見えてきた。少しだけ破壊されて名残が見える里の姿が。

……そういえば。

オレが彼、カタクリと繋がる理由となった一番の接触理由は彼の母親による電気攻撃だった。女王であり彼の母親である彼女に平穏を壊された。

本当になぜだろうか。

……それがふと頭によぎった。壊されたそれに対して恨みしかないが、彼がその電気に苦しむのはオレが……望む事ではない筈だ。

すみません父上、当初守ると決めた誓いがオレの心の中で揺らいでいる。もはや隠しようもない程、情が沸いてしまっている。

……だってそうだろう!? 他でもなく泳げない彼がこうしてここに来る為にオレを信用し、更に巻き込まないようにと離して先に行かせ、その場でとどまり戦ってくれている。

あんな必要最低限の一步も二歩も踏み込まれた対応をされて情が湧かないなんて考えられない!!

……そうしてオレは彼を礎に置いて、無事に辿り着き帰りついた。我が故郷のゾーラの里に。

「……何だ、これは?」

そして目の前の想像だにしなかった光景に思わず漏れた言葉は、里に流れる水音にか

き消されていった。